

筆  
子

用





## 例言

一此書は前田正名氏が實業團體組織の爲め全國奔走の際、予請ふて之れに同行し或時は自ら其鼓吹者として前驅の任に當り、或時は實業視察の目的を以て之に追隨したり、當時予は旅舎に着すれば客去るの後半夜燈をかゝけ其日乃行程を記したるも乃にして全く一家の日記帳なり、爾來其まゝ行李に藏め置たるもあり、又は當時既に新聞雜誌に投じ公にしたるもあり、今取めて一卷に編す。

一此書編纂の目的は一は他年前田正名氏乃傳記を編述せんとするも乃、參考に資し、一は自家の紀念として他日の參考に供し、益國家公共の爲めに發憤興起せんことを期するに在り。



一此書記述する所、或は一地方の巡回に審にして或一地方の巡回に簡  
 かるあり、又中には屢々巡回したるも全く記述を欠きたることあり  
 之れ日夜兼行に類する奔走の場合止むことを得ざるなり、讀者幸に  
 予の微志を諒せられよ、

一此數年間予の旅行に付、二十七年迄は、全く一己の私財を費し、二十七  
 年後は概ね五二會中央本部の支出を受けたり、此支出を得て而かも  
 團體の爲めに未だ寸功なきは、深く自ら慚愧の念に堪へざる所なり

三十年十月

峽陽山人

全國週游日記

目錄

一周游一班	一	丁
一五二會小歴史(上)	六	丁
一五二會小歴史(下)	一	丁
一福井紀行	一	六丁
一東北紀行	二	四丁
一北海道紀行	五	二丁
一嵐峽園游會	七	二丁
一四國紀行	七	四丁
一淡路島	八	六丁



一 入袂の記	九〇丁
一 九州茶業大會	九五丁
一 九州農事大會	九六丁
一 紀州行	九七丁
一 客窓隨筆	九八丁
一 奥羽紀行	一〇三丁
一 山陰紀行	一一八丁
一 大會雜事	一二七丁
一 前田正名氏を送る	一三〇丁

附録

一 雁信片々

# 全國週游日記

西川太次郎著

## ○週游一班

一 明治三十五年十一月前田正名君北陸巡回に付福井縣下に隨行し同縣下福井市鯖江大野勝山等各町を巡回す。

(紀要) 福井縣下に於て巡回凡一週日廻る處談話會を開き農工商團結の必要を懇説せり就中同縣下羽二重織は近來頗に一大物産とありしも稍く粗製濫造の弊に陥るの狀あるを以て特に營業者の反省を促し其將來に對して畫策せんことを注告しぬ。

一 明治二十六年七月全國茶業大會を静岡市に開く。

(紀要) 九州、關西、關東、茶業三大會成り此に於て全國大會を茶業の最盛地に開くに至る前田君苦心經營の功遂に現る而て之れ實に實業團體組織の率先者たり。

一 明治二十六年七月末より九月上旬に至る朽木、宮城、岩手、青森、北海道各地を巡回す。

(紀要) 此行仙臺、盛岡、青森、八戸、其他の各市邑に於て農工商團結の必要を説く當時未だ日清の事を豫期するものあらざ實業社會の事猶戰爭の如しと云へるに及べば人々奇異の感想あるが如く中には北門の鎖鑰たる北海道人士の冷淡ありしには一驚を喫せり。



一 明治二十七年一月神戸に於て二府十六縣茶業大會を開く  
 一同四月京都に於て第一回五二會大會を開く

(紀 要) 五二會の起因遠し故に一たび團體組織を促かすや天下翕然として響の音に應ずるが如し而かも近視眼者流は之を以て一時の會台に止むるものかの如く思惟したりき今日より當時を回顧すれば實業社會の進歩益し亦其將來を推想するに難からず

一 同年六月十五日五二會兵庫縣本部發會式同年七月一日五二會岡山縣本部發會式等あり爾來各地五二會勃興す

一 同年八月十八日より二十日迄石川縣金澤に於て關西蠶糸業大會を開く

(紀 要) 之れ蠶糸會組織の萌芽あり而して此前後九州及關東各地蠶糸會を開き三面相應じて遂に日本蠶糸會成る

一 同年八月二十六日には五二會福井縣本部成り同月二十九日には五二會高島郡木綿縮業部成る

一次で同年九月一日より三日間京都に於て全國燐寸業大會を開く

(紀 要) 燐寸業者夙に海外貿易上に憤慨する所あり全國燐寸業者の團結を計り此に始て燐寸業會成る當時の義憤に對し當業者の現況を見る今昔の感果して如何

一 同年十月愛媛、高知、徳島、兵庫各縣下を巡回す

(紀 要) 四國の地舟楫の便多しと雖とも其縣下を歴説するに盡く峻阪溪谷を過ぎれり愛媛及高知五二會皆此時に於て發會式を擧たり

一 同年十一月滋賀縣十三郡産業大會を彦根に開き并に日野八幡各町に於て實業談話會を催す又同月二十九日日本燐寸業會東京支部發會式を兩國鳴門樓に擧ぐ

一 同年十二月東京に於て農事蠶糸二大會并に實業各大會聯合會を開く

(紀 要) 全國實業八團體此年此月を以て全く就る天下實業社會の趨勢亦茲に決せり蓋し是れ實業上に於ける天王山ありき

一 明治二十八年一月二十五日山梨縣に入る一は五二會發會式一は山梨農會大會に臨まん爲なり

(紀 要) 前田君曾て此縣に知たり縣民餓食號哭して歡迎す予亦曾て此地にあり何等の因縁

一 同年二月四日福岡縣上妻郡福島町に第三回九州茶業大會を同六日福岡市に於て第三回九州農事大會を開く

(紀 要) 多田元吉翁と予は前田君代理として此會に臨めり前田君病ありたればあり而して今多田君亡し悲哉

一 同年三月十五日愛媛縣大洲町に於て全國木蠟業大會を開く

(紀 要) 八團體一を加へ此に木蠟會就る爾來各地に木蠟會支部を設置す

一 同年三月三日名古屋に於て五二會品評會を開き同月四日滋賀縣甲賀郡實業大會を開く

一 同年四五六三ヶ月間京都に於て第四回内國勸業博覽會五二會并實業各大會あり



(紀要) 博覽會に對し前田君の催したる月曜會あるものが如何に間接直接の効果を與へたるか識者或は知了せん而して全國實業大會を此際京都に開きたる一大利益は實に莫大なるべし

一 同年九月静岡五二會品評會を開く

一 同年十月京都に於て五二會品評會を開く

(紀要) 京都の品評會は博覽會の後を承けたるに拘らば偉觀世の耳目を聳動せり品評會の舉漸く一般實業家の重なる所と爲る

一 同年十一月福井縣下若狹國に巡回す

(紀要) 此行大に若狹國實業家を警醒し同國實業團體の萌芽を見る

一 同年十一月大阪の實業家前田氏を大阪ホテルに招き戦後の經濟策を問ふ

(紀要) 前田君談話して曰く今にして戦後の經濟を論ぜ汪の甚しきものたり多年外國貿易の失敗を醫治せしめて俄に日清戦争後のことと云我共何の謂たるを知らざる宜く實業上の組織機關を整頓し根本的經濟策を講すべしと

一 同年十月十一月の交山陰道を巡回す

(紀要) 此行を以て全國盡く巡回し盡せり鳥取縣下は實に最後の巡遊に屬す

一 同年十二月愛知縣下を巡回し常滑五二會支部成る

一 明治二十九年一月東京に於て全國實業各團體大會を開く

(紀要) 従前の大會は概ね一人一己の資格を以て出席するもの多かりしが全國各地已に各團體本支部の設け備はりしを以て漸次代表者を出席せしむるに至り團體の結合漸く鞏固と爲れり

一 同年二月十九日名古屋に於て愛知岐阜陶業大會を開く

一 同年二月神戸に於て日本蠶糸貿易株式會社創設會を開く

(紀要) 蠶に生糸検査所起り次て貿易銀行、倉庫會社等起る今亦此地に蠶糸貿易會社の起る蓋し偶然にあらざらざるべし

一 同年三月一日肥前有田陶業共進會を視る

一 同年四月十四日滋賀縣木の本實業談話會あり

一 同年四月より五月に至る六十日間京都に於て五二會全國品評會を開く而して此間別の第三回五二會大會并京都府下實業各大會を開けり

(紀要) 五二會ある團體を形成せし以來年を閱する僅に三星霜而も全國大品評會を開くに至る假へ即評會の組織未だ十分ありと云能はざるも五二會成立以來の狀勢に徴すれば其結果や真に多大ありとすべし殊に此年を以て宮内省より恩賜金の御沙汰あるに至りては五二會の面目何物か之に如かんや

一 同年六月前田君九州巡回の途に上らる予は送きて兵庫縣下明石に赴き同地實業談話會に臨む此後専ら近畿地方に在り





## ○五二會小歴史 (上)

事の就る就るの日に成るにあらざりて其萌すや遠く且つ久し、夫れ五二會の公然世上に團體の形を爲す、日猶淺く年猶久しといふべからざり、而かも隆々然として其勢力の増加すること驚る世人豫想の外に出づるを疑ふものなきにあらざり、蓋し是れ偶然あらんや、則ち五二會の今日あるもの其胚胎や遠く、其計畫や久し、一朝一夕の計畫と多年培養の餘に基くものとは素より同日の談にあらざるあり、今夫れ五二會の由て來る所を討ねんか、夫の興業意見編纂の時、業に既に成竹ありしを想ふに足る、請ふ試みに其成行如何を觀察せん。嗚呼事は既に過去の一事とはされり、往年前田正名君が官命に依りて興業意見と題する一書を編成せられ、當時君は其表題に冠するに第一回の三字を以てせらる蓋し、二回三回乃至四回五回して二十三年國會開設の時に至り、經濟上の問題を決する朝野の参考に資し國是を定むるの基礎たらしめんとせられしあり、其然る理由は明かに君の著所見に見へたり、曰く

其一回にして止みたるは余の志にあらざるあり是を以て明治二十二年農商務省に復するや直に請ふて調査に従事す然るに省中各局の調査漸く成稿を告げ府縣の調査半ばに達せ未だ眼睛を點せるに至らざりて止みたり云々

又曰く今人あり一字を書せんと欲し筆を執りて先づ一書を點し未だ再筆を下さず人あり之を看て是れ何を意味するかと評す豈妄からざりや嚮きの興業意見及農工商沿革史は書の第一畫あり後の農工商調査は第二筆を下して未だ筆を速らざるものあり誰か能く其大の字たり其本の字たるや知らんや云々

更に顧みて去明治十年の交、君が直接貿易意見書を公にせられ策を政府に獻じ又之を民間に説かれたること憶へ、結果は素志と違ふと雖ども商權回復の爲めに焦心苦慮の狀、今日と毫も異なることなきを認むるに

餘ありといふべし、若し夫れ日本國の容體書とも謂つべき興業意見要旨を一讀せん乎、今日機關組織を要する第一著の調査は全く此に存し而して日本農工商の方針は一に此に基かれたるを諒知するに難からざり、五二會大團體の結合、優然として天下を濶歩する其因亦くして止むべけんや、要旨に曰く。

孰思ふに我國の土地人口は敢て歐洲の強國に遜らざるあり、而して維新前幾千万金を費して開明國の制度文物の輸入を務むるも海外諸強國と對等の地位に立つことを得ざるものは何ぞや、海關稅權の恢復せざるに因るか、將た治外法權の撤去せざるに由るか、抑も又法律の完備せざるが爲めか余の見所を以てすれば是れ對等の實力を有せざるが爲めあり、故に日本の日本たるべき目的を達するは我農工商をして強國の農工商の地位に進ましむるに在り、之を爲す如何、先づ我が農工商の地位を詳細に知了し次に其將來の進歩を圖るを要す、是を以て余は案を立て草を起し首に我農工商の現況を述べ其原因を究め、次に内外の參考を附し中ころ殖産興業に要する精神を論し國力の現在を察し其將來を考へ、終りに興業方針の大意を叙す、稿成りて之を農商務卿に呈す、卿之を嘉し本案の調査を遂げしむ、是に於て外は府縣に向て地方勸業要務十餘件の問題を發し、内は僚屬を督して諸般の材料を蒐集せしめ一部を編成して之を九編に別つ、綱領、緒言、現況、原因、參考、精神、國力、地方、方針是れあり、之を第一回興業意見と爲す、其旨趣内閣の嘉納する所とあり、允可を得て之を各地方長官に頒ち農商務省の主管に係る施政の方針を上下に發表す云々

文中所謂先づ我農工商の地位を詳細に知了するにあらざれば以て將來の組織機關を如何にすべきやを知るに難し、何とされば空想と謬見とは毎に根據なき想像より來る空中樓閣に過ぎざればあり、現に其緒言には國力増進の度合、現況の部には農工商現在の狀況に係る弊害と障礙、原因の部には其因つて來る所を考究し參考の部に於て法規立案の慣例規則、外國の事例を示し、國力の部に於ては或は各府縣の實力情況、或は將來



に經營すべき事業を示し、就中日本の重要物産と稱すべきものを擧げ産額の増加を圖るべきもの又は品質其他の改良を圖るべきもの等に付將來の豫算を立て、其方向を示せり、其他地方の部に於て諸營業の情勢、勸業の要務、十ヶ年間に増進すべき見込める重要物産の産格價格、府縣農工商業の損害及金融の比較表を始め、農工商大體の方針等苟も五二會其他實業團體をして事の此に至るは必至の理勢たる材料悉く之を網羅し盡さるはよし。

故に又農工商調査の要旨中にも左の如く云へり。

調査を爲すは漫りに人の意見を以てせず彼れ事物其ものに必要を問ふて之を處理し誤謬蹉跎からしめんが爲めあり

と旨ある哉言や、實に二十年前商權回復の計畫は時に失敗に歸し時に世人嘲笑漫罵の中に葬らるゝことありしと雖ども、百折不撓の精神と終始一串の事實とは遂に五二會其他の實業團體を形成したるを見る、二十年後の明治二十七年第一回五二會大會の時君は如何に其境上に絶叫したる乎曰く、

正名當初思へらく若し萬一出席者少數にして此會同の目的を空ふする如きことあらんか、之を以て毫も其素志を枉くることなく、更に熱慮一番全國の營業者を鼓舞作興し三回五回乃至十回に至るも此計畫を放棄せせ一意國家的觀念を營業者に注入し將來此種の會同には必らず出席すべき氣風を養成するの責任を自期したり云々

又曰く

正名は素より深遠なる學理を説ひて一時の名聲を傳へんとし又は一日の意見を唱へて世人の喝采を得んとするが如き人々と異り(中略)生を終ふるまでは實踐し躬行し失敗に屈せず小成に安んぜざるの決心を有するものなるにより一朝好事の爲めに斯の計畫を爲すものにあらざることを特に諸君の注意と諒察とを請はさるべからせ

讀者は必也や記憶せん、當時君の大會趣意として演説したる本旨は是れ盡く二十年前の調査に基きたる前記計畫に吻合して寸毫の差異なきことを、而して其大會宣言中京都市に大會を開きたる理由の如き、當時人の怪異せしに拘らせ、五二會の中心は京都に在り、京都は美術工藝の中心たること現實上疑ふべからざる次第として始め異みたる京都人自身を始め國民の認めて疑はざるに至れり、其他五二品現在の状況、五二品貿易の現状、五二品を結合せる理由等一々事實的中し人をして達人の卓觀に嘆服せしめざるはなし。元來五二會の成る、大要斯くの如き起因あり、而して本會の召集に當りては先づ織物、陶磁器、金屬、漆器、製紙々製品の五品營業者を以て一團と爲さん計畫ありしに敷物、雜貨の二業者更に本會に賛同せんことを希望せるより前の五業と後の二業と相合し此に五二會ある七種業者の一團體を見るに至れり、當年發布の五二會綱領中に曰く。

五二會綱領

- 第一 本會は全國織物(絹、綿、麻、布、織物、刺)陶磁器、漆器、金屬器、製紙々製品(提灯、扇子、團扇、金、其他)雜貨(彫刻、玩弄物、竹木)敷物類の營業者を以て組織し會名を五二會と稱する事
- 第二 本會は各業に於ける熱心篤志者の團結にして萬般の事徳義を以て基本とす故に一時の感情眼前の小利の爲めに將來本會の大成を傷くるを許さざる事
- 第三 本會の目的は内外需用者に對し我美術工藝品の販路を開發するにあるを以て製造家と需要者間に於ける從來の弊害を一洗すべき事
- 第六 内外に於ける我製品の嗜好及商況を調査し又其狀況を視察せしめんが爲め本會より需用地に向け視察員を派遣すべき事



以て五二會の生れたるは其旨趣甚だ遠きを察すべし、之より先、君亦團結の要を説ける中左の言あり  
余が團結の必要を感じたるは今より十六年以前にあり則ち明治十年佛國巴里萬國大博覽會に事務官長とし  
て派遣せられたるとき、余は單に品物の陳列を以て之れを見せ、則ち歐洲に於ける日本國の開店とし之れ  
を機として内各産業の團結を謀り外國貿易の前途に偉大なる効果を奏せしめんことを企畫し歸朝の後各様の  
方法を以て之を試みたるも機未だ熟せざ不幸終に十分の結果を收むる能はざりしは今に尙ほ多少世人の記  
臆に存せる事實ありとす云々

調査より、團結とあり、機關とあり、今日は方々に機關整備の時代とはされり、首を屈らして二  
十年前を憶ふ、眞個に是れ恍焉として別天地の感あくんばあらざるべし、去明治二十九年一月三日京都に於  
て全國品評大會協議會を催ふすに當り前田正名君は如何に演説したるかを見よ。

熟ら思ふに明治二十八年は不肖が宿望を達したる第一期あり、但し此希望を貫徹したるは一は機運の際會  
と一は諸君の熱誠に依らざらんばならざり自今第二期第三期をも生前に於て貫徹せんことを欲す、夫れ第一期と  
は實業上の組織、第二期とは其働を爲すべき機關の設備、第三期とは其結果則ち利益を獲得せしめんとす  
るをいふ。只夫れ今日の場合は恰も富士登山者が八合目迄攀ぢ登りたるが如き時あれば若も此際空想を畫  
き積年の苦心を水泡に歸せしむるが如きとあらんか吾人何の面目あつて此世に對せんや云々  
然り實に此際一贊を誤たん乎、積年君の辛勞は徒爲たらん、君の辛勞の徒爲たるは猶可あり、國家百年の長  
計を如何せん、而して此目的を貫徹せんと欲せば全く當時の苦心を遺忘せざる志士の熱腸仁人の義心に訴へ  
ざるべからざ、而して數星霜を経るの間我五二會は如何ある長足の進歩を以て團體組織を了したるかは世人  
業已に之を知らん。

## ○五二會小歴史 (下)

天下の事を處するや以て其勢に因らざるべからざ、天下の勢を輔くるや以て其術を用ひざるべからざ、勢と  
術とを以て事に當る、夫れ何事か難事かからん、想ふに五二會の今日ある蓋し天下の趨勢に乗じたる也、亦  
能く其手段方法を盡せるものあり、趨勢や手段や起因あり歴史ありて而る後之を利導せること吾人既に之を  
説て詳あり、

抑々五二會全國品評會の旺盛を致す、其遠因に至りては前段已に述ぶるが如し而かも其近因に至りては少く  
も天の利、地の利、人の和、此三者は實に五二會品評會をして旭日天に冲するの隆運あらしめき、吾人請ふ  
之を細説せん、

顧みれば先年第四回内國勸業博覽會の開設に當りてや、東洋の天地點燈として戰雲亞細亞大陸を蔽へり、此  
時に當りて博覽會が如何に實業社會の美譽たりしと云ふと雖ども、國民敵愾の氣象は戰爭の爲めに其大半を  
消磨し去られざらんばならざ況んや、惡疫の流行は次第に猖獗を逞ふし、更に一頓挫を與へたるおや、然るに  
去明治二十九年の時は何如、妖雲未だ東洋の天地を拂拭せりと云ふ能はざるも干戈已に熄みて日清の和平舊  
に復す、戰勝後の日本が如何に雄張誇視せるか其國民が如何に内外に勢力を獲得せるか、經濟的機關爲めに  
膨張し、殖産興業の急務爲めに益々周知せしめ得たり、此時に當りて五二會全國品評會を開く、國民誰か國  
光發揚の爲めに贊同一致せざらんや殊に會頭前田正名君が唱道せる事業は近來着々として實施せられ、人を  
して君は全く天祐に依りて斯くも其運行を敏活あらしむるを疑はしむるに至る、天祐か將た精勉に依るか天  
祐と精勉とは蓋し此結果を見たるや疑ひなし、

次に五二會中央本部を京都に指定し、又其全國大會を京都に開催せるもの、實に地の利を得たるものと言は



ざるべからず、夫れ京都の地たる山河襟帯自然に一個の勝區を畫き、青き山、白き水、花晨月夕其趣を異にし、花に宜しく、月に宜しく、亦雪に宜し、此紫瀾明媚ある山色水光は、化して美術の神髓に入り、秀で、工藝の精華を映發す、花鳥風月、錦繡綾羅、能く天眞の美を奪ふて鬼神を泣かしむるに足るものは、夫の西陣の織物、及友禪染、刺繍の如きに於て之を見る、氣品瀟灑逸卓然として雅趣を極め、而かも一種特得の長技を誇るに足るものは粟田清水の陶器を始め金風、漆器、雜貨の諸點に於て之を見る、凡そ此等の物産を五三會中大別して二十四種部とせし、更に之を細別して數十種の多きに至る、假令は雜貨の如きは一部にして四十有餘種の多きあり、花紅柳綠、何れか是れ花、何れか之れ柳、行く處として手藝製造家を以て滿たされざるは亦、到る處として美術の淵藪たらざるは亦、蓋し關の東西物産の精良と産額の多大あるとは必らずしも京都と相譲らざるの地鮮しとせず、而かも多くは一種乃至數種の物産あるに過ぎず、故に今回の如き僅々數旬の計畫に屬するものは其主催地京都の如きにあらずんば到底今日の美を速成する能はず、五三會計畫者が會つて京都を以つて京都の京都にあらず、全く日本の京都ありと言へるも亦た此の意に外あらざるべし、

然らば即ち人の和は如何、他亦し戦後の經營は國民をして一致團結殖産興業に傾注せしめ、洋々たる去二十九年の春色は殺氣暗澹たる明治二十七八年の春色と同じからず、東山の翠黛は前年に比して如何に其色を増したるか、鴨河の騰脂は如何に前年に比して濃艶を加へたるか、夫の立並ころに二十餘萬點の出品の整へるは國民一致和平の徴にあらずや、幾千萬の觀客潮の去來して絶へざるが如く雲集子來するは大隘止み妖氣散したるの致す所にあらずらんや、

吾人は今此紅紫灼爛たる品評會場を巡覽し俯仰感慨自ら禁すべからざるものあり、想ふに世間尋常一様の人來りて同會を通覽せしものあらんか、或は單に其盛況を賞して止むるべく、或は京都の出品盛んあるに

比して他府縣出品の割合に鮮きを嘆ずるもあらん、甚しきに至りては別に何等の感想をも惹起せず、冷々意味なき普通一般の品評會共進會等と同一視し去るものあらんも亦知るべからず、然れども若し審かに品評會の由つて來れる原因を察し之れが率先者たり、之れが計畫者たる前田正名君の既往并に現在を想起し來れば假令一反の織物にても一品の陶磁器たりとも輕々看過し去ること能はざるあり、何とされば其計畫の純然たる民業あるにも拘らず、東北奥羽より西南九州より特に本會の爲めに賛同出品するが如きは多年誘導獎勵の結果に外あらざるを以てあり、

人は前田君多年の東奔西走を以て如何に批評を試みたるか、或は曰く是れ祭禮的の騒ぎのみ、或は曰く是れ一時の虚勢のみと、區々たる褒貶毀譽只其言に任せん、而かも君が遊説の勞苦如何は之を追憶せざらんとするも得べからず、

往時は今暫く説かず、近く去明治二十三年君が慨然として農商務次官の榮職を去ること宛きながら、弊履を棄つるが如くあるや、直に全國通説の途に上り、先づ茶業を始めとし次第に農工商各業の團體組織に従事せり、當時世人は如何に君の巡遊を待ちたるか、想へば暗涙の眼底に浮ぶを禁する能はざるあり、程を岳麓靜岡に起し次で三重、岐阜、滋賀を経て大坂神戸に抵られんとするに際し各地方到る所の有志君の所説に信を措くもの稀れに、茶半斤説は痴人の夢を談せると同一例ありとして偏へに敬して遠くもの多かりき、君則ち慨然として痛憤して曰く、吾豈人を當にして所信を語るものあらんや、只事物其物を當にするの外あり、予の説を聞くことを欲せざるものは敢て聽かざれ、予は當さに茶畑に向つて之を説かんのみと、志氣益堅確あり、偶二三有志あり此警語に驚き頻りに同情を表し幾回か檄を移して同志を糾合せんとするも、哀哉熱誠の士來り會するもの晨星の寥々たるが如し、君は猶温顔以て之に接し懇切以て天下の大勢を論して倦まざ、所謂戸毎に説き人毎に談するもの、先づ假りに團結の要務に就て有志の再考を求め置き、飄然去つて西海道に入れ



り、蓋し九州男兒山來義に勇み難に當つて辭せざるの意氣あり、之を以て先づ九州を徇へ、關西を服し次で關東に謀る所あらんと期せしに依る、君の九州に抵るや果然豫期に違ふ者ありしと雖ども、中には君を以て政府の間諜と爲し、又或は大言壯語漫りに鬱屈の氣々吐ひて一時の快を貪るものとし、甚しきは刺客の君に追尾せしものすらありき、而かも堂々所説を公衆に訴え肝膽を披瀝して毫も其他を顧みるの違ふかりしあり、次で明治二十五年秋霜方さに針の如く北陸の諸山盡く紅葉と白雪とを以て滿たせるの時君は家事萬端を知友に托し飛驒、富山、石川、福井を経て關西に入れり就中五二會計畫の一起因を爲せる福井羽二重の前途は勿論其他一般農工商の團體組織に就き深く憂慮せらるゝあり、風伯雨師君が征衣を潤はし秋氣膚を刺すと雖ども縣下の大小名邑殆んど巡回せざる者ありき、羽二重の現狀は如何、抑々亦北陸地方五二會の現況は如何あるべきぞ、君が苦衷を察せんもの若し心わらば、奮起一番宜しく君の心事を慰する所あるべからざるあり、翌二十六年に至りては足跡奥羽を究め、農耕に説き、畜産に説き、蛟の港の潮風に其身を曝露し津輕海峽に千里の志を高吟す卓犖不羈の傑士が四方の志意に誰れと共にか語らん、一葦對水の北海に入るに及んでは人の前田正名君の來りて視察するものあるを知らざるが如くあり、蛟龍の沃野に伊達侯の開墾を訪ひ、室蘭の軍港には一書生として海潮に溲熱を洗ふ、其炭鐵鐵道車室に於て土方の受負師と誤認せられたるも亦故あり或は札幌に肥料馬車を驅りて種畜場を巡覽し、或は廣漠際涯なきの原野を踏破して地勢と殖産とを察したるが如き、一として今昔の成を叙するの談柄たらざるはなきあり、

次で二十七年より二十八年に至りては南海、山陽、山陰、四國、中國を巡遊せらるゝこと其幾回あるを知らせ、又或は西海に、北陸に、奥羽に重ねて足を容れられし多し、或時は笹子の險に白雪を踏み、富士川の急流に颶風と會し、一葉の舟は殆んど覆没の危難に瀕せしことあり、又或時は千鳥通ふる淡路島に航せんとして鳴門海峽の渦中に陥り、其孤島を去りて神戸に至らんとするや、一孤舟は終宵洋中に漂ひ、僅かに明

石沖に着するを得て、而かも旅舎は軍隊の爲めに吾人の宿泊を謝絶せしが如き、或は越後の國境より酒田に航せんとして烈風に逢ひ、名もなき一僻地に難を避けたるが如き、其他風雨を問はず、寒暑を厭はず、櫛風沐雨苦節十年、死地に入りて而して纒かに免かるもの幾回、嗚呼是れ天祐あり、最近事其一班を叙するも已に斯くの如し、若し能く三十年來の苦辛經營を説かんか、區々の斷簡決して之を盡すこと能はざるあり、然らば則ち夫の出陳物たる假令一物の微と雖も君が多年遊説の結果として其熱誠を表彰する一大好紀念物ありと云べし、換言すれば五二會全國品評會あるものは、團結の好果を代表する一大紀念銅標と見て可あり、吾人は其一物一品に對して容易に看過すべからざるを思ふと同時に、筆に口に幾十回かの誘導を重ねたるにも拘らざる、未だ五二會の眞目的を解せざる爲め、殆んど他人の事業の如く冷視し、出品せざるものあるは頗る遺憾の情を表せざるを得ず、萬一天下實業者にして五二會の目的と前田君の精神とを知了し得んか、何ぞ寸時の躊躇を爲すべけん、又何ぞ白眼にして之を藐視し止むべけんや、

夫れ最近四五年間の實業社會は全く團結組織の爲めに活動せり、而して此活動の主腦は、前田正名君ありと云ふ決して誣言にあらざるを信す、見よ明治二十七八年の戦役は世界の歴史上稀有の事實として世に喧傳するにあらざるや、而かも其世界稀有の戦役と相照應して天下國家を動かしたるものは我實業團體の運行あり、假令ば當時の新聞紙に就て、將た其號外に就て實業團體が如何に盤天動地の優勢ありし乎を徵驗せよ、牙山平壤の連戦連勝の時は我實業軍は各地に團體組織を爲すの佳報を耳にするると同時ありき、九連風風の二城陥落して我實業の軍統は各地五二會本支部の成立を祝したるの當日ありき、黄海の大戦、威海衛の大勝、亦皆我實業團體の凱歌を奏したるの當日ありき、京都の大會に之を吹聴したることあり、紅葉館の祝宴に之を喜びだることあり、海陸の連戦克勝と、日本實業社會の機關組織を了したることあり、不可思議にも其軌を同ふして曾て一回だも蹉跎の態あかりき、義勇奉公豈に管炮烟彈雨の戦争に於て見るのみあらんや、吾人は我實



業者が資を窮て身を抛ち、拮据精勵一死只報國の實を擧げんと期せるは亦真に此時に於て確認するを得たり、若し夫れ西京丸の如き運送船を以て彼等の鋼鐵艦と相拮抗して、猶且つ彼を擒獲したるの勇を稱すると、此弱兵を指揮して海外諸國の金城鐵壁に當らんとする團體の勇と相比すれば優劣果して孰れぞ、吾人は毫も遜色なきのみならず寧ろ却つて大に優るべきものあるを信ぜ、「敷島の太和雄艦に入帆あけて四方にはせ行く時は來にけり」と、蓋し八團體全く成りたる時の詠あり、

團體就り品評會開かる、今後我等は如何の覺悟を爲すべき乎、將來の事業極めて多く前途猶遠きあり、而して其第一着の事業は其れ佛國巴里に於ける萬國大博覽會の舉歟、想ふに前田正名君は二十年前業に已に萬國博覽會の事業を實驗したり、一官人たりし君の手腕は世風に定論あり、十一團體の後援を有する君の手腕に至りては如何に張膽瞻視するの價値あるべき歟、君の責任の重きは勿論、實業家の宇内列國に對する責務も亦大なる哉、

實なるわざを驗して大やしき  
のこる國なく廻る君うな

福井 翁

## ○福井紀行

二十五年十一月十二日 俄に福井行を思ひ立ち夕嵐車に搭す旋烟一抹嵐車は二時間の夢を載せ山人の身は既に長濱に在り、翌十三日味爽郷を出で、更らに長濱より北敦賀に向ふ、高月、井ノ口何も記すべき事なく、快駛急行、木ノ本驛に達せり、

▲瀨山皆秋 木ノ本、中ノ郷、柳ヶ瀬等を経て車窓より遠近重疊の山を眺む、七槍山下懷舊の情を催ふすの遺き、只北境の諸嶺秋色頗る老たるに驚く、山人は湖南の秋色未だ半はあるかを疑へる程ありしに、流石に雪の都と聞へたる中ノ郷邊の霜氣は方さに針の如くあるを知れり、嵐車一轉は一轉より、峽一峽深く、錦織白雲を鎖し、滿目の景致言はん計りなし、遠く煙の颯る處是れ樵夫採薪の状見るべく、近く潺湲の響は溪流玉を炊ぐにありき、燃ゆるか如き秋景を賞せんとせば、木ノ本より柳ヶ瀬間に往來すべし、他の紅葉の名所亦見るに足らざるのみ、

▲敦賀 十時過ぎ敦賀に下り、車を命じて金ヶ崎新道に依る、手籠山の隧道、往來頗る便、八年前の當時を顧みれば、峻坂崎嶇として全く今日の状に似せ、之れ所謂道路神明氏の功か、深く謝せざるを得ず、

▲金ヶ崎灣の眺望 手籠山の新道より木良浦に至るまで數里の間、際回曲折、一方に山を負ひ、一面海に瀕す、金ヶ崎を出で凡そ一二里間、灣頭を顧みれば、山と海と全く相對し、煙を吐く船、白帆を揚ぐる船、或は波濤に揺らる、漁舟も、隱約として千尺の崖下にあり、遙かに彼方を眺むれば、水天鬢髯、北氷洋と相連なり、鯨鯨の如き怒濤、澎湃として崖下に迫り、巨巖を噛む、宛然身は畫圖の中にあるか如く、自ら紅葉を踏み、白雲に攀ぐるの勢を感る、

▲油實樹 此邊多く俗にコロビ樹あり、秋山の景色全く江州地方と異あれり、其實より油を搾るといふ、樹葉恰も梧桐の如く、今や黄みて山腹に繁れり、稻田、桑、茶等の代りに多く此樹を植ゆ、

▲福井着 大良を経て眞生に達せし頃は、日漸く暮る、夫より鯖江を經、福井に着せしは午後八時過ぎあり、一旅亭に投じたる後、横尾氏の邸を訪ふ、

▲縣廳に至る 十四日午前福井縣廳に赴き横尾書記官を訪ふ未だ出廳なし、更に勸業係の人に面し、前田正名氏の事に及ぶ、屬某氏曰く前田氏は來十五日朝石川縣大聖寺を發し午后二時來着の筈ありと氏着福の上は



大谷派別院大廣間に於て一場の談話を爲し、同日晩景より羽漕風月樓に懇親會を催し十七日再び別院にて談話あり、直に鯖江に赴き今立郡共進會閉場式に臨み、敦賀小濱を経て今津に出で大津に赴かるべしといへり、  
▲羽二重織の事 勸業掛の人は言ふ、大津人中川金三郎氏當市に於て専ら羽二重業を營むと、予は乃ち氏を訪ひ、懇談時を移せり、氏の宅には知人並河房幹氏も居たり、両氏とも本年八月以來孜孜として事に従ふと、而して氏等の説く所に據れば、原料たる生糸の價格騰貴せる割合に羽二重の價格は貴からず、目下稍氣勢挫けたる有様あり、現に某村の如き一村擧げて休業の所もありと、併し羽二重の價値は元々安きにあらざ、比較的原料騰貴せる爲めあり、故に早晚原料と製造品と利潤の權衡宜しきを得るに至るべしといへり、

▲梭の聲 市内到る所梭の聲聞かざる所あり、曰く羽二重仲買商、曰く買入所、曰く何々社と、皆是れ同品製造元又は賣買所からざるはあし、聞く福井縣内一ヶ月製造高は三萬疋にして、市郡各相半ばすと、而して一時尤盛況を極めたる時は、農夫本業を抛ちて専ら機織に從事し、田を耕すものなく、僅かに囚徒を便役に農耕に従事せしめたる位あり云々、亦以て其利潤一時非常ありしを想像するに足らんか、

▲羽二重織物の取締 同品の製造益盛大とあるに付ては、時として奸商出沒し、一時の私利に汲々たるの餘、粗製濫造を事とし、一般同業者の不利を來すの恐れあり、依つて絹織物事務所を設け、營業に關する取締を爲せり、問屋仲間には絹盛會ありて、横濱賣込問屋と契約を爲し、仲買商同士には、福井縣絹會規約ありて、仲買仲間を拘束せり、別に同業の傳習所あり、六ヶ月間にて卒業せしむと、思ふに同業の取締は畧緒に就ける如く見へたり、

▲羽二重の織高 前既に記せるが如く、目下同品の景氣は稍沈靜の方あれば、猶日々の製出高は福井縣下にて一日分一千六百疋、此機數は六千一百臺に達すといふ、亦盛からざるや、

▲前田正名氏 同氏は十五日朝石川縣大聖寺發福井に入らる、豫定ありしに付、午前十一時氏を福井市外一

里の所森田に迎ふ、氏來らば、偶縣會議長山田卓介氏予を旅寓に訪ふて既に發したる後ありとて途中に遇ふたれば、氏及び風月堂主人と共に九岡に向ふ、森田より二三里行きて途に前田氏の一行に遇ふ、一行は福井縣官十數名其他實業家數名にて更に轍を返へし福井に入る、某亭にて小憩、直に大谷派別院に至る、時に午後二時ありき、前田氏が洋服に脚絆の扮装奮の如し、

▲東別院大廣間の談話會 十五日午後二時過より、福井市東別院大廣間に於て前田正名氏を請して談話會を開きたり、來會者は實業に熱心篤志の人凡そ六百餘名に上れり、氏は詳細なる圖面を製し、之れに就き一々説明を加へ、商工業の振はざる所以を論じ、慷慨淋漓懦夫をして立たしむるに足る演説を爲したり、論旨悉く實業振起を主旨とし、卑屈なる實業者を罵倒して餘蘊なし、實に珍らしき盛會ありき、

▲月見樓の談話と懇親會 右の會了りを告ぐるや、直に同地月見樓に氏を案内したり、時に午後五時に垂んたり、此夜の宴會は福井市の紳商實業家等の催しにかゝりたるが、山人亦招かれて席に列す、樓内實業者二派あり、一を茶業者とし、一を絹織物業者とす、先づ茶業者の席上にて同業に關する談話あり、更らに絹織物業者に對しても同じく羽二重に關する話あり、各一時間位あり二者の談話了るを俟ち、樓上懇親會を開く、來會者凡五十名ばかり、獻酬時を移して散會せり、時に午後十一時、

▲前田氏の微恙 同氏は前日來頻りに勇を鼓して談話を催されしに北越の秋風冷かにして體に善からず、咽喉病の氣味ありとて、醫師に診斷せしめ醫の止むるを聞かば、猶撓まば、談話に餘念あかりき、

▲圓中文助氏 氏は有名なる加州の製糸家あり、明治六年より伊太利國に渡航し、同八年東京新宿御苑内の養蠶所に聘せられ、其後再び佐野常民氏等と共に伊佛諸國に赴き、生糸業の事を視察し、十九年歸朝せる人あり、生糸機械の發明あり、斯道に堪能の人ありと、氏は前田氏を送りて此地に來り、實業者に將來の交誼を温めたまよしを告ぐ、



▲羽二重業者の改良意見 當夜集りたる羽二重業者は、前田氏が諸氏の意見をも聞たしと望みたるに依り、一二其意向を陳するものありき、其大要に曰く、福井市の羽二重近來粗製に傾くの状あり、故に改良組ある小團結を造り、營業の改良法を講せんとすと、諸氏の述ぶる處を聞くに、粗製の傾向驚くべきもの多し、前田氏亦多少の意見を述べ、且つ十六日夜に至る迄に更らに團結上十分の決心を促がしたり、

▲機業家及練工場の巡察 十六日午前八時より福井市内各機業家及練工場を見る、共に視察するもの凡十數名、山人亦此行に加はる、先づ佐佳枝下町百九番地水野勇次郎氏宅に至る、氏の機場は六十の機臺あり、工女及び他の男女を合せ百人を使用せり、更らに去つて寶永上町六十八番地黒川練工場を訪ふ、職工廿五人、大釜五個を備付く、水清く最も練絹に適すと、又去つて江戸上町二十一番地岩城共進會に至る大釜三個を備へ、日々十二丈もの二百疋を練る、職人二十名あり、次で松ヶ枝上町坪田吉左衛門氏を訪ふ、機數三十二臺、工女六十人を使用す、坪田氏は當地の紳商小川喜三郎氏の支配人あり、右何れも一個人組織にて株主あるものあり、又市中十數個所の練工場中岩城は巾廣を練るの機械を備付けあり、素練水晶簾の如く、織々たる女子の手に依りて此貴重の物産を出だす、此等職場を見る毎に、大に殖産社會の爲めに喜ぶべきものあるを知る、

▲小川喜三郎氏宅に憩ふ、各機場を巡察したる後、同氏宅に休憩したるに、午餐の饗應あり、待遇尤も鄭重を極む、氏の邸宅屋後に目下新築中の一大機場あり、機械場に充つる計畫ありと、

▲大谷派別院の談話會 十六日午後二時再び同所に於て談話會あり、聽衆一千名ばかり、前日と同じく殖産興業上に關して熱心なる談話あり、殊に此日は米、綿、生絲、羽二重、麻等實物に就きて説明を加へられしは聽衆をして頗る會得し易からしめたり、但し當日前田氏は咽喉病の爲め頗る膈まされ、一時休憩の後午後五時頃迄談話したり、

▲風月樓の懇親會 十六日午後五時より羽涯風月樓に於て有志者の懇親會あり、會する者凡百名、會主に代り三崎氏の挨拶に次で前田氏の謝辭あり、献酒の後金澤の生糸貿易家圓中文助氏が生糸羽二重等に關する貿易上の談話ありき、唯惜むらくは宴漸く酣にして、其論旨の頗る可なるにも拘らざ、熱心に聽取るもの鮮きかりしこと、

▲羽二重業者に對する談話 此夜同樓別室に於て前田氏は羽二重業者に關して談話を爲したり、其要旨は需供の真相を知らせして、漫りに製造するは危險極ることゆへ、能く海外の實況に鑑み、且つ適應の改良組合を設くべしといふにありき、

▲高等女學校の談話 十七日午前九時より福井高等女學校に於て前田氏の談話あり、同校及中學校に於ては、前日來是非同氏の來校を望み居たるも、其閑きかりしに、此日鯖江に出發の途次、女學校に立寄られたり、女生五十名ばかりを一場に集め、女子教育に關して凡二十分時間談話、直に同校を出で鯖江に向へり、予は此際獨り師範學校に赴き校舎の一覽を得たり、唯匆卒の際とて、充分授業上の模様を見るを得ざりしを遺憾とす、

▲鯖江行 此日天氣晴朗今立共進會の爲め遠近より出會するもの頗る多し、殊に十七日は福井縣會にても副議長撰舉の外他に職事なく縣會議長縣會議員仲商等の見送り旁臨場するもの多く、始め市中を出發する場合は、見送り人凡五十名、途中出迎人追々加はり、鯖江近傍にては凡百名に達せり、車塵十丈雁行して十一時十三分鯖江に着す、休憩所は同地福田屋源三郎方あり、暫時休憩惜陰小學校内共進會に臨む、褒賞授與式執行横尾書記官等に會せり、式済みて後前田正名氏來會者數百人に對し、祝詞の代りに一言の挨拶あり、然るに式場は玄關前柵内に於て舉行し極めて騒々しければ、更らに懇親會場に一席の談話を約し、出品物の陳列場を巡覽せり、出品物は麻、羽二重、繭、生糸、米穀外數百種あり、實業者の熱心微すべきものあるを



認めぬ、中に就て越前の紙といふは此地方の名産あるを以て、一際見立ちて見へにき、聞く維新前太政官の金札は此地の原料を用ひたりと、以て其逸品たるを知るべし、

▲万慶寺の懇親會 同地麻宗万慶寺は懇親會場あり、來會者凡百名皆地方の農工商業家あり、前田氏は直に一場の談話を試みたり、其要旨は専ら絹、生糸、羽二重其他の鯖江地方重要物産に對する注意を與へたるあり、口不幸にして氏の咽喉病益激かりしが猶忍んで凡そ一時間の熱心ある談話あり、午後六時より宴を開く、酒酣にして同地藝妓の手踊を催ふしたり、

▲歸福 十七日午後七時鯖江を發し急行福井に歸り、前田氏と共に旅舎煙草屋に投せ、

▲羽涯の朝霧を破る 十八日午前拂曉朝霧を破りて足羽河岸を溯る、前田氏に従ふもの山人の外、僅かに石田九十二國立銀行頭取あるのみ、深く峽に入り大野に向ふ、此日同地に於て談話の約ありたればあり、大野に近く凡一里、山は濃霧を以て掩はれ次第に雨とある、出迎人並に後を逐ふて來れる縣會議員近藤源平氏等之れに加はる、同行凡十餘人、雨を衝いて大野大寶寺に入りしは正午十二時に垂たり、此間十里と稱す、▲談話會並に製糸場巡覽 大寶寺にて午餐の禮應を受けたる後、近藤氏の製糸場並に大野製糸會社等を巡覽し、次で同地善導寺に談話會あり、聽衆五百人、皆地方有力の士あり、尾崎彌左衛門氏が製鍊せる三菱採掘の鑛物製造品は尤も見るに足る、此地藩政の頃内山七郎右衛門ある人あり、經濟に長じ殖産の利を計り、殊に銅鑛及漆樹栽培法に盡力したるに、今や其人没して漆樹の園林は荒廢せりといふ嘆せべし、但し養子内山文次郎氏亦經濟に長じ居れり、現に大野製糸場社長として盡力中あり、午後四時談話了りし後、有志の感憤非常にて、續々前田氏に刺を通して教を乞ふものあり、氏は諄々説いて盡きせ、酒飯の饗あるをも受け去つて勝山町に向ふ、見送り人數十名

▲荒井川の渡 荒井河畔に沿ふて下ること二里ばかり、荒井の渡に達す、時既に五時を過ぎ、晚飯膳糊とし

て兩岸の人影辨せべからせ、一行の半ばづ、車と共に渡る、前岸には篝火を焚て相圖とし、衆勢整ふを待ち、車を聯ねて勝山に入り、同地の豪商松居文吉氏方に投す、氏は織物其他の貿易を業とし、一門の繁榮羨むべきもの多し、同族相集り氏の一行を歓迎し、款待を極めたり、

▲懇親會上の談話 午後七時より夕照庵と稱する割烹店にて懇親會あり、來會者は何れも同地にて所謂一粒ありの紳商連のみ、宴に先ち前田氏は貿易上の談話あり、其説頗る高尚に亘り、他の地方にて演せざるものを演せ蓋し此地は尤も將來望み多きを知れりといふ、隨つて會員何れも熱心に謹聽し、不日大に爲す所あらんを期せり、頼母しといふべし、十一時過散會、前田氏は松居氏方に、石田頭取、金澤の圓中文助氏と予の三人は泉屋方に投宿したり、

▲製糸場及織工場巡覽 十九日午前八時より勝山松居文吉氏の羽二重織工場を一覽し、更らに勝山製糸場を巡覽す、前田氏は同場にて工女に向ひて凡五分時間女子の尤も心得べき件々を談話せり、談話中日本の女子が外國に於て醜業を營み國辱を顧みざることを悲み若し女子たるもの大に注意するべくんば、他日如何ある困難に陥るやも知るべからせと述べられし時は、何れも非常に感動し、潸然流涕するものありき、

▲尊光寺の談話會 夫より勝山尊光寺に談話會を開く、聽衆凡五百名以上あり、其要領略大野に於けるが如し、午前十時散會、松居氏方にて午餐の饗應あり、午後一時同地出發三たび福井に向ふ、見送り人及出迎人等雨を冒して數十名會せり、又右談話會後同地青年會員の爲めにも留別の辭を述べ、青年有志を憤起せしめたり、

▲福井各所の談話 此日福井に着せしは午後四時を過ぐ、縣官、豪商、有志數十名市外に出迎ふ、車を聯ねて小川喜三郎氏宅に至り、同家新築機關場にて機業上の談話あり、了つて福井縣會議員一同は月見樓にて宴會あり次で青年會并有壽の爲めにも臨席して各一場の談話あり、全縣下の熱心は、前田氏の熱心と相俟ち



て氏を満足せしめたることあらん、

▲半夜雨を衝て武生に向ふ 十九日午後十時月見樓縣會議員に對する談話了るや、前田氏は直に牧野邸に還れり、邸内又二十余名の實業家あり、談話を聞かんとて待つものあり、談話凡二十分間、横尾書記官、團師崎警部長、橋本參事官等席上にあり、前田氏は曰く之より直に武生に向はんと欲すと、一座相顧みて愕然たり、山人夙に此約ありたれば、結束既に整ふ、是れ見送り人の類を避けんが爲めあり、時に烈風驟雨益甚しく、野外懐絶の光景殆んど豫想すべからず、車を命じて車至らせ、蓋し車夫亦僻易、命に應せざるあり、牧野令夫人頻りに此行を止む、前田氏可かき、矯捷結束驟然として意決す、會山田卓介氏の車夫等四名あり、山田氏強て予等の行に従はしめ、前田氏及山人二名は深く諸氏の厚意を謝して邸を出でたり、路暗く風雨面を撲つも、幌を翻け或は傘を張る能はせ、山人は車夫が饅頭笠を脱げるを幸ひ、之を被りて疾驅走ること四里、全身恰も濡れ風の如し、午後十二時頃漸く鯖江に着す、顧みれば星清氏既に此行を送りて從へり、偶出迎人一名あるを奇とせしが、更に一里を走せて武生に着する數分前、續々出迎人あり、曰く米庄、曰く疊屋と、益々其奇を訝かりぬ、察するに之れ或方へ電報して旅館を依頼せしより、兩者競争の餘此に出でたるにや、一行三名直に米庄方に投宿す、東條鎌三氏先發して此にあり、福井より後れて見送りたる紳商小川喜三郎氏來る、曰ふ出し突けの出發には人々一驚に喫したりと云々時に廿日午前一時過あり、

▲武生出發 二十日午前五時早起武生を發す、福井新道にかゝる頃は曉霧四山を鎖し晴雨定かあらざ、時に細雨亂れて絲の如く蕭條として霜氣膚を刺す、大良にて小憩、健脚の車夫を屬まし、鐵鞭呵して將さに敦賀に達せんとす、偶途に牧野福井縣前知事の一行進み來るに會ふ、乃ち一店に憩ひ前田氏と對談せり山人は長く時の移つるを恐れ前田氏の一行に別れ先づ金ヶ崎に出で途中長田氏に逢ひ十一時四十分發流車に搭じて米原に着す、大津行の流車迄は猶一時間餘あり、小憩三時何分の流車に乗らんと停車場に至れば、誰にやあ

らん山人の背を後よりポンと叩くものあり、訝かりて顧みれば前田氏の一行にて、何れも呵々大笑相携へて一車室に入る、聞けば牧野氏との對談案外に手間取らざりしに依ると、午後五時五十五分馬場に着するや、連遶たる湖光山色怡然として此一行を迎ゆるに似たり、送りて圍城寺畔寺原氏の邸に至れる頃は、鏘然たる鐘聲杳として晚霽の中は落つ、

月 清く 山の 音 清し 庭の 松  
其 聲に 夢や 醒さん 渡る 雁

楓 下  
歌 堂



### ○東北紀行

出京後僅かに旬日の滯京とは云へ炎塵十丈熾んに僑居を侵すあるが爲めに煩悶苦惱言はん計りもあし、豫て十五日には前田正名氏と共に都門を辭すべかりし約ありしも、氏は頃日腦病益劇甚を加へ迎も豫定の時日には出發する能はせどこのことより、予等の失望譬へんに物あし、氏亦予等の爲に計る所あり、同行者三名をして先づ出發せしめんこと、されり、同行者は東京府北多摩郡砂川村砂川憲三氏及下郷寅吉氏と予の三名あり、砂川氏といふは同地方の閥閥にして其嚴君は先年迄郡幸たりしことありといふ、昨今偶湖南の地に擧擧の事あり腥風吹き血雨降る、氏郷里に在れば假ひ黨弊を厭ふと雖ども亦一方の司令長官として應援指揮せざるを得ず、故に一は此黨争を避け又一は前田氏と前年來の約を履むの好機に接したるを喜び遂に此行に加はるること、されり、



二十六年七月十七日午前六時四十分予等三名は東京上野一番發列車にて小山に向ふ、而して前田氏とは二十日宇都宮に相會せんと約を爲したるあり、九時十五分小山に着し夫より小山水戸間の線路に乗替へ十一時五十分水戸に着せり、此間凡五時鐵路長からざるにあらざり雖ども一望十里の平野は茫乎として際涯なく只田畝の間を疾走するに過ぎず、蓋し關東第一の沃野相連する處、眺望の記すべきも固より怪しむに足らざり、水戸停車場にて午餐を喫し夫より直に常盤公園の勝を探る、

借樂園

借樂園は常盤公園の舊稱、水戸城西二十餘町の常盤村にあり、其園の梅に宜しく、櫻に宜しく、又楓、萩、芙蓉に宜しくして四時天然の風景を利用し假つ以て一大園園とあしたるは世の風を知る所あり、故に今細かに記するの要あり、先づ好文亭を見る、案内者頻りに烈公の遺徳を稱し種々解説を加ゆ、名にし負ふ水戸烈公の遺業歴々として吾人の眼前に横はり、一として景仰すべからざるはあし、吐玉泉水清冽味掬すべく、紅白蓮其傍ある溝渠に滿つ、香氣紛々として鼻を撲つて來る、就中好文亭仙波湖邊の眺曠は尤も佳絶なり亭は園の中央に在り、表面承慶の上に好文亭の三字を扁額として掲ぐ、景山公の親筆あり、又何陋庵の庭前にある石燈籠尤も古し、大同年間の製ありと云へど詳あらざり、総高四尺五寸、笠石直經一尺五寸、火袋經一尺、棹石堅一尺二寸、思ふに稀世の珍品あり、更に去つて弘道館を見る、烈公が文武兩道に力を盡したるの跡今僅かに其面形を存するのみ、只夫れ精神的の修養は館の存廢如何に關せず炎々として燎原の火の如きもの依然として熾するに足るべきあり、吾人江州の客たりと雖ども素と彦根と相關せり、然かも今水戸に遊びて當年の事と思ふ亦何ぞ今昔の感に堪へざらんや、

高崎親章氏を訪ふ

午後三時頃高崎茨城縣知事を其官邸に訪ふ、知事は曰く予赴任後久しからざれば縣下の事情未だ詳悉せざる

ものあれども自由と云ひ改進と稱し政治黨派の紛糾を極むるは縣下の爲めに遺憾あり、予必らせしむ黨派を嫌はせ、只其黨の實業社會を破壞的に化し去るの弊あるを憾むのみ、縣下茶業の如き其他の殖産事業猶大に興すべきものあるべし、然れども之を興起する今の所謂政黨者流に得て望むべくもあらざり、予は只前田氏の如き實業主義の遊説に於て始めて効果あるべきを信ぜ、去々年氏一たび本縣下に入りてより後、實業上の形勢稍見るべきものあらんとす、乞ふ速かに入らんことを望む云々、然るに前田氏は病氣の爲前約を履む能はず北海道巡遊後に此地に入るべき由を語りて別を告ぐ、

松聲又濤聲

水戸市を距ること凡四里、磯濱町に大洗といへる名區あり、尤も避暑に適す、高崎氏方を辭するや三人車を驅りて同地に至れり、大洗神社の松籟は路半ばにして既に颯々として涼風を送り來る、大洗には魚來庵あり、層樓海角に突出し、東方一面に太平洋を眺め東南遙かに銚子港を望む、樓下は怪巖巨石白沙と相連り、五時頃には潮勢猶少しく沖合にありしも七時頃とされば滿潮怪巖を掠め、侵入し來れり、浴して樓に上れば涼氣座に滿ち亦京塵の何ものたるやを忘る、十六日は近年稀れに見る所の暑氣ありしも華氏の八十度位に止り予等の至りし十七日は俄かに下りて七十度とある、浴衣一枚にては膚頗る冷氣を感じるを以て更に襦袢一枚を用ゆるに至る、岡鹿門翁此屋室に題して噴雪樓といふ、蓋し波濤岩石に碎けて白玉とあるの謂あるべし、一句の炎熱を一夜濤聲の間に洗ふて瀟灑陶然たるの時は、二子既に眠に就き予は獨り燈下に此記を草しぬ、

大洗の曉色

七月十八日水戸發第一列車に搭せん決意ありしを以て前夜魚來庵の婢に命じて午前三時に出發すべき準備を爲さしむ、果然下婢は正三時を以て予等三名の熟眠を驚破したり、時方に海霧漸く水際を離れんとして猶全く去らざり、燈下朝食を喫する頃より海面漲るげに處々の岩石をも認むるを得て東方又はのくとして曙色



を映發し來らんとす、夜來屋後の泉聲と樓前の濤聲とは和して沛雨の至りしやを疑はしめたるほどに早起此曉色に對して心氣殊に爽快を覺ゆ、全四時庵を辭じて松林の間を過ぐ、磯濱町沿岸の漁家稍く戸を明くるものあり、五時卅分水戸停車場に着すれば發車には猶三四十分時の猶豫ありき、

日光山に向ふ

借樂園を右手に見て發車したるは午前六時二十分、前日の舊路を再びせるが爲め別に目新しきものあり、只小山より日光線路に乗換へる迄車中に眼樂一個あり多情の客咸き視線を之れに注ぐのみ、而して渠は最と耻ケ敷氣に窓外を眺め又或は同行の年増に故ら何か話しかけ人の凝視を避けるまど傍觀者の地位に立てる予に取つては頗る奇妙奇感爲せり、此女は果して何物ありやとは投宿後も一行の疑問中にありき又流車の朽木縣廳沼驛に達するや星亨氏は相も變ら走腹便々二三の鬚武者を率ひて乗り來りしが同縣今市驛に着して降り、時に停車場「迎星君」を記せる大小旗を押立て十數名の兵兒帶連氏を擁しお定りの萬歳を唱へたるも餘り少人數の爲め流石の星君もチト案外の感ありしが如し、併し日光に到着すれば「衆議院議員星亨君御旅館」と筆太々に榜掲しあるを認めぬ、星君も此に至りてゑらゐものあるを知るべし、山下小西屋に投じたるは午後一時半頃あり、小西屋は同地旅店中の巨擘、此日旅客非常に多かりし爲め頗る混雜を極め居たるに、剩へ日光御滞在中の常宮、周宮御兩所少時御休憩あらせられたるを以て上を下へと交せ返し居たり、兩宮様は官女數名と官吏十數人に取圍はれ、御機嫌麗はしく御遊覽の所を路傍にて拜觀し侍りぬ、

裏見の瀧

日光山下より中禪寺湖畔に達せんには凡四里ばかり、坂路近年に至りて大に修繕を加へたるを以て、肩輿、馬背に依るを得るは餘なく人力車にて絶頂まで辛ふして達するを得べし、予等行脚黨は寧ろ草鞋脚半に其身を固むるを便ありとし、午餐後孤塔輕裝して一名の案内者を拉し中禪寺湖畔に詣らんとす、午后四時裏見の瀧に達す、途中の暑熱實に堪ふべからざるも裏見の洞窟に入りて俄然爽涼を覺ゆ、裏見の瀧直下三百尺、傍らに相生、白糸の二條あり、相生は巨巖に撞觸して急激驟雨の至るが如く此窟下を過ぎて而して本流の裏面に達するを得べし、砂川黙庵矯捷馳せて裏見の真相を諦視し逡巡して未だ急激驟雨の間に佇立する予等を招く、向陽館主人下郷氏及び予は俯仰して僅かに其個處に達すれば壯絶又快絶、奇觀得て名狀すべからず、歸路頗る危険若し一步を過つらば身は直に湧ける青潭中に溺没し去るべし、悸して前路に復し一茶店に憩ふ、主翁仙骨あり渠は自ら曰へり余は久しく此洞窟に在り往年舊路を變して新道を爲る予の力尤も多きに居ると、得々乎として天地は只此一仙郷に限られたるが如く思ふものに似たり、蓋し亦人間の好生涯あるか否、

方等、般若、阿巖、華巖

午后五時馬返しに着す、昔は此所より馬通せざりしも今は車も馬も通ざるを得べし、此稱あるに依りて舊時の峻阪を追想するに足る、予等は新道平坦のものあるを故らに舊道に攀ぢて險を擇ぶは速かに頂上に達せんことを思へばあり、勇を鼓して方等、般若、阿巖の瀧並に屏風岩等眺望佳絶の處に至り、更に進んで中の茶屋に達す、馬返しより頂上まで恰も半途に當れるあり、一行大に疲れ就中向陽主人の如きは其名の左も強をうに閉ゆるにも拘はら走足は尤も弱き方にて時々太き吐息を發して待つて呉れくと叫ぶ、默庵亦足自慢の癖に今日に限りては閉口せりと降服の姿あり、予は此所等が我が技倆を示す所ありと山麓より一行に隨ひ來れる一洋犬を驅りて踴躍猛進登山を急ぎしに二氏共に瞭然として恨めしげに見へたるも致方あり、白雲踏みにじりて華巖臺に達せし時は豆大の白雨ポツ／＼降りかゝり華巖の瀧を見るに及んで迅雷轟々全山に震ひ、雨益急にして七百五十尺の被瀑は景致更らに一層を加ふ、砂川氏が携ふ所の双眼鏡を採りて之を望むに十二の瀧五色岩等歷々指すべく豪壯快澗の奇景實に筆の能く盡すべきにあらず、觀賞限りなく時方さに夜に迫る則ち程を急ぎて中禪寺湖畔米屋に投宿したるは午后七時に垂んたり、米屋樓は湖上にかゝりて屋室清潔樓



下魚澄湖、又蚊帳を用ゐず、此夜閃電湖面を掠り一種言ふべからざる風致を呈せしが午後十時雨全く歇みて織月方さに中天に輝けり、

### 中禪寺を發す

十九日拂曉中禪寺を發するに際しては冷氣を覺ゆる甚しく、或は衣を製ふものあり、森林處々鶯鳥の囀るあり、宛轉春を告ぐるの聲もさるるも氣候は紅葉九月の天に似て幽邃の景致更に一段を添ゆ、偶々少女馱馬を追ふものに逢ふ、思ふに之れ昨夕予等の行と共に中禪寺に入るもの、渠れ一行を記憶する所あるか澄はるばかりの愛嬌を振り蒔て過ぐ、山間馱馬の侶として空しく歲月を消す、殊に惜むべしと嘆じたるは馱庵主人あり、登ることあれば下ることあり前日の勞苦に引換へ、今日は難なく中の茶屋に達して憩ふこと少時、

### 白雲起り水煙立つ

中の茶屋より前面を下瞰すれば翠の如き白雲は簇々として青山奇峯を掩ひ脚底又將さに行路を失せんとす、殊に大谷川の碧潭瀾々として水煙を漲らし、飛沫彩虹と化して絶谷窮山を罩む、阿隈の瀧亦何れの處にあるやを認め難し、降りて相生、白絲の眺望佳絶の處に來り近く二條の素練を望み、遠く中の茶店を願望すれば身は既に千尺の高を去りて行程漸く山麓に近くを知る、而かも予等猶雲煙漠々の間にあるを知らざるあり、女人堂下の機道を過ぎ馬返へしに着したるは午前八時十五分、去つて清淵村を經れば布引の瀧あり、今は僅かに細き小川とあり果て騷人韻士をして座るに長嘆の聲を發せしむ、而して之れ深山中の濫伐に基すといふを聞きて吾人亦益浩嘆せざんばあらず、此處より距ること幾何も亦大日堂の邊、巴の池あり、其水清冽味掬すべし、池の規模甚だ狭小ありと雖も浮島二三あり何れも昔は古く蒸して風致尤も愛すべし、芭蕉翁櫻樹の下に題して曰く「あらたふと青葉若葉の日の光り」と十七字能く此苑の韻趣を寫せるを思ふ、

### 日光廟及同山の觀察

山川秀靈の處徳川氏の廟あり、其結構の壯麗偉觀風に内外人の知る所あり、日光の徳川氏か徳川氏の日光かといふはとされば之を記するは頗る陳套に屬するの嫌あるを以て故ら誌さず、只予は同廟を拜し且つ予の觸目する所の近狀に就て多少の感想を記して委くは別論に譲る、  
今や日光に遊ぶもの年々其數益多し、其此に遊ぶもの、思想固より一にして足らざり、徳川氏を追慕敬仰するもの、秀靈の氣に其心神を養はんと欲するもの、建築法を考へ美術の精華を討尋せんと志すもの、此等は尋常普通の登游客たり、日光に遊ぶもの、目的は蓋し此等の外に於て多きを求むべくもあらざればあり、然れども歴史學に志を寄するもの、如きは亦尤も日光に遊ぶもの、要あるを知る、何とされば近世史中の大部分を占むるものは徳川氏あり、維新の改革に至大の關係を有するものも亦徳川氏あり、徳川氏は實に維新前後に亘りて日本の政治及社交文學其他百般の關係を有することは喋々を要せざして明かあり、彼れ何の爲めに斯かる美術の標本を建造せしや、彼れ諸大名赫々たる威勢を以てして三百年間徳川氏の下に屈服したる其所以及之を總轄したる徳川氏の勢力は幾何ありしや、凡そ此所に遊ばんものは徳川氏の勢力が獨り政治上の支配權に強大ありしのみならず、又當時の社會の大勢は如何ある程度にありしやを想察するに餘あらん、年所久しくして考証の湮滅し易きは史學あり、史學家たるもの宜しく近世史の材料を間接に日光山に求むる亦可あらざや、

近來公園と稱して日光山中新たに庭園を作れり、何等の俗眼者流か此世界無比ある日光全体の公園を害するものぞ、無風流も亦極まれり、大津曾つて公園新設に付小論争あり、大津一派の人が天然の公園に對して別に修補を加ゆるなく、只新設公園に反對するに比して其間固より徑庭なきにあらざり雖も、予は聊か感ぜる所あり、他日別に言ふ所あらん、

日光廟を拜し了りて旅舎に歸れば徳島縣の高屋武二氏に會せり、氏は予等の一行に加はらんが爲め今朝東京



より來遊せるあり、氏と共に明日宇都宮に出で前田氏に會せんとす、而して高屋及び砂川の二氏は霧降の瀧に赴けり、暮夜二氏歸りて曰く一里半の行程疲れたりと雖も行くに其甲斐あり、一瀑上は巾二間半、高さ百十尺下は巾十五間集りて二百二十尺の大瀑布と爲る、奇絶言ふべからざり、

前田氏人を宇都宮に派す

豫て東京出發の際二十日宇都宮にて前田氏と出會すべき約ありしを以て砂川、下郷及予の三名は午前七時三十分日光を發して九時三十分宇都宮に着直に武藏屋方に投じたり、而して昨日日光に來着したる高屋氏は獨り中禪寺に登り更に一行の後追ふべしとのとされば此にて氏と袂を分ちぬ、十二時三十分前田氏を停車場に出迎へたるに氏は來らせして却つて思ひ設けぬ元の山梨縣典獄黒澤有益氏來着し、予を見て君は會つて甲府に在りし西川兄にあらせやといふ、三五年相會ふと奇かりし黒澤氏に突然言曰はる、は予に取りて頗る奇遇の感ありしが氏は前田氏より態々の使者ありとのことに相携へてむさし屋に歸る、氏が懷中を探りて出したる一書を披きみれば大要左の如し、

- 一 牧野仲順の母危篤に付來る二十三日迄東京を出發し難し
- 一 福島縣下須賀川并に福島巡視唯今知事へ見合の儀相斷置候事
- 一 來る二十四日夕宮城に着の事に決心の事
- 一 宮城より岩手北海道巡視日取り兼て取定の通り變更せむ
- 一 來る二十四日仙台にて有志四名出會の事
- 一 來る二十三日迄有志四名の方は福島半田松島等御見物希望致候事
- 一 但郡山疏水試験場製糸二本松製糸御立寄如何
- 一 萬不得止事にて甚だ御氣之毒され共前項の次第可然御推察を請ひ度候

十九日午後八時認

四名宛

前田正名

追て須賀川に御着之節待受人有之筈其者へ別封御渡被下度事

但同所には通知之邊かりしにより可然御申通じを乞ふ福島にては知事議長等へ御面會の上本文之成行き委細御通じを乞ふ半田銀山にては五代龍作へ右之段御通知可被下候

事稍々意外に屬せり、然れども牧野文部次官は前田夫人と從兄弟の間柄されば牧野氏の母堂今危篤あるに當りて遠く他縣に遊説せんとするが如きは前田氏の尤も忍ぶべからざる所、況して無情の花に對しても涙を瀧ぐか如き氏の多血質に於てをや、予等は實に氏の意を了せり、而して百疊敷室を掃ふて待ち設けたる武藏屋主人の失望は左こそと察せられぬ、而かも予等は更に進行の目的を定めざるべからざり、則ち午後二時五十分發の汽車にて今夜福島まで直行し兎も角仙台にて待受けんと軍議立どころに一決、黒澤氏と共に涼を納れ午餐を喫して別る、

奈須野が原を過ぐ

炭煙一抹流車は宇都宮を發し駿々として進む、程なく奈須野ヶ原にかゝる、名にし負ふ日本の曠野も今は處々稲田麥隴を見ると雖も、廣漠際涯なき満目の眺望は亦一段の奇觀あり、倏忽驟雨を送るかと思へば忽焉雲は散じて鏗金の天を望む、十數里を横斷するの間屢驟雨に逢ひ又屢晴天を見る、以て平野の廣漠たるを知るべし、殺生石今何の邊にかある、言ふ石は那須嶽の麓にありと、白川に著して白河城を左に又樂翁公の造りたる瀧水南湖を右に見て公の遺徳盛業を稱す、須賀川を過ぐるや前田氏より囑托の書を上妻多學氏に托せんとして氏に在らせ、急ぎ驛夫に依頼して去る、上妻氏といふは同地方に於ける前田氏の開墾地數百町歩を監督する人ある由、幾程もかく遠く磐梯山の噴火を望み、近く安達太郎山の臥龍の如く横はるを見る、而して



那須岳の噴煙は遙かに夕陽と相映して一種言ふべからざる美景を現せり、本宮にて日全く暮れ、二本松城の如きは晦冥の間に透きて亦辨せべからず、流車六時間一行福島に若したるは午後八時五十分、直に同市松葉館本店に投せ、松葉館は阿武隈川の涯に在り遙かに吾妻小富士の噴煙を望む、樓の結構東京出發以來罕れに見る所とす、而して福島街上の繁華ある予等の意表に出でたるもの多かりき、

五代氏の半田銀山を視る

間も亦く福島を去り、桑折驛より二里半ある半田銀山に至る、同山は前年幕府の有かりしも明治三年始めて五代氏の所有に歸し今の持主は五代龍作氏あり、予等の同事務所を訪ひし時は五代氏坑内に在りて未だ出で來らざれば同所出納掛寺林豊太郎氏役員志村金吾氏の懇切なる指導を得て先づ電氣機械場に至る、機械場は清溪を攀ぢ縁岡を經ること十數丁の上にあり、更に去つて第一鑛物搗場を始め第二の搗場、水車場、各製鍊場、分折場等を巡覽す、鑛物搗場は砂屋に滿ち咫尺辨すべからず、工夫は役々として鑛砂を運搬し三伏の炎熱をも物ともせせ、或は火氣蒸々たる間に奔走し或は砂塵晦冥の間に勞働す、其苦辛想ふべきあり、又坑口迄は至りたるも此に入らば三時間を費すといふより之を止めたり、今役員の話に依れば毎日同山にて使役する工夫は昨今養蠶の候あれば多少人夫を減じたるも猶普通人民三百五十名囚徒二百名合計五百五十名位あり、而して日を採掘する銀塊は四十貫目乃至八十貫目あり又銀山五坑の鑛脈開坑は明治五年より十二年に至るまで六百尺乃至六千三百尺、採鑛高少きは一坑一万五千貫目多きは二百十六万二千五百貫目に達す、開坑以來使役夫少きは三万九千人多きは五十六万二千四十一人に達せりといふ、又方今一貫目造幣局に送致する相場は凡百五十圓より百八十圓ありとぞ、

船越宮城縣知事を訪ふ

二十二日午前砂川君は獨り金華山の勝を探らんとて外人某と共に舟を雇ふて早發し、予と下郷君とは諸般打合せの所用もあれば船越知事を其官邸に訪へり、船越氏は予等遠來の勢を慰さめ且つ有志者は福島縣下に出迎の用意さへするものありと語りぬ、聞く今回前田氏招聘の發起者に宮城郡の實業家多きを以て氏到着せば宮城郡並に仙臺市に於て談話を請ふべき計畫ありと、

宮城農學校を視る

知事の紹介に依り宮城縣立宮城農學校を一覽せり、農學校は名取川の涯り、市街を距る數丁の所にあり、校長心得は石井新太郎氏にして予等の至るや農場監督代理ある卒業生北島保治氏をして農場を案内せしめたり北島氏を始め多くの學生諸氏は威容簡の銀頭笠を戴き五座を被て農業に餘念あり、或は水田の草を取るあり、或は野馬を追ふて圃畝を耕すあり、又麥を打つもの、蠶種の發達に従事するもの、桑園を耕し牛羊を養ふもの等何れも宛然たる農夫にして若し諸氏をして此農場外にあらしめば迎も學生とは見るべからざるほどの扮装を爲せるは感すべし、北島氏は曰く從來時々農學校の存廢は縣會の問題とありしも兩三年來更に此事ありしと之れ農學校の爲め、尤も祝すべし、學校の敷地は四町五反餘歩内宅地貳貳畝畑四町七畝田貳反四畝、又附屬農業地は四町三反五畝外に借入小作地田反別二町三反あり、同校は明治十八年の創立あるが二十年より二十五年迄卒業生を出すこと五十三名、而して卒業後の結果を見るに實業二十九、教員十、官吏六、兵役三、不明九、死亡一あり、始め同校に入學するものは其志實業にあらざして官吏然たる氣風を存するもの多かりし、随つて卒業後實業に従事すれば却つて之を卑むが如き奇觀ありしに、今や形勢一變、學生の素望と卒業後の就業とは殆んど相一致するに至れりと、予學生諸氏が炎熱を顧みせ致々として農業に従事するを見、深く同校の前途の多望あるを感せきんはあらざ、農場内設置の寒暖計は此日午前十時攝氏三十度（華氏されば八十六度位か）を示し濕氣は貳十三度〇五を示したり、又同校學生の多數は目下遠足旅行中にて校内に在



るものは僅少ありしが平生若らば日々の登校生七八十名位ありといふ、

### 備農夫と學生

同校には生徒實業の外に備農夫あるものあり、之をして一部分の米作を分担せしめ以て生徒の成績と對照し勞働の優劣、注意の精粗より生じる差違を明にし、手工熟練の標準を生徒に示せり、予は今其實地並に成績表を見るに、肥培耕耘は毫も異なるなくして收穫は實に三倍に近き差異あるを見たり、左れば手術の功拙は農業上尤も注意すべきとあるを信ぜ、又同校内に宮城農友會あり、共同一致農業の改良を計らんが爲り組織せるものにて支部を各郡便宜の地に置けり、此地猶見聞する所多きも略す、

### 宮城縣の養蠶事業

福島に比しては固より未だ盛んありといふべからざれども將來益々盛況を呈すべき勢あり、小石丸、赤熱、青熱等の種類多し舊開地は一部地方に限り他は概ね福島地方より原種を仰ぎ且つ傳習をも受けたれば随つて温暖育に依るもの十中八九あり、本年の繭相場は一石凡三十三圓位を普通とし之より以下のものも多かりき、而かも成繭の結果は決して粗悪のものにはあらざり、然るに其繭相場の他府縣に比して割合に高からざるは土地の需用よりも寧ろ供給多きが如きは蓋し其一原因あらんか、製糸場は市郡通じて五十人取乃至百人取のもの數ヶ所の外二百五十人取のもの一あるに過ぎざり、又農學校の飼育場は之を三室に分ち一室大抵八名宛を配置して傳習せしめたるが掃立より上簇迄は凡三十三日を要せしと、又各郡の養蠶日數も三十一二日より上簇すと云へば温度は平均七十五度内外ありしとあるべし、

### 松嶋に遊ぶ

天下有山水、各擅一方美、衆美歸松嶋、天下無山水、と古人實に吾人を斯かざるあり、七月廿三日拂曉、車名取河畔の重霧を截り、一瞬駛せて松嶋に向ふ、松崎停車場に着し途富山に登臨す、山上大仰寺といふあり、同寺の庭前より俯瞰すれば松嶋の風光は目睡の間に攪る、坂路僅かに數丁に過ぎざるも其險言ふべからざり、林中黃鶯の聲を聞く、時や宿霧既に晴れ亘りて極目際涯なく無數の青螺は影を倒にして煙波縹渺の間に点在す、松嶋四大觀の一ありといふ東北の絶勝たるに負かざり、寺僧茶を点せるに任せ憩ふこと少時、再び舊路を取りて松嶋村に詣らんとす、富山は宮城郡手樽村にあり、

### 五大堂並に瑞巖寺

松嶋に着するや直に觀月樓に投せ、樓丁の案内に依り五大堂並に瑞巖寺に詣る、五大堂は水濱の一離島あり其昔飯上田村慶五大尊を安置するに始まれり、長短二橋碧水に架して高さ千尺、銷魂橋に比するあるも亦宜あり、而して瑞巖寺は世に松嶋寺と稱するもの、青山に倚り蒼瀨に臨む、寺畔岩洞あり始祖は法身眞壁平四郎、宋に入り法を經山の無準に受け法身窟と稱し此に座禪したる所ありと云へり、一大碑石あり瑞巖圓福禪寺碑といふ、明治九年車駕驛を同寺に止め玉ふの後、紀念の爲り新設したるありとぞ、寺中寶物其他の一覽を得て觀瀾亭に至る、

### 觀瀾亭に憩ふ

觀瀾亭其名既に美あり、其眺臨の佳亦何を言ふを待たんや、亭は舊と月見の御殿と稱して伊達侯遊觀の所、五代の祖獅山公「雨奇晴好」の四大字を書して扁額と爲す、其額現に存して墨痕猶淋漓たり、八百八洲欄前に寛り、嫣然として吾人の遊觀を迎ふに似たり、今其亭を保管するの人は舊仙臺藩の士某あり、予等の至るや亭の眺望尤も佳絶ある邊に座を設け茶菓を出して縦覽を擅にせしめ、問もさく來游者名簿を出して之れに記名せしむ蓋し例に依るあり、一見するに來游者中には朝野知名の士頗る多きを認めぬ、

### 觀月樓

亭を去りて樓に歸る、時恰も午后一時半、之より船を駛して菖蒲田の海水浴に遊ばんとすの豫約ありき、則ち



船一隻を傭ふの約既に定り將に海上三里の所に遊ぶべき筈ありしが、昨夜晩れて予等の一行に加はりたる高屋氏は助議を出して曰く此層樓に登り、此涼風に浴し争かか海水浴に遊ぶの要あらんや、如かき樓に止りてゆるく天下の奇觀を弄せんにはと、向陽子色頗る動く、今や多數の議は一行の憲法あり、軍議遂に此に決したり、二子が足前岸に進まざるは觀月樓の偉觀にあるか、抑も亦別に入世の至樂とする所あるか、問ふ事を止めよ觀月樓は松島の水濱白沙青松相連る處、春霞、秋月、夏雨、冬雪、四時碧瑠璃より生ずる變態奇觀を双眸の下に披ひるあり、二子が戀々として此所を去るに忍びざるの情あるも固より其所あるのみ、夫の摩密の間に隠見するものは曩きに詣りたる瑞巖、陽徳、天麟の梵刹か、其石梁を撐げ翠壁を峙ち、千点萬点煙波溟濛の間に浮沈するものは復羅、特羅、仙冠、屏風、布袋、大黒の島嶼にあらすや、而して鹽釜、金華山、扱ては又當蒲田に往復する小船は片々として白帆風を孕み、此間水禽の低飛するもの其幾何あるを知せ、ア、朝嵐夕紫親しく此奇景に對せんもの仮ひ詩思さきものと雖も以て石髮龍姿の恠異に其神を養ふべし、况んや特に此景を賞せん爲め、百里を遠しとせせして此地に來れるものをや、浴後欄に倚つて杯を啣むの時、暮色蒼然として薰風醉顔を吹き來る、天下山水無きの句蓋し此時に於て益吾人を誣ひざるを思ふ、

鹽竈に至る

松島の月明に涼を納れたるは昨夕の事ありき、同夜は何れの客ありけん、午前三時頃より起き出で猥りに騒ぎ立たる爲め夢路もおぼろくにて、疾く眠りを破られたれば朝露を終るや否や直ぐ鹽竈迄の舟を賃せり、江上僅かに三里と云へ舟を行くには凡三時間の多きを費せり、前日遠近に眺めたる大小數百の島嶼は舟の進むと共に歴々として眼を遮り、岸上の眺望に比すれば更に一段の奇景を呈せり、午前十時舟は鹽竈に着したるも當日は前田氏來仙の豫定あれば歸台を急ぎ僅かに數十分時間を以て鹽竈神社に賽しぬ、勝書樓を右手に見て境内に達すれば古松老杉蒼鬱として天を摩し、近く松島の風光を隱約の間に認む、只其尤も目觸りたる

は同社の石階を下れば娼閣妓樓境内と相密遊するの一事にあり、午前十一時汽車にて同地を發し三十分にして旅舎に歸る、

金華山の勝を説く

同行者の一人砂川馱庵氏が予等に分れて獨り金華山に赴きたる由は前段既に記せり、氏昨夜を以て先づ旅舎に歸り居たるが予等の歸るや噴々として金華山の勝を説て止ませ、氏の同行者は白耳義國の貴族伯爵ドスバンチャン氏にて通辨一名之れに伴ふ、蓋し伯爵は予等と同宿の人あるが爲め同行の約を得たるあり、一行金華山麓に達するや互に勇を敷して進み弘法の清水石、烏帽子岩、鞍掛岩、天狗飛石、天狗の角力場等數多き名所を過ぐ、濃霧時に滿山を掩ひ四顧亦一の見るべきあく只漢々として身は白雲の間を逍遙するの思あるのみ、山を下り黄金神社に賽するや祠官等一行の來泊を驚喜し精進料理の例に依らば酒醇にして魚鮮あるものを侑め優遇頗る至る、適一修験者玉笛を弄するものあり、其聲悲むが如く訴ふるが如く孤劍萬里の客をして轉た故園を想ふの情に堪へざらしむ、亦之れ一興とするに足る、翌は即ち前日と同じく航路に依り三陸第一の險と稱する黒崎を過ぎて二十三日荻の濱に着したるは十二時頃ありと云々、予の松島に遊ぶや天の一方遙かに金華山を認め默庵今何れの邊に在るやを思ふこと切ありき、今にして知る氏は此際方に金華山頭雲煙縹緲の間に在りしことを、

前田氏茅舎に入る

午後七時前田正名氏東京より來仙す、歡迎するもの船越知事を始めとし縣官、紳商、有志者等十數名、直に中學校附屬ある一茅舎に入る、蓋し茅舎は故らに有志の斡旋にかゝる、氏がセビロ洋服に脚絆がけの輕装と相俟つて似合しき飯寓あり、園は幽靜にして處々壁落ち時に月光を漏らすほどのわびら家あり、而かも清潔にして有志が氏の爲めに飯寓を此に取るの意や諒すべきものあり、予等氏の恙なきを祝す、氏曰く若し卿等に



して先發するおくんば予は將に此行を廢すべかりしのみ、只卿等に對する約束と地方有志が切なる誼を思ふや、非常に困陪せるにも拘らば、自ら奮つて此に至ると、蓋し氏は發程前二日牧野氏の北堂遂に病没し其前一日には葬儀の事あり、一家悲哀慟哭の間に在りて、有志の來遊促すもの矢の如く急あるあり、情誼と約束とを重ざる氏が平生の旨義止むらく今回の行を決せしものあり、予等氏の狀貌を視る、快濶の志氣は之が爲めに毫も銷磨する所なきも、顔色憔悴して形容自ら枯槁せるは氏の爲めに尤も察すべきを思ふ來着後若手縣の有志者等續々面會を請ひ巡遊の日取を約して去る、

塩竈 甚句

「しはがま街道へ白菊植へて何をさくくありやたより聞く」之れ仙臺に於ける古來の俚語あり、仙台通は曰く維新前三百の佳麗猶此地に存せざるに當りて土民の小揚州に遊ぶもの常に足を鹽竈に拄げたりと、甚句を語ふには一種奇妙なる踊りの調子に合すといへり、

前田氏の談話

七月二十五日午前九時仙臺市宮城尋常師範學校内に於て前田正名氏の談話あり、來聽者は船越縣知事、師團山口少將、縣廳高等官、郡長、縣會議員、商業會議所會員、師範、中學、農學校生徒等無慮七百餘名あり、前田氏は當日氣分頗る悪きにも拘らば悲憤慷慨日本の大勢より説き始め宮城縣管下の經濟的變遷並に將來の希望を説き殖産事業の團結を勸説せり、講堂頗る廣濶、此内炎熱甚しかりしも涼氣四襲以て暑を消すに足る、談話凡二時間午前十一時に了り午發後氏は連旬の疲勞を感せんが爲め知事と共に松島に赴けり、又氏は同夜捕籠に一泊翌二十六日宮城郡原町に於て談話午後三時五分仙臺出發の豫定ありし、而して予等は前田氏に分れ明日若手縣盛岡に向け先發せんことゝされり、

挹翠館

談話後向陽子等と共に櫻岡公園内挹翠館に午餐を喫し數時間遊息す、館は夏山の積翠を双眸の間に攪め、眺望頗る佳絶、而して其結構の宏壯なる東北罕れに見る所、高位顯官豪商等多く此に會宴すといふ、園に仙臺の偉人林子平が明治清明に方りて贈位せられたるを紀するの碑あり、蓋し遺族の建つる所あり、大須賀篤軒會つて子平を詠じて曰く、清時慷慨好論兵、一代偉人林子平、不恠危言驚肉食、洞觀海外眼分明、と今前田氏の遊説、子平の時と同じからせと雖も其大義國を受するの誠意に至りては子平に譲らざるものあり、暮夜旅寓に歸れば適東北新聞社の水谷愛次郎君、東北日報社の田手喜市君は予に六無齋の遺墨一帖を贈り來りて送別の意を表するに會ふ、遺墨に序して曰く、(前略)今天涯相見豈莫今昔之感乎、乃呈我郷先輩林子平遺墨一本以充贈遺と云々、友情の厚き一に何ぞ此に至るや、子平の墓は仙臺北山龍雲院にあり、表面に六無齋友直之墓と彫せり、仙臺の志氣今に至りて子平の爲めに衰へせといふ、此夜雨沛然として降り簷滴点々連旬の炎塵を洗ふ、

うもれ木

名取川の下流廣瀨川に埋木あり、其何の化石あるやを知らせと雖も色は黒紫にして光澤あり、獨り歌林詩境に珍重せらるゝのみにあらば、又一般の什器として尤も愛玩すべし、古歌に「名取川春の日數はあらはれて花にそしつむ瀬々の埋木」と稱するものは是れあり、今二三を購ふに多賀城の古趾壺碑を彫刻す、碑は靸鞆國界を去る三千里と誌せるもの、「陸奥のいはてしのふは元としらぬ書つくしてよ壺の石ふみ」の詠に依りて入口に膾炙せり、

服部盛岡縣知事を訪ふ

二十六日午前六時十五分下郷、高屋及び予三名は先づ仙臺を發し瀛車にあること七時間、午後一時十五分盛岡市に着し十三日町村田旅店に投せ、夫より直ちに知事服部二三氏を訪ひ種々縣下の摸様を聞きたるに、知事



は懇切に説示し且つ農事講習所の農學士恩田鐵彌氏を招きて予等に紹介したれば準備の事に付謀議したり、岩手縣の生産は重にも農業にありて近來益改良進歩の徴を呈し其統計を示す所驚くべきものあり、左れば前田氏の巡遊に付ても實業家は競ふて講話の準備に従事し熱心の狀喜ぶべきものあるを見る、而して此夜恩田農學士を始め準備委員等予等を訪ふもの頻繁たり、

### 盛岡地方の氣候

此日華氏寒暖計七十五度位にて、盛岡の旅舎に投したる後は單衣に袷羽織を要したり、左れどもコハ格別の冷氣にして前日來は八十度以上の事も多かりしといへり、本年は五月に至りて櫻桃梅李一時に花を開きしと、又梅實は仙臺以北到る處依然として樹枝に存するを見ても近畿地方に比して氣候の著しき差異あるを証すべし、

### 櫻山神社と公園

二十七日午前八時二十五分前田氏一の關より盛岡に着す、着後氏は連日來非常に疲勞し居たるを以て午後二時迄休憩すべしとのとより、予等二名は石割の櫻を始め櫻山神社、羅漢寺等に詣る、櫻山の岡阜は盛岡全市を眺望し又遙かに安倍の館の舊趾を認むべし岡に南部家累代の碑あり、儼然として當時の盛業を想起せしむ、又盛岡藩士戊辰戦死之碑あり碧血の痕留すべし、岡を降りて公園に至り瀟洒たる二亭に午餐を喫す、清流前にありて、櫻樹園に滿つ、春光の觀蓋し想ふべきあり、

### 杜陵館の談話

午後二時より盛岡市の俱樂部杜陵館に於て前田氏の談話あり、來會者凡一千名、同地には歡迎委員ありて諸般の準備に奔走し、款待至らざるなく、官民が氏の風采を想望するもの感極つて泣くに至る、仙臺に比して更に一層の盛況といふべし、午後七時青年實業協會員を集め再び同館に談話ありたり、

### 物産陳列場其他の巡覽

午後四時前田氏の談話了るや、一行氏と共に物産陳列場盛岡製絲場等を巡覽し又畦畔の間を歩いて農事試験場數十町歩を見る、桑麻、藍、稻苗等盛んに植付あり恩田農學士、小輕米縣會常置委員外數名之を案内し一々説明を加ふ、夫より更に三田義正氏外五氏共有の林檎園に至る、盛岡果樹協會の一部に屬す、三田氏は會つて津田氏の學農社にあり兩三年前迄縣會常置委員たりし人にて同市の有力家あるが、園内一茅舎にて林檎を出し休憩せしめたり、氏亦尤も歡迎に力を添へたる一人あり、因に記す去る二十六日仙臺にて分れたる砂川氏は平泉の舊城、中尊寺の舊跡を訪ひ全日午後予等の一行に會せり、平泉といふは一の關を距る凡二里余、藤原清重が四代の城址あり、衣が關古樹の下に「夏草や兵ども夢のあと」の句あるは此近郊とす、聞く一の關の談話會は予が盛岡に先着したる夜開會せしが聴衆數百名豫想外の盛況を呈したりと、

### 岩手の驥北

二十八日午前五時三十分前田氏は花巻有志の懇請に任せ盛岡より同地に逆行し、砂川、高屋兩君は盛岡に留る、而して予と下郷君とは程を進めて青森縣八戸に向ひたり、八の戸には予の親友武藤一明氏ありて櫛を業とす、今回此行あるを告ぐるや幸ひに順路に當れば是非來遊せよとのとより故ら此に立寄らんが爲めあり、偶元盛岡縣屬平井正海氏當日流車を同ふし牧場三本木支所を見んことを勸む、予等氏の厚意あるに感じ共に中山停車場に降る、牧場は即ち其近傍にあり、周圍凡九里の牧場茫漠として見渡す限り際涯なし、人家僅に數十戸のみ、先づ平井氏の舊知柴田勝義氏の宅に至る、氏は舊盛岡藩士、夙に開拓事業に着眼し同原野未だ一月の移住なき以前に既に同原野の拓植に従事し今は現に數十町歩を開墾し、其息五郎氏尤も熱心盡力すといふ、予等の着するや父子歡喜して牧場事務所に至り、同所長陸軍屬梶茂八氏と共に場内を案内せり、時に烈風面を撲ち塵埃空に漲る、予等梶、柴田兩氏の後に從ふて牧場數十町の高き處に進む、滿地只蓬々たる



雜草のみ、蓋し日本稀有の好牧場あり、五百頭の馬、和種あり、洋種あり、又雜種あるあり、彼等は人の至るを見て驚を立て、出で迎ふもの、如く群々隊を爲し馴れくしく身邊を圍繞し來る、若し其中一頭一方に向つて馳せ去る時は一群の駿馬蹄を蹶だてて之れに尾す、彼等は十頭乃至數十頭づゝ一群とあり、或は草を追ふて奔り、或は谷に添ふて下る、彼等の樂園は實に此曠原漠々の間に在るあり、而かも彼れ他日大に戦時の用を爲すべくんば今日此樂園に愛養せらるゝ所以の道を知らざるものといふべし、世の伯樂何んぞ此の地に一顧を興へざるや、午后二時柴田氏の宅にて午餐の饗を受け開拓事業の經歷談に時を移し、五時頃再び瀛車に搭す、之れより數個所の墮道あり、中にも世に名高き末の松山は波越さるるも瀛車を通過せしむ、今昔何んぞ桑滄の感に堪へんや、尻内に下り黄昏八の戸に着す、武藤氏歡び迎へて云ふ、今夕は既望、月色殊に牙へて月を賞するに可あり、之より距ること里餘鮫の港あり同地に於て兄と舊情を温め下郷氏と新交を締す亦可あらむやと、三名直に車を此處に驅れり、

鮫港の月色

怒濤怪巖巨石を洗ひ、潮水港内の舟舶を漂はす、聞くものは只潮聲のみ、見るものは只太平洋上の金波のみ、今夕何の幸ぞ此豪壯快潤ある天地に遊ぶや、一明君、向陽君及び予の三名は今宵に鮫の港にあるあり、一水樓に誘はれて海水温浴を了り更に一樓に上りて酒杯を啣む、皆是れ秋冬の光景、綿衣を襲ふにあらざれば以て冷氣を防ぐに足らざ、蓋し三伏の熱は俗境の常あるも、一たび此仙境に來れば又炎塵の何ものたるやを知る能はざ、試みに下婢に向かつて東京の暑熱を説く彼等は全く戲言として信せざるあり、予は一明君の宅にて綿入羽織を借り下に冬シャツ一枚夏シャツ一枚、浴衣、紺單衣二枚を着し、向陽君は單衣二枚シャツ二枚の外組の羽織を着たるまゝ、袷羽織の仮衣を爲し居たるに、樓婢等は故ら可笑しき体を粧ふの客ありとす、酒は醇、魚は鮮、一夜の清興は長途の旅情を慰するに足れり、聞く郡司大尉の此近海に負傷するや、同港に上陸

し直に武藤一明君に依りて眼科の治を受け週日療養の爲め此地に止る、一明君は當時紀念の爲めとて大尉並に外二三の同行者と撮影せるものあるが予に其二葉を贈れり、大尉が瀟乎たる氣概を存せる中にも痛く眼疾に病むの色見えたり、前田氏の到着晚れ更に一兩日滞在に決したれば翌二十九日夜も再び武藤一家族と共に水樓に痛飲す、一行將さに八戸を發して鮫港に至らんとするや、一明君の女ゆう子東京の叔父さんに抱かれて車を共にしたしと強情る、ゆう子は今年四歳予は此女の生るゝ時甲府にあり、時々抱ひて衣を汚されたることありしが渠れ知るや知らざや、他人の膝は滅多に上りしことありといふに、予を見て非常に懐かしがり、車上熟睡して鮫に達す、小兒の無邪氣にして且つ愛らしき、天真爛漫として花の如きものあるあり、

打毬の紀念碑

八戸の士族等、舊藩の世、武を講習せんとの意より打毬の技といふを演せり、明治十四年車駕北巡の際、天覽に供し奉りしより長者山公園に紀念碑を建てたり、長者山は藩主南部氏の先甲斐守源義光を祀り祈禱神社と稱す、表に川田剛氏の碑文裏には待從藤原公業氏の和歌あり、曰く

武士のけふの毬うち雲井にもわけし其名はよろつ世まで

蓋し八戸は尙武の地にて士氣頗る振ふ、今回前田氏を歓迎するは實業有力家多きも八戸青年會の如き尤も盡力したる其一あり、全會の主旨とする所は忠君愛國文を修し武を講じ兼て實業上に意を注ぐにありと

前田正名氏の劍舞

前田氏は三十日夕八戸に着す、豫定ありしを以て青年會員七十餘名騎馬又は車にて尻内停車場迄出迎ひたるも氏は遂に來着せざ、會員頗る失望、直に電報を以て三戸に立寄りしや否やを問ふ、返電に曰く明日拂曉陸行八戸に向はんと此の返電の着したるは午后十時あり、之れより先き前田氏は同行者砂川、高屋二氏と共に福岡三の戸等に立寄り道路險惡非常の勞苦を嘗め漸く當地に向ひ三十一日予並に下郷氏等が途中に出迎ふに遇



へり、着後直に青年會場に入り午後二時より實業者に對し談話を爲すこと凡二時間、更らに又青年會員一同に對し特に青年者の士氣を鼓舞するが爲め最も有益なる談話を爲しぬ、之れ亦凡一申問を費せり、談話了りて同會員は氏を饗するの意を以て居合、半捧、捧、舞劍數番を演じ又餘興として古代の舞踏數番と楠公訣別の唱歌と郡司大尉歡迎の歌を一齊唱和せしに前田氏は躍如として快と呼ぶこと數回、青年會の修養は全國稀有の風あるを感じ、自ら劍を案じて衣肝に至り袖腕に至るの歌に和して劍舞を演じ、見る者凜然皆袂を投じて起たんとす、蓋し氏が劍舞を演じたるは實に三十年來の事ありとぞ、又氏は頗る八戸の風儀と修養とに思ふ所あり、鹿兒島造士館長島津珍彦氏に宛て同會の規則を送附したり、此夜氏は予等と旅館を同ふせり、

前田氏と林子平氏

前條予は前田氏と林子平氏のこと就き云々せしが、氏は八戸に着するやカバンを披ひて古びたる一紙片を示しぬ、曰く之れ予が仙臺出發に臨み停車場に於て林子平氏の姻戚林信氏より贈る所ありと、其紙片を見れば

六月六日

福原左近衛 就書

きき君をしたふにたへぬうき涙かけてや染し法の衣手

とあり、之れ林子平氏が全國漫遊の時手帳に親しく記したるものあるを、信氏前田氏の談話に感憤する所あり日記帳を切りて贈りたる所あり、信氏今宮城縣栗原郡長の職を奉せど、青森を距る僅かに三里ある淺虫温泉に到着致候間、青森乗船も來る三日夜とあるべく存候、本日八戸を出發せしは午前四時にて三時頃より支度致し前夜は有志の來訪等にて午前一時頃に漸く床に就き眠れる間とては殆んど無之實況ありしも、同地青年會の壯烈無双ある餘興等の爲め心氣潮然致候、此日八戸町外れには青年會員凡百名紫色の旗を翻へし整列して二行を見送り、同會の講武會掛北村益、備文掛

湊要之助、農事掛島村定正氏等は騎馬又は車にて停車場迄見送り申候、別るゝに臨み青年會の規則を贈られしが其大旨は左の如くに御座候

主 旨

一本會は忠君愛國の大義に基き吾人同胞の協和を圖り文を修し武を講じ以て日本國民たるもの、本分を全ふせんが爲め之を設く

綱 領

- 一 廉耻を張り徳義を重じ温厚篤實の風儀を養成する事
- 一 東西の學術を明にし眞智活才を發揮する事
- 一 今古の武技を研ぎ至剛勇義の氣骨を練磨する事

會 約

- 一 忠節を君上に致すべし
- 一 孝養を父母に尽すべし
- 一 親愛を同胞に施すべし
- 一 尊敬を師長に厚すべし

右等の規約の外に更に細則ありて修文局、講武局、圖書局、農務局等詳細の制を設けあり、其古風にして活氣ある學館あること全國罕れに見る所に御座候、左れば前田氏も非常に之を喜び學生一同へ屬下に忠、孝、仁、義等の一字を書して贈與被致候、又同會生徒は舊八戸士族に多く何れも紺の小倉袴を穿ち、尙武の氣風依然として端嚴正直ある禮義の間に存する様覺へ申候、

扱又前田氏は本日三本木牧場、並に七の戸に立寄り明日當淺虫にて相會する筈に付、小生等は途中にて分



れ先着致候、此地温泉は評判は常に繁昌せせ、又投宿したる旅舎も當地にては尤も優れたるものことあり、格別清潔からせ、只一方は山に對し一方は海に面する景色のみにて御座候、併し瀟聲に耳を洗ひ青山に枕を高くするの仙郷たるはいふ迄もあく候、頃日元鐵道局長官井上氏一族避暑の爲め滞留し居られ候、願みて小生が經過の跡を案するに、水戸、大洗、日光、中禪寺湖、宇都の宮、福島、仙臺、松島、鹽竈、盛岡等或は實業上に或は歴史上に考証の材料を得たることも不尠存候、但し此間前田氏と同行と云ふに不拘、概ね氏と雁行して、時には後れ時には先んじ毎に小都會に於て會合すると致來り候、之れ必竟同行者が調査の目的並に探勝の便を圖りたるに過ぎざる事に候、今此に一日の温浴を取るは旬餘の疲勞を慰せんが爲めにて一同勢揃を爲し、函館に渡航すべし約束に御座候何れ北海道到着の上は改めて種々の狀況御報道可致存候に付以書中紀行に代へ申候也早々敬具(友人宛書翰)

警語片々

前田氏は各地に於ける談話中時々警語を放ちて來會者の心耳を聳動せしめたり、左に一東として之を示さん  
 ▲日本は元來扶桑の國たり、フランス、イタリヤは日本の弟子にて後進の國あり、此後進國七八年前迄は年々二百五十万圓の蠶種を我れに仰ぎたるに、今日は自ら製して買ひに來らせ、且つ日本よりも尤も優等なる品位のものを製す、爾餘の生産物亦推知すべし、予は諸君に相會する時は宛あがら戦場に向ふの思あるあり、

▲山田長政會つて外國に王とある、此般の壯圖一たび挫けて亦見るべからせ、慨するに堪ゆべけんや、  
 ▲コレラ病は十百万人に傳染するも一國を擧げて亡はすに至らせ、農工商の戦は一たび敗を取らば全國一人として負傷せざるものあり、今日は實に出火の時あり、戦亂の時代あり、大地震の眞最中あり、嗚呼國家の危急は實に眼前に迫る、予は數十日間病魔の爲めに飯一粒も食はせ、僅かに他の一二品を食するのみ、

予は醫の勸告あるも養生せせ、蓋し養生するを得べき時にあらざればあり、予一たび瞑するの日は前田正名の言或は追憶し來るべしとあらん、

▲昔四千万人が味方打、兄弟喧嘩、裏切等にて生産を害し敵は胃の腑にまで侵入し居れり、何とあれば衣るもの食ふもの、一として外國の輸入を仰がざるものなければあり、

▲彼外人を見よ居留地の城廓に據りて日本商人を蔑如し、賣買の法實に君臣の關係の如し、宜あるか彼等は春は嵐山吉野の花を賞し、夏は日光有馬の温泉に邦人が夢想すべからざる豪華を事とす、而して其費用の出處は如何、只之れ日本農工商の接待費たるに外あらざる也、

▲又夫の北海に於ける密獵を見せや、國力だにあらば彼等はブチ殺しても差支ない、然るに國力あきか爲め手を拱して知らざる爲ねす、誰れか憤慨に堪へざらんや、而して日本人は犬一疋殺しても償金を取らる、とは何事ぞ、咄又怪、

▲外國では攻伐の結果一國生せ、畏れ多くも我大日本帝國は外國に所謂帝國とは異れり、四千万人皆眞の同胞にて全く一系の血より來る外國には、異種類集つて國を爲す、其間感情の衝突より黨派生せざるを得せ、大日本は實に日本天子國あり、此萬國に比類なき天子國は、只一の力より成る、僅かに翻譯書位を見て主義とか黨派とか味方同士の切合突き合を爲す抑も是れ何等の現象ぞ、

▲殖産の法豈他あらんや、只毎日二厘六毛づつを貯蓄せば一年間に全國四千万圓、五年にして二億萬圓の生産と爲るべし、此國力立たせして一方に殖やすも一方に減じ居らば恰もゴム玉の如く眞の國力といふを得ざるあり、

孤客夜を衝て至る

友人田口秀正君子が八に談話會場に在る時、青森より發電して曰く「當地に於て待つ」と、予は更に淺虫に來



らんことを以てす、昨一日夜方さに三更に近からんとす、偶丁婢君の來着を觀せんに遇ふ、相見て欽然、曰ふ兄の書狀に接し即夜夜を曾して至る此間里程三里と稱すれども蓋し四里強あり、瀛車亦く車亦く歩いて此に達す、只一掬の友情切あるものを汲まんが爲めのみと、乃ち君に依りて郷里及東京の消息を知り、痛飲更の益聞あるを知らせ、君京に在るや、天台道士寫眞を贈りて送別の意を表せらる、其題詩に曰く

登嶽小天下。自誇意氣豪。其奈山上山。仰之一層高。

又君の一友石田信興氏の送別の詩に曰く

海雲深鎖北門秋。又理征裝上客舟。跋涉山川不憚險。檢探風土豈無謀。東西沃野連千里。遠近平林入寸眸。辛苦知君業成後。移民別闢小江州。

今曉浴了りて室に歸れば岩手の蛇沼開墾場主來る、氏の開墾場は曩きに一行を招請したる處、氏は前田氏の後を追ふて此に來れるあり、華氏寒暖計七十度潮聲磽黃が島に鳴り、湯氣淺虫に漲る處、八月二日認む、予は淺虫温泉にて認めたるものを、函館入港迄の紀事として一先擱筆すべく思ひたり、而して出來事は綿々として其後も絶へざるあり、

前田氏は遂に淺虫に寄らざりき、寄ること能はざりしも道理、氏は七戸出發後野邊路の有志等道に氏を擁して去り、遂に昨三日を以て同地より青森に直行したり、若車の際出迎ふもの佐和青森縣知事始め官民數十名、一旦正覺寺に休憩の後、更に予等の旅館とせる早瀬方に移れり、而して北海道の有志宮本千萬樹、前田吉彦の二氏は數日前より出迎として當地に在り、將さに今夕を以て青龍丸に乗込み北海に航せんとするに方り、偶田子の浦丸船長中島兼次郎氏の書狀前田氏に至る、來意に曰く明四日は我船函館に航すべし、是非一日を延ばして之れに搭せば幸甚し云々、蓋し中島船長は曾つて前田氏の知遇を受くるもの、殊に此日は風波荒く、且つ船は田子の浦丸に比して小ければ遂に中島氏の厚意に従ふ事に決せり、翌中島氏至り欣然として一行を

乗せ去るべしと云ふ、

青森には新聞社二あり、一は東奥日報、一は陸奥新報、東奥は自由、陸奥は改進黨に近し、互に相闘きて各一紙輻を立つ、而かも二社は軒を連ねて相隣す、誰れか夫れ漁夫の利を得るものぞ、予と田口氏とは陸奥新報を尋ねしに記者太田清橋氏あり、談話中軋轢せる模様多く、遂に隣家の東奥を訪ふに忍びざらしむ、一日高位顯官の來往に付官民送迎の談出づ、話頭某大臣、某知事、某議員等の來遊に關し内情を語るものあり、語るものは地方の有志、聞くものは行脚翁始め一行の面々あり、有志曰く某顯官此地に遊ぶ一泊の費用貳百金に下らず、驚ひて其故を問ふ、有志嘆じて曰く之れ豈他あらんや、僻遠の地猶小都會より酌女を雇ひ、粧妓を聘す、酒の泉、肉の林たるは云ふ迄も亦く、送迎の虚禮の爲めに費す所其幾何あるを知らせと、顧みて我一行の費用如何と問ふ、曰く貴下の一行百事自辨の實あるも盛岡一ヶ所に於ける費用は少くも三四十圓に達せん、而して其費用といふは談話會場借入、聽乘に供する氷水、有志が旅館に於ける飲食費等ありと、予等の一行は宴會を謝絶し、旅費を辨する約束にて猶且つ斯くの如し、夫の政黨員の遊説、顯官の漫遊、盛粧華麗を觀ひ、以て勢力の消長を卜する如きに至りては地方有志の迷惑察すべきあり、有志曰く貴下の一行こそ實に近時漫遊者の好摸範にして節儉法を尽したる極度ありと、前田氏首肯して曰く、予は知事たり、次官たりしことあるも未だ不幸にして斯くの如き盛大ある送迎を受け、最初より斯くあるべしと知り居らば、ナゼ世間並に送迎の幸福を享けざりしやを悔ゆ、足下等も知れるが如く山梨縣にては予が赴任して後藤君皆東京に遣り去ること恰も予を風の神の襲來に比せしが如しと、颯し了りて長嘆太息、

此夕同行者の一人高屋武二君郷里徳島に事あり、北海に航せしめて止む亦く袂を分たんとす、故に紀念の爲め一同旅装して青森市に撮影す、其人々は前田正名君、砂川憲三君、高屋武二君、下郷寅吉君、田口秀正君(以上同行者)中島謙次郎君(船長)蛇沼政恒君(岩手縣蛇沼開墾場主)齋藤近三君(青森縣屬)及予の九名あり、



夕刻晚餐を共にし宴酣にして悲歌慷慨、談益佳境に入り、留るもの往くもの、歡を盡すこと數時、午后十時同行五名中島君の田子の浦丸に搭せり、

万ことなる樂よ心を筑業より

奥の扉までめぐり社すれ

蟬鳴くや笠を重荷の九十九折

敬喜  
醉骨

### ○北海道紀行

#### 田子の浦丸

漕ぎ出で、見れば白妙ある北海の氷山は、夜方に酣ちらんとして見る由ききも、津輕海峡の潮聲は模糊たる煙霧に玉を碎きて其勢も亦凄まじ、予か東北紀行の終りに於て既に記したるが如く前田行脚の一行五名は八月四日午後十時を以て田子の浦丸に乗込みしが、佐和青森縣知事を始め其他の高等官及地方有志の人々、見送りとして機橋或は舢舨まで來り會するもの十數名、予等は特に船長より廻したる舢舨に依りて同船に乗込みたるに、中島船長が一行を待遇すること頗る鄭重、一行の満足思ふべきのみ、此夜波至つて靜穩、船は五十九海里、六時間の夢を載せ、函館の山を望みたる時は夜もほのく、と明け渡る翌五日の午前四時頃にて船員が朝の珈琲を進められたる時は既に五時頃にやあらん、而して上陸に際しても特に小蒸氣船を廻され五時三十分上陸、東濱町勝田旅館に投宿せり、猶一行の外には豫て北海道より前田氏を出迎はれたる宮本、前田の兩氏も

無論同籍あり、

#### 大隈英麿氏の一行

改進黨の總理大隈伯の令息英麿氏は加藤君外數名と同伴して北海道に入る、此日恰も他より函館に歸り居れば、氏を其旅寓する和田方に訪へり、氏に遇はざること此に六年、而かも依然として温乎たる狀貌を變せず欣然相語ること少時、共に氏を訪ひたる砂川氏は神奈川縣下の政況に付一行に對し例の辨舌に任かせて喋々説く所あり、一行旅裝既に整ひ將に赤地方に向はんとすれば更に札幌邊にて再會を期して別る、予等其行に付て目的は各異なるも征衣を北海に濡らすは一あり、况んや師友の交誼あるものおや、爲めに多少の感さくればあらざ、

#### 碧血之碑

明治辰巳實有此事、立石山上以表厥志と之れ此碑裏面の銘あり、碑は臥牛山腹盤平たる松林中の丘上にあり、前田吉彦君東道して一行田口、下郷、砂川君等と共に來りて相用す、蟬吟山愈靜かにして、鴉聲益鬼嶽々の思ひあらしむ、回顧當年の碧血を想ふ、凄絶又酸絶、予等俯仰低徊殆んど去るに忍びざるものあり、嗚呼此累々たる苔石の下、夫れ果して何人の骨を埋むる、心あるもの誰か感慨淋漓たらざるを得んや、而かも今此巨石存す、英魂毅魄以て僅かに地下に瞑すべきや、ア、笠次郎たり、圭介たるもの今日の狀遂に何如、公園地の小丘に上りて更に五稜廓の遺趾を望む、志士豈言ふ所を知らんや、曠爲めに寸断、

#### 櫻餅

公園地内さくら餅を賣る店多し、一店あり「元祖さくら餅」といへる招牌を掲ぐ、就て休憩したるに同店は公園開始の際始めて開きたる由にて本年に至るまで十七年ありと、店に一齋あり苦辛今日に至れる經歷を説き今日十數戸餅店あるも元祖と記するものは一戸もあし、皆我店に擬せるものありといふ、而して床几に不倒翁



の赤火鉢三個あり、之れに因みて店を晴眼亭と号くと云々、亭より巴港を望む、眞に晴眼亭の名に負がせ、水天明瞭として溟煙遙かに龍飛岬に迷ふ、霧は元松前福山の産、事業は小ありと雖も自ら不倒翁を以て居る其志や愛すべし、予熱ら彼れの状貌を見るに童顏禿顛宛として不倒翁其物の如し、私かに失笑して彼れは予等の何人あるを知らざるあり、

十二里間の圓太郎馬車

六日午前五時三十分、函館港頭の海霧を破りて陸路森驛に進行せんとす、此間里程凡十二里と稱す、一行五人東京で所謂圓太郎馬車一臺を備ふて進む、道路は幅頗る廣けれども噴火山質の土砂馬脚を没し、蹄痕着くる所紅塵空に漲り衣袂悉く泥灰に汚さる、而して此其他の毒虫群を爲して馬を襲ひ餘勢一行を襲ひ來りて其困窮名状すべからず、道半ばにして宇無澤峠下に達し少憩し、更に一山上に着し水を啜みて渴を解す、涼味尤も掬すべし、偶室蘭屯田兵の中隊長大尉吉田勇藏氏來りて一行に會す、氏は故吉田清成氏の姪なりといふ、十二里の間七時間を費し後零時三十分漸く森驛に着、阿部旅館に投じて午餐を喫す、

噴火灣

森より室蘭までは直徑凡二十海里、一行汽船室蘭丸に搭して室蘭に向ふ、此日風靜かにして波頗る穏かきり、携ふ所の毛布を甲板上に展べ此に團樂して回顧するに、背後の休火山駒ヶ嶽は距離益遠くして而して其形状宛然芙蓉峯に似たるを見る、前面遙かに波上に隱見するものは室蘭地方の島嶼にして左右一帯の眺眺は只森茫として煙霧水天と相連るのみ、灣内「イルカ」多し小あるは二三尺大あるものは五六尺、鰭刺として波間に躍り、或は隊を整へて船と競争す、亦一種の奇觀船客思は走快と呼ぶこと幾回、是より先き途中にて一行と前後して來れる二婦人あり、其何れの人たるを知らざるも老たるは母あるべく浦若きは其女あるべし、解舟を共にして甲板に登るや、渠れを此處に招きて席の一隅を假す、時に一行中兼て多情多感の評判高き賦

庵主人は何の爲にする所あるか俄かに乙女の側に進みて旅情を叙め又携ふ所の双眼鏡を惜氣もかく突き附けて使用し玉へと囁む、乙女は厚意を謝しつゝ、直に眼鏡を取つて鏡面の大なる方を其明眸に宛てがへばアア笑止、彼れは一向見へぬといふ風情にて不思議相の様子を示せり、蓋し見へぬも道理あれ、渠れは逆さまに眼鏡を取れるあり、衆見て思はせ失笑すれば渠れの嬌容は時きらぬ紅潮を以て漂はさる、今は仇おれ之れかくば親切ある賦庵こそ却つて乙女の恨む所、物を貸して怨の府とある賦庵の如きは何たる不幸の人ぞや、午后六時室蘭に入港し丸一旅店に投せ、函館を始め森室蘭等旅舎の体裁食物等東北諸縣に比して更に一段進歩せるを見る、室蘭軍港の件に付て聞く所なきにあらざるも此に記さず、因に云ふ函館にて道廳風矢島新之助、區長財部菟氏に逢ひ、木村廣凱氏には途中にて相會すべし等ありしも道を他に轉して爲めに相會ふの機を失せり、

西紋艦に航す

七日午前八時大津山田通ひ位ある小蒸氣船に搭し室蘭より西紋艦村に航す、同地には有名なる伊達氏の開墾場、及西紋艦製糖會社、牧場等のある處あり、丸一旅舎の客室に武揚子が題せる如く萍水相逢是皆他郷之客、今や舟中逢ふ所の人悉く是れ語中の人たらざるはあし、中に古稀の翁あり、霜髮銀髯其狀貌問はせして頗る辛苦を嘗めたるを示す、曰く予は三十年來此地方に農牧を業とすと、翁は沿岸の各所を指示して土地の狀勢を語るに密あり、遙かに沿岸を望めば牧場に於ける牛馬は飲ふが爲めに群をかして水濱に遊ぶを見る、前田氏曰く之れ予が往年其種子を歐州より齎らし來りて送りたる子孫ありと、偶氏は予の手帳を取りて頭大の瘦人形を指し判じ物ありとて示せり、予曰く之れ實に北海道の如きのみ、何とされば頭腦大にして富源開くべもの多きも四肢及胴部は不釣合に瘦せ衰へ、日本人は只手を拱して傍觀するの形あるべしと、氏は莞爾として笑つて曰く然り先づソソ物じやと、蓋し北海道に對する氏の觀察は此一圖に依りて大体を知了すべきも



のあるあり、何れ早晚精細なる意見を發表せらるべし、彼是雜話を爲すこと二時間にして紋籠に着し一旅店に休憩す、華氏寒暖計八十五度暑熱甚し、

製糖會社を見る

休憩後直に同會社に至る、今は砂糖の原料なき季節ありとて休業中あり、伊達家の重臣にて尤も同家の爲めに力を尽したる田村顯久氏は一行を器械場に案内し巡覽せしめたり、共に同社の五層樓に登りて俯瞰すれば伊達開墾場及六百戸の移住家屋は歴々として一目の中に望見すべし、辭して旅店に歸りたるは午前十一時三十分、

伊達邦成氏の邸を訪ふ

午后一時開墾場に於ける新華族伊達邦成氏の邸を訪ふ、邸は僅かに門形を設くと雖も塙塙等は更にあし、只潰々たる郊野果樹、桑園の間にあり、門には少く正五位男爵伊達邦成と標掲す、至れば伊達氏及び田村顯久氏家令等一行を玄關に迎へられ禮接所にて茶菓を饗せり、前田氏は來意を告げて曰く久しく尊家の名譽と功勞とを耳にせしに今や幸に拜眉の榮を得たり、而して尊家移住の人々に對し予の意見を告げて幾分の參考に供せんと欲するも時日に餘裕なく直に引返さんば遺憾千萬あり、猶今日迄の苦辛に關する事態を簡單にても話し賜はらば同行者たる人々は定めて裨益する所多からんとて一々同行者を紹介したり、於是乎田村氏は伊達氏に代り略移住拓殖の模様を語り、前田氏は事細かに諸般の状況を質問し又伊達氏が今日住居の模様を拜見したしと夫より座敷さとの体裁を通覽せしに氏の舊邸は至つて疎造ある一小屋あるが昨年始めて和洋折衷の稍大なる新居を起し齋屋相連ねたり、就て新築を見るに毫も華麗の模様なく只質實を旨とせるが如し、此時伊達氏は自ら先に立ちて其養蠶試驗場に案内し、現に蠶種製造の模様並に桑樹栽培の實況等を指示せらる、蠶種は赤熟、青熟、小石丸の三種にて普通製粹製合せて百餘枚を製造中あり、養蠶は漸く近年の創始に

屬する部下の移住民に傳習せしめんと旨趣に依るといふ、午后二時邸を辭して旅舎に歸れば伊達氏と田村氏は特に答禮として來られ前田氏と對話三十分時、三時再び汽船に投する時には田村氏は海濱まで一行を見送られ禮遇尤も鄭重を極めたり、五時室蘭に歸着す、

郡司大尉

今や郡司大尉は陸頭の上に陸頭を加へ、北海に於ける評判は益面白からせ、甚しきに至りては聞くに忍びざる融評を加ゆるものさへあり、豈夫れ憐むべからざらんや、人を論せる必らせしむ事業の成敗を以てする勿れ、予は私かに大尉の爲めに其志の孤あるを弔せざんばあらず、

室蘭札幌間の流車

八日午前八時室蘭港を發して札幌に向ふ、此間流車の通る處、滿目悉く平原曠野にして時に森林あり、時に大澤、丘陵等ありと雖も幾千萬頃の沃野は未だ開墾に至らざして概ね天然の好風景を存す、馬背を没するが如き蓬草、熊笹の外、桔梗、女郎花、菖蒲、秋冬、葡萄等も黄紫色を交へて亦一種の趣致あり、流車の進みは至つて遅々たる上に各驛の停車時間は五分乃至三十分位を常とすれば午后四時漸く札幌に着し、北貳條西四丁目旭館に投宿す、

木村、珠玖、池野諸氏の邂逅す

之れより先き流車の幌別、白老、苫小牧等の各驛を過ぎ追分に達するや、札幌より來るものと予等の打乗れる室蘭發のものは此に線路相會して互に分れんとするに際し、停車時間稍長きを以て一行何れも車外に出で又は車窓外の原野を眺むるは彼是批評しけるに、偶田口氏は彼の室蘭行の流車中に木村廣凱氏に似たる人ありといふ、下郷氏も兼て同車を知れるのみならず、前日同氏の地方を過ぎざりしとて頗る残念がり居たるを以て相携へて其流車に至れば果せるか否まが方なき眞正々銘の木村氏ありけり、互に奇遇々々と叫びて前田行



脚の一行ある由を語りければ、木村氏は直に予等の車室に來りて前田氏に面す、時に探検委員云々の語田口氏の談話中にありしに、木村氏は曰く其探検委員は現に我と共に同車し居れりと、一行ますく奇あるに驚き前田氏等を置き去りにして予等三名再び其車室に至れば、池野氏は嗜々として出迎へ珠玖氏亦奇遇を喜ぶ、只勿々の際とて親しく談話するの邊かかりしも予等は札幌に在りて道廳の意見などを叩き更に之より十勝原野等へ赴く筈ありと云々、又氏等は我近江新報を札幌地方にて閱し一行の來遊は略豫知し居たるも何時頃札幌に入るやは知る能はず、況して此流車にて相會せんとは殆んど夢想し能はざる所ありといへり、予輩亦意餘りありて言盡すを得ず、挨拶すらソコ／＼にして我列車に歸れば汽笛一聲、列車は既に煙を曳ひて東西に分る、奇中の奇あるものといふへし、

前田氏土方と間違へらる

室蘭より札幌までの間前田行脚は一行と共に下等室にあり、傍に一工夫あり他人より親方／＼と呼ばる、知るべし此者土方中の親分たるを、此工夫氏が自分と其装を全ふするを見て全く土方あるへしと思しか、突然氏に問ふて曰く昨日の入札は誰れに歸せしかと、氏は此突然ある質問に其何事たるを解せせ、入札とは何ぞやと反問せしに、彼又曰く昨日道路の入札がありし筈あり、足下等其事を知れるや否やと思ふのみと、氏は此に始めて自分を土方と間違へられしを悟り、ハ、ア其入札は未だ分りませぬと、彼れ首肯してますく前田氏を同業競争者とし談話中駈引の語多かりしと妙といふへし、

眞駒内の種畜場を視る

札幌を距る郊外二里の處眞駒内に北海道廳の種畜場あり、九日午前八時湯地定基氏邸前田氏を訪ひ共に農用馬車を驅りて同地に至る、場長技師村上要信氏は此日烈日天を焦すにも拘らざ、或は馬牛と二ヶ所に集め又或は自ら先ちて牧場及馬牛羊家小屋に就き一々説明を加へ凡四時間の長きに達す予輩亦滿身流汗に濡さる、

暑熱ありしも氏の熱心懇切あるに感し同氏の行く處に従ふて巡覽したり、十二時に垂んたる時同場内事務所に於て午餐の饗應あり、又該近傍の小川より採掘し來れる堅氷を供へ置き暑熱を驅るに便するを注意願ふ周到、午後は樹下影青く風涼しき邊に草を齒として憩ひ、五時頃再び湯地氏邸に歸る、又午後七時よりは同邸にて前田氏より薩摩汁の饗を享く、

種畜場の現況

著後前田氏と村上場長談話の際同場の現況に付き質問應答あり、要を摘んで之を記さん、同場は總体にて八百八十丁餘内既墾百五十四丁、山其他未墾地六百五十二丁餘、而して牛は五十五頭、馬は百〇七頭、羊九十八頭、豕五十二頭にて猶多く他に貸付あり、馬牛羊とも本年は十頭に付九頭の生育にて則ち九分の割合に繁殖せり仮へば母牛三十八頭の内十二頭生れ十一頭は育ちぬ、牛馬の欠点は冬飼凡六七ヶ月を要すると且つ滿一年より二年迄他府縣に比して發育遲きにあるも牧草宜しき爲め次第に發育を壯からしむ、耕地は大抵牧草多し其割合は二十五年迄年々平均四十四丁宛作り三百八十八石、一反に付八斗五升の平均收穫あり、又穀物は八十九反七畝にて百石を收穫す則ち一反に付一石餘の割合とある左れば試験場として以て地味の一般を推知するに足らん元來同場の定額は毎年八千餘圓にして役員は僅かに十一名に過ぎず、而かも猶減員すべき見込の由但し農夫の備入は此限りならず、而して之れあるが爲めに得る所の公利は第一牛馬の改良、全種苗の繁殖にありて貸付馬は牝牡にて五百頭以上に至る馬は今日未だ運搬用と耕作用の割合分明ならずも運搬用多かるべく牛は乳を搾取するを目的とし傍ら食牛をも繁殖せしむといふ、又更に同場に對し從來の不首尾とすべき点は數千圓を投して海外より買入たる馬あるも氣候風土の關係等より種苗と爲すに適せざ又農用種牝馬と交尾せしむる能はず、交尾せしむるも爪に惡き点ありて遺傳病多し現に土産馬、南部馬等に交尾せしめて不結果の点多かりしが如し蓋し外人言ふ處を妄信せしに依るか、予等の腕を巡覽したる際米國前大統領が



ランド氏より贈りたる馬の子及普佛戦争の際將官の乗用したる馬並に其子等を櫛槽中に断けり彼れ若し言ふ  
あらば此地其驍足を伸ふべき地にあらざると言はん、猶聞く處多きも此に記さず、

### 移民事業に就て

若札の際北垣長官は井上内相の上川行ありし爲め出張中ありければ地理課長原田東馬氏、殖民課技師柳本通  
義氏、風藤田覺次等に依り種々聞く所あり、又參事官白仁武並に加藤廣説、加藤重頼氏等にも別に聞く所あ  
るにあらざるも此般の事他日發表すべき時機あきにしむらんと信ぜれば今此紀行中には故らに省畧するこ  
と爲せり、

### 各所の巡覽

十日午前八時前田の一行は中島公園物産陳列場、製麻會社、農學校及同校附屬農園等を巡覽したり、而して  
同氏は午後四時發の流車にて小樽に赴き他の同行者は札幌に留りしが同氏より電報あり今十一日該地に赴か  
んこと爲せり、

### 蟹甲將軍

井上角五郎君旭館に滞留すること久し、予等一行の同館に着するや、一見直に將軍の淹留せることを知り、未  
だ相會ふの機あし、此日偶寸暇を得て氏の室を訪ふ、氏曰く足下北海に入り來りて後實業上の視察は暫く措  
き新聞記者として如何なる觀念を惹起せしかと、予曰く記者として之を視る觸目減す新聞種子として面白  
ちざるあし、新聞を書く宜しく此新天地に在りて新見聞を世に公にすへし、讀者の利を得る何ぞ此賜もの、  
多きに如かんやと、將軍曰く或は然らん、請ふ予は君の爲めに一事を語り以て新聞上の談柄たらしめんか、  
如今人は必ち北海に對する政府の政策如何を知らんことを欲するからん、予が北垣長官に親しく聞く所  
に據れば道廳は從來取る所の直接保護の如きは自今之を取るを止め爾後は成るべく間接保護の政策を取るを

要す、仮へば道路の如き、港灣の如き、鐵道の如きは今日にても多少直接の保護を要する場合あきにあら  
ざるも、其他某々會社に對して保護を興ふるが如きは益多くして害多かりしは是迄の經驗明かに之を証す、井  
上内相の巡遊に就ても此意見を把持するが如しと、而して更に當地の料理店東京庵が始めて藝妓を内地より  
率ひ來りしこと並に同庵が一料理店を以て猶道廳の直接保護の下に立ちたることを諸譚の間に述べ去り、且  
つ曰く昨年札幌の大火は何の爲めに原因するかと思へ、當地の人は之れ東京庵の爲めありといふにあらざ  
や、蓋し同割烹店は札幌第一の高樓ありしに飛火一たび之れに燃え付きしが爲め遂に同市を焦土と化せしめ  
たりとの意を含むあり、一例既に斯くの如し、保護政治も此に至りて其弊を極めたりと、夫より炭鑛鐵道の  
事並に同道に於ける鐵道布設の急務を觀き餘談社會の穴探しに及びけるに滑稽突梯、詭辨百出思はせ噴飯せ  
しむ、將軍近頃商賣上に尤も勉強、來十五日社用を帯びて歸京すと、彼れ遂に快男兒たるを失はせ、

### 人間到處有青山

吾人が北征後に尤も感を惹きたるものは我江州人が各地到る處に獨立自營の道を開き、或は近江屋と稱し或  
は江州何々支店と稱し、一小都會に入れば其地の尤も有力家と稱せらるゝものは概ね江州人の商家にかゝる  
こと是れあり、函館、札幌、小樽を始め其他の要港一として新江州の拓殖地あらざるはあし、古來松前地方に  
遠征を企てたる冒險的企業家は暫く措き今後益遠征企業家の輩出せんとは吾人が江州出身の新知、舊知に遇  
ふこと實に豫想外に出でたるを以て之を下するに足る、江州の爲め尤も喜ぶべき事ありといふへし、例せば  
小樽港入船町の如きは江州人の商戸軒を聯ね一町内にて七八戸の多きに至る、江州人の勢力北海に振ふる亦  
宜かるかき、

### 本年の北征家

蜂須賀侯、谷子、井上内相、山内侯、小澤男、前田行脚、村田水産、辻新次、諸氏前後踵を接して北海に來



る、自餘貴衆兩院議員、各地の實業者等其數一々枚舉に違わらず、彼等果して何の目的を抱ひて而して此地に入るか、中には眞の遊樂見物をするものもなきにあらざるも、其中七八は概ね將來同道に於る拓地殖民事業の外殖産興業上の觀察を要務とするもの、如し、聞く昨年迄北海に遊ぶものは本年と全く正反對にして十中七八迄は遊覽者に屬したりと、之れ社會の趨勢日本國民を驅り來りて同道の公利に着眼せしむる所以あり、日本の爲めに慶すへきは論なく、兼て北海企業に着眼しつゝある我江州のため間接直接共に至大の利益たるへきこと疑ふからん、左れば我江州人たるもの今後益北海事業を冷眼に附すべからざるものと知るべし、

西川、柏本、宇野、諸氏

小樽に著したる後、田口、下郷、兩氏と共に江州の事業家西川貞次郎氏を其支店に訪ふ、氏は幸にして滞留中ありしを以て談話少時、辭して旅舎越中屋に歸る、時恰も同郷人柏本太内君外一名來訪あり、柏本君は現に海産物會社の番頭として身装を構はす勉強中ありと、三田老爺の薰陶遂に此奮發を爲すに至れるか、又札幌に在るや麻布會社役員宇野保太郎君並に同役員野邊地慶治君等前後懇切に諸事を斡旋さるゝ所あり、而して宇野君は予等にして滞留せば札幌に郷友懇親會をも催ふさんかと云へりき、

前田 正名氏

同氏は着後其同郷人中島五平氏方に入り、十二日午後一時を以て近江丸に搭し函館に向はんとす、依つて歐庵之れに従ひ、下郷、田口、予等は再び札幌に歸り田口君は永く本道に於て移住の目的を定め、おど兩名は函館に留り會せん約束を爲せり、初め正名氏の北海に入るや、時日幾ばくからせして秋田地方より續々來遊を促すのみならず來月十日には静岡大會の舉あり且又氏の宿痾未だ全く癒せ、今は止むべく此地を引揚んこととされるあり、氏は曰く予の身体は全國人民に抵當とせることされば甲に違約せば乙必らず迷惑を感じ、於是予等をして道廳及び地方有志に對し調査上其他諸般の便宜を興ゆることに付種々力を盡さるゝ所あり、吾人一行の満足固より言ふを俟たず、而かも此便宜に依りて見聞せし事實の詳細あるものは到底此紀行に盡すべくもあらざり、其は他日を期して發表する所あらん、

前田行脚と西村醉處

前田氏小樽に遊ぶや戸々殷賑、神洲の氣此に鍾るを見て頗る感に堪へざるものありけん、一首を詠して曰く  
夏の日も尙すしよくりにけり小樽のみさと神風を吹く

井上内相と前田氏

十二日午後七時井上内相は軍艦浪速に搭じて北海の沿岸を巡視せんとす、偶同行者の一人砂川君其隨行を望むこと切なるを以て前田氏の紹介に依りて之を許されたり、前田氏が内相を見る實に久し、氏井上氏に戯れて曰く予は曾つて徹夜事を執るを以て非職に逢へり、足下今北海に來りて道廳俄然勿惶を極め、且つ内相自身にも夜業を爲すと、乞ふ亦免職せらるゝことあるかかれと、内相苦笑して答へず、顧みて他を言ふ、  
アイスと共に撮影す

予等前田氏と袂を小樽に分ち、再び札幌に歸りて後毎日新聞社の社長阿部宇之八、記者上田重良二君を訪ひ更に北門新聞社に關美太郎君を訪ふ、旅館に歸れば鬚髯蓬々たる一野人座にあり、曰く之れ田口君が途中にて其往く處を尋ねられしを幸ひ予に對話せしめんとて連れ來るなりと、彼れは札幌より三日路ある日高國砂流ニツタニ村の住民員澤イヌカウクあるものにて本年五十三、十八才の男子を首として男三、女一人あり何れも農事に餘念なく、畑二十餘町を耕作し居れり云々、試みに彼れにパンケチ一枚を與へしに彼れ町噺に謝辭を述べ且つ禮讓尤も嘉すべきものあり、予謂へらく汝も撮影して他日の紀念に供せんには如何と、時に彼れ眞實の事を知れるにや毫も之を厭ふの情なく却つて名譽の事あるに感せるか、曰く近傍旅舎に自分のアツシあり取り來りて其末班を汚さんと、帽子一個を抵當に残し置て欣々然として急ぎ馳せ去るの狀宛然小兒が



祭禮にでも逢へるが如き看あらしむ、問もあふして例の衣裳を着飾りて至りければ田口、下郷、両氏并に此日幌向原野より來札したる郷人西田市太郎君等と共に南二條西三丁目信伊奈寫眞舖に就きて撮影す、而して彼れが尋ぬる先は英人ジョン、パチラル氏方あるを以て直に同所に送り届けたり、パチラルは多年同道にある宣教師にして土人の事に關し人類學上の調査を勉め自ら長屋を設け土人五戸を養ひ諸種の事業を授け居れる人あり、彼れが其尋ね來りしは同郷人に逢はんがためにて予等が送り届けし時は拜跪深く厚意を謝しけり、依つて名刺を渡して明日再び來訪せよと言ひければニシニツバー(旦那といふの意)に始めて會し此厚遇を受くるさへあるに何とて厚ケ間敷再び訪ふを得んやといふ、而して彼れは能く飯田信三氏の事を語りシヤモ(日本)の語も早くより聞き覺へに習ひ、又カタカナだけは稍く了解し居るといへりア、率土の濱皇土の民あらざるはあし彼亦吾人の同胞あるのみ、撮影の際思一び此に至れば其感殊に深きものあり、只彼れ英人宣教師の許に郷人を托し同じく宣教師を崇拜す、亦憐むべからざらんや、志士少しくアイヌ土人の將來に察する所あれ、

豊平館の夜景

此夜製麻會社の宇野保太郎君は田口、下郷、予の三名を同館に招き晚餐を饗せり、卓を隣にして加藤政之助中山勘三外一二氏あり、晚餐了りて後館外の夜色を望むに、海霧四方を鎖し、街燈、樹影朧ろげに廣衛に連る、景致言ふべからず、此般の畫趣は全國恐らくは其比あからん、旅舎に歸れば時方に十時に垂んたり、

アイヌ病室を訪ふ

アイヌ病室は札幌南一條西二丁目六番地にあり、十三日午后予は其監督ともいふべき宣教師ジョンパチエラ士氏を訪ひ、氏の僕アイヌ人某の案内に依り其病室を見舞ひたるに室は割合に清潔の方にて器具其他の事アイヌ人を入らしむるには決して不自由を感せしめざるべしと思ふ、入室者は各地のアイヌ男七名、女六名合

計十三名あり尤も之れは現在員にて猶醫治して退院せしものも少からぬ由、尤も老たるはナイカン、ピラにてシラキー、ライノー、ラルワー、サンダマ、サイピカン、イカンレキ、ナニモ、コピタ、サンクワツチ、又メノコ(女)はノイチコル、シレンシツカ、ムツケリー、コシカ、又アンリー、ダマシー等あり、予は病者に對し見舞に來れる由を告げ其中にて邦語の分り易き男に向ひ問答せし大要左の如し、

〔問〕 昨日一名のアイヌ人を此に送り届けたるが彼は何の爲めに來れるや

〔答〕 日高の砂流より彼の親族入室し居れる爲めに見舞に來りしが彼は本日直に歸郷せるあり

〔問〕 御身等は宣教師ジョンパチエラ氏より日々説教を聞くよし隨て神様とか天帝とかいふことは承知し居れる趣、左りながら御身等を愛み玉ふ至尊の御恩澤を知れるか

〔答〕 勿論我等は天子様の御恩澤を知れり、我等の此世に生れ父母あり又生活し得るは全く天子様のお蔭あり

〔問〕 然り實に我等は此世に於て一天萬乗の至尊より貴き方なきを知りし日々此御恵みを忘るべからず就ては病氣平癒せば其後は如何するか

〔答〕 歸郷後は何れも農業其他各自の營業に従事す

〔問〕 醫師の取扱は如何

〔答〕 先づ親切の方あり

〔問〕 此入院費は何れの處より支辨し居れるを知るか

〔答〕 之を知らず只入院し居れば拂つて呉れるを有難しと思ふのみ

〔問〕 女子を見るに大抵口元に文縷あり今日にては此風習を改めざるにや

〔答〕 然らば今日は大抵いづれも止めるが多き様されど地方に依り未だ之を廢せざ



〔問〕 御身の病氣は重にドンナ病氣にや

〔答〕 夫れは分らばお醫者様を知り居るからん

〔問〕 尤の事あり、重き病人は何れにありや

〔答〕 此處に一名あり彼れは身動きすらせ只同患者の扶助により便所までに行くと其病者を指す此時重患  
者は微笑を含みて禮を爲しつゝ何か云へり蓋し謝辭あるべし

別るゝに臨み大に勞はり、歸らんとすれば輕症者は一同拜跪して禮を爲す、愛らしきと頑是き小兒が其親  
戚に分るゝが如き風情あり、之より更に公立札幌病院長關場不二彦氏を訪ひ種々の談話を爲したるが其中一  
二を擧ぐれば

アイヌの病氣は重に眼病、咽喉病、梅毒等多し、今日迄百餘名を診察せしに大抵梅毒に觸れたるを見る  
其梅毒は近來の流行にて之れ内地人の無法ある輩が土人に不都合ある行爲を加ゆるに始まるが如し、彼等  
は優勝劣敗の作用により漸次其數を減せ今日の處戸籍に上れるは凡一万五六千人あるべし而かも流行病等  
あるに不攝生の事多く益々其數を減せ

彼等は天然痘を尤も恐怖し此病あるものは親でも子でも構はせ置き去りにして退くありと云々  
又本年二月岩井信六、大島正健、宮部金吾三氏の名義にて世に發表したる書翰は左の如し(猶統計的調査の結  
果として種々面白き事實を發見したるも目下更に關場氏に托して調査中の事もあれば他日之を公にすべし)

アイヌ病室に付き世の慈善義侠の士に訴ふ

明治二十五年に於て當會アイヌ矯風部委員ジョンパチエラー氏は舊土人バラビダ氏と共に京濱神坂の間に遊  
説し専らアイヌ種族の情況並に之が救済に付き普く世人の同感を求め且彼等子弟の爲に一の職業學校を設け  
實用の課程を教授し聊か教化の緒を開かんとを陳し之が寄付金を募集したり幸に博愛哀憫に富める紳士淑女  
の贊する所とあり多少の金錢を寄せられ其後内外諸君より寄贈せられたるものを合せて二百零九圓十六錢三  
厘を得たり然るに該金は當初計畫せし學校を起すに足らざるは明白のとされば當部委員諸士は驚嘆の上アイ  
ヌ病室あるものを建立することを決せり蓋し其目的たるアイヌの貧困にして自ら醫藥を給する能はせ爲に遂  
に天與の命を中折するが如き不幸の者をして來りて札幌病院の治療を受けしめんが爲に之が寓所に當て而し  
て食物藥劑を給與するにあり

該建物は當區北四條七丁目にあり即ち昨年十二月二十四日を以て落成を告げ目下茲に寓して治療を受けつゝ  
あるもの男二名女三名あり而して各地より來りて治療を受けんことを望むもの亦少からせ  
吾人は深く札幌病院長關場不二彦氏に向ひ謝辭を陳べざる可からせ氏は懇篤に吾人の志願を容れ診察治療を  
施さんことを約せられたり

已上陳べたるごとく昨年中得たる金額は今や悉く之が創設費として消費し盡したり故に吾人は疑に吾人の志  
望を實現せられたる諸君に謝すると共に尙此感むべき窮乏無告の種族の爲に世の慈善義侠の士に訴へ以て其  
救済を仰かんと欲す願くは大方の君子吾人の微哀を酌み金錢若くは食物の多少に拘はらせ之を投して此舉を  
贊し玉はんことを

札幌に於ける江州人會

十三日午後六時札幌中の島遊園内岡田花園に於て江州人談話會あり、花園は江州人岡田左助氏の有にかゝり  
千紅万紫一苑に集る、而して其建築も亦雅趣多し、聞く同會は其第二會を聞くの期迫りたるに當り偶予等一  
行此地に遊ぶを機とし此に開會の運びに至りしかりと予等の喜び知るべきあり、開會に臨み發企人總代宇野  
保太郎氏其趣旨を述べ次で同會規約を新たに設けて滿場一致の贊成あり、直に宴に移りたるに流石は同郷人  
の事として互に胸襟を披き快談更の関あるを覺へる午後十時頃思ひくゝに散會したり、規約制定の趣旨は同郷



人の交誼を温め、災禍ある時は互に相救濟せんと目的にて平生より貯金の法をも設定せんとするにあり、當日來會したる人々は左の如し、

岡龜次郎、藤田彌次郎、川村熊藏、中瀬文次郎、北村漢吉、市田某、加賀林庄吉、加藤廣説、國領某、西田市太郎、村瀬實太郎、加藤重頼、關谷篤三、北村尾次郎、岡田兵藏、北村與惣彌、立入壽太郎、新田由平、堀井民三、岡田左助、宇野保太郎、川北龜太郎、藤井太三郎、田口秀正、下郷寅吉、西川太次郎、外數名

流笛馬を追ふ

流車石狩原野を過ぐるに當り頻りに流笛を鳴らして非常を警しむ、何事にやと窓外より前路を眺むれば同原野に放牧せる馬群は軌道に入り流車に先ち同じ方向に奔逸するあり、車長流笛を鳴らして追ふこと久しく漸く馬は軌道を横ぎり無事あるを得たり、此等のこと屢々ありて時に馬群を横殺することありといふ、

アイヌ人其酋長を送る

同原野を横ぎり一停車場に達せし時、アイヌ人一名流車に搭す、時に男女數名の土人は拜跪拱手して其乘客を送り、傍人は曰く之れ酋長の旅行を送るなりと、又英人ジョン、パチエラー氏土人數名を率ひて此邊より下車したり、蓋し布教探險の爲めあるべし、

室蘭より函館に着す

午后四時室蘭に着し、九一旅館に小憩し七時函館行の一汽船に搭す、此夜風波頗る荒く船体の動搖甚し、悉に此小汽船は乗るに等級なく、普通の乗合場處の外ニシンを積み重ねたる荷物の上に薄き畳を敷き乘客をして此處に居らしむるを以て異様の臭氣と蒸氣の温熱とを加へ、婦女子等を船疊にかゝるもの漸く多きを加へたり、午前五時半無事函館に着し直に勝田旅館に投す、同所には前田君小樽より着して滞留待居られたれ

ば此に再び相會するを得たり、時に高木海軍少將總監亦同家に在り、今しも前田君と對談中ありき、

十五日函館の旅舎にあるや、友人横江專之助君長濱の村瀬君を伴ふて至る、予の札幌にある横江君を待つこと久し、而るに圖らざるに相見るとの好機を得たるを幸あれ、君會つて鬼髯を善ふ、名詮自稱最と面白かりしに今や三本の髯だに見る能はせ、好丈夫何か感ぜる所ありて然く奇麗に剃り落したるか、君は謂ふ夏時は剃り冬期は之を善ふ別に意ありて然るものやらんと、左れとアイヌの部落を驅け廻る君の如きは宜しく髯を善へて可あり、予の如き無髯は之を見て甚口惜し思ふ、

鬼髯生に會して間もなく、宮本千萬樹(開墾事業家)前田吉彦(漁場持主)江夏農民(雁皮栽培人)諸君の前田氏を送るもの續々至り、次で又中島船長至る、中島氏等絹紙を展べて行脚翁の揮毫を請ふこと切あり、爾曰く予豈書家やらんや、而かも書すべき辭なきにあらざ、予は一辭を記する毎に自ら辭世の感を以てす、我が亡きやどには之を以て紀念とせせど、

國の爲め盡す誠のますら雄が心の色ぞ山さくらばさ

朝亦夕亦たより待つ身の旅衣袖さへ濡る、五月雨のころ

北海道の昔物語を聞きて

海山も心のまゝにかよふ世にひかしの人に耻かしきかき  
蓋し義經、重藏さとの事に付き感ぜる所ありしにや如何、

午後十時迄四方山の談話に打興し、夫より共に田子の浦丸に搭す船中まで見送る人多し、  
扱ても此夜は風吹き荒みければ印度洋を五回六回渡航せし前田氏も船には弱き身とて多少氣を揉み居られし風情見へたり、やがて二人は各其室に入り寝に就きしにイヤ拔鐘といふに際し三四の乗客ドヤ〜と船内に



闖入し来る、何人にやわらんと耳を軟つれば高木海軍々醫總監ありき、前田氏喜びて室を出て予亦次で出づ、高木氏は隨行者一名と外に京橋區の藥師養生堂主人と相伴ふ、之より何れも燭光畫の如き下に卓を圍みて氷を噛みつゝ談論始まれり、而して船は次第に進行し、怒濤艇を打つの聲は時に談話を中止せしめむばかり也、先づアイス談、次で麥飯論、脚氣説、思ひくは滔々辨し去る、此時船は漸く動搖し來り、掀翻椅子に倚るものをして覺へせしヲ始まつたど叫はしむ、一二の乘客先づ其室に歸り、高木氏の脚氣説未だ其局を結ばせ、氏は平然として濟まし込み、猶疑々として説明止ませ、曰く函館港に於ける輸入の重なるものは米あり、之れ脚氣病の起る所以あり、北海道には雜穀多し之を常食とすれば病氣は起らぬ等あるに、渡航人民多くは内地の米食に慣れ、米にあらざれば疏食喰ふに堪へせと爲す、憐むべからせやと、引證自在聞くに益あるの説ありと雖も一人去り二人去り、前田氏の如きも疾くは室内に入りて亦其影を認むる能はせ、予も今は船の動搖に堪へ切れ室内に逃げ込みたれば氏は獨り孤燈に伴ふて嘯くのみ、其後は風波も割合に静かありしか、津輕海峡の夢は穩かに、翌午前五時ボーイの茶を侑むる聲に眼を醒むれば、海霧灣頭に滿ちて咫尺辨せせ、六時青森に入港すれば出て迎ふ地方有志と官吏とは埠頭は充ちたり、而して高木氏の一行は直に涼車に搭しぬ、全行の一人砂川君今何れの邊にかある、昨の電報に依れば或は根室近海にあらんか、此後北海紀行を次ぐは同君の任として予は此に擲筆せん

且つ夫れ田口君亦十勝に往かんが爲め目下札幌、函館地方に行李を整へ居たり、之れ亦た將來予の北海紀行を補ふべき一人あらん、若し夫れ明春雪釋くるの後予の足跡は果して何れの處に向ふべきや、予自らも今之れを知る能はせ、只予は此行に依りて北海道に於ける農工商の大量觀察を爲すに多少の好材料を得たるを信せざんばあらざるあり、而して殊に左の諸問題の如きは國民の豫め着眼せんことを望まざんばあらざ、

- 一 北海道と内地各府縣と衣食住の程度
- 二 北海道の文明は東北諸縣に比して却つて進みたりといふものあり、果して然りとせば其原因如何
- 三 國家的の觀察と一個人の利益を主とする觀察とは其間大に徑庭あり、隨つて觀察者の眼識にも相違するからへからざる事
- 四 伊達氏の開墾事業に對する感想如何
- 五 伊達氏の開墾事業は今日に於てこそ人の贊嘆する所され、而かも當初に溯りて之を考ふれば辛酸備はるに至らざるあり、則ち一己人として之を評せば始めは損失に損失を重ねたるも今日に及んでは獨り其人の利益のみならず國家の經濟上尤も利益あると
- 六 道廳の調査は精密あると疑ひし只之れに之れ據るの利害如何
- 七 江州人が開墾事業を北海道に企てたるは彼の幌向原野の必成社を嚆矢とせん、然らば則ち同社の現況、並に將來の豫算に對して意見を表明するは觀察者の義務あるべき事
- 八 北海道の事業 農、工、商、孰れを尤も利益あるものと認むるや、其利害得失如何
- 九 春夏の調査は秋冬の調査と時に豫想に反するとおき乎、只春夏溫暖の時を見て俄かに秋冬の光景を想像し來るあらば其結果如何
- 十 北海道に沃野千里の豊饒を有するは一見固より疑ふべくもあらざ若し其豊饒あるを知りて拓殖事業を不可とするものあらば其理由は如何
- 十一 騎馬原野を跋渉するのみにては其肥瘠は知るべくもあらざ然らば其道の人に托して調査すべき乎、或は單に目撃せしを以て足れりとする乎
- 十二 鐵道線路に利便多き地は開墾すへき所狹隘あり相反して利便少き地は廣漠無邊の沃野連る、若し移



民事業を企つるとせば將來の利害得失如何  
 二 現下移民の多數又は少數は定住せんとするもの凡幾割にて又水草を追ふ不定住のもの幾割位に當れる乎

三 惡漢亡頼の徒を移住せしむるものとせば其取締法如何  
 四 北海道種畜、各會社の現狀并に將來

以上予が思ふに任せ列擧したる問題あり、左れば此外若目留意すべき点固より鮮少にあらざるへし、只以上十五問は之れが觀察者たり又は地方に在りて北海道問題に着眼するもの、知らざるへからざる所あり、予別に意見あり、機を見て詳論せん、

國くをめぐり玉ひてもるひとに

まことの業を除す賢ふさ

敬 喜



### ○嵐峽園遊會

二十七年四月二十日午前十時五二大會も事奇く了りたれば、一千餘名の來會者は五色の小旗を帽子に挿み黄塵十丈車を聯ねて嵐峽に向ふ、予は會の了ると同時に之れが通信事務を處理し途に日報社の渡邊亭同支局員高阪兩氏に邂逅し一揖共に車を驅りて先發者の後を追ふ、洛外に至れば雜妓を載する輕車三々伍々隊を爲して雁行す、思ふに此解語の花亦同じく嵐山の游に赴かんとするあり、洛外の僮夫野人予等の一行を瞞見し如

何に感じけん佇立耳語するもの多し、

間もさく渡月橋畔に至れば來會者既に幾百、車輛途の兩側に駢列するもの其數幾千あるを知らざ、五色の旗は遊船に櫂てられ又河の兩岸に翻へる、但親れば屋島壇の浦の戦も斯くやあらんかと思はる、計りに勇ましくも亦雄々しく、何れも滿身の英氣を負ふて來會するもの、笑語喃々、快談壯語今や舟の曠するを待ちつゝあり、稍ありて前田夫人及び其他の貴婦人數名前田氏の愛兒三介、四郎兩氏の手を携へて來り、正名君亦來會す、此前後京都東京を始め各府縣の官吏も參着しぬ、艦裝の舟は方に大堰川を溯るもの若干隻、先を争ふて之れに掉す、予の舟は高木文平、大坪權六、村山鎮、渡邊亭其他紳商七八名あり、流を溯り各所の岸に設けある折詰船又は酒船、すし船、都賽船、ラム子船等々に立寄りて切符と更換を求む、各船鴨東の妓兩三名つゝ店婦と寄りて斡旋し仙姿嬌態嬌として晚櫻と其妍を圖すに足る、臧者曰くナゼ佳人の切符を賣らざるかと、蓋し佳人岸の舟にありて客舟に來らざるを以てあり、

仰で兩岸を見る、葉ざくらと楓葉と相交り、鬱葱々として滴るが如く俯して流を見る、白沙水清く畫舫上下するの間舟筏交錯して行く、一舟活惚を踊りてタワイさきものあれば、一舟實業を談じて胸襟を披くあり、或舟は紙業者と見へて紙製の奏任服を若し帽子を冠るあり、就て之を熟視すれば中井三郎兵衛氏其隊長として紙製の陣羽織を着用せるあり、又和樂を吹奏するものあり伶人十數名一舟に掉して流れを下るに逢ふ、洋々たる頤聲峽雲翠綠の間に滿ち心耳爲めに澄清、偶正名君一舟より他舟に移り、他舟より又他舟に移る、前田君萬歳の聲嵐峽に振ふ、上流温泉の邊に至るまで岸上處々輓を懸吊るし又は休息所等あり、思ふに之れ屋島の浦に擬したるものか、予が前の推想は中らざと雖ども遠からざるを知る、

上るものあり、下るものあり、相逢ふ毎に拍手喝采の聲蕩々陶然として酔ひ默然として舞ふ、踉蹌の狀危險あるが如く感せしむるに當り一男子あり水中に浮べり、誤つて陥りたるにやと諦視之を久ふすれば彼れは水



中浮き袋の發明者某とて特に此會を利用して廣告を爲せるあり、亦其道に勉めたりと謂つべし、午后三時上流より舟を捨て岸に上りて樹間を逍遙し、鳥路を辿りて下ること數丁、眞田武左衛門、其他の諸氏に會ひ共に歸途に就く、高さより俯瞰して一帶の光景を願望するに宛然として畫様の看を爲す、ほどゞぎす亭前に歸りて車を命せれば初夏の峽雨山に縹々として河上に落つ、時に敏捷なる男あり、急に草鞋脚絆の行脚風を装ひ雨傘數百本を會員に配與せり、聞けば之れ京都の委員にて同會の爲めには非常の熱心家なりとぞ、五時清々館に歸る、館内 兩陛下の御肖像を奉置し、尊前に於て同大會紀念の杯一個と扇子其他を受けて各府縣に袂を分つ會員多く名簿に注するもの既に七十餘名前前田氏一々別意を述べ居たり之を記と爲す、



## ○四國紀行

### 大和川丸

二十七年十月二十日大和川丸に搭し神戸より將さに櫻を解かんとする時は暮色蒼然として神戸灣頭の景致全く一變せり、無數の船舶と市内及び山上の燈光燦然星の如し、諏訪山上にありて港灣を眺望し景色の佳を賞すること妙妙からざるも船中より望見する景色は亦一種の奇觀あり、岸は船を送り船は又船を送る一抹の黒烟は已に神戸港頭の人と分を告げぬ、船中室を向ふせしもの數名、多くは商賣家あり一人書生体の人あり予が愛媛行を知り特に厚遇を興ふ後にて聞けば愛媛縣三津ヶ濱の産疾くに予が一行の其地方に至らんとするを知れるあり、淡路島を右手に眺め鳴門にかゝれば是迄左程動搖せざりし船体は俄かに非常の激動を始め多度

津に着せし頃は東天曉色を呈したり、時に予の名を呼ぶ人あり顧みれば愛媛の農事熱心家村上豊次郎氏にて氏は廣島に前田君を招待し予の必ら此船にあらんことを覺り多度津より乗船すといふに遇ひ偶然知友を得たるを喜びぬ、氏之より甲板上に案内し處々の島嶼を指點し今治着港に至る迄雜談に餘念なし、

明くれば三十一日午前十時を告ぐる頃予の目指す今治港に着したり、港は戸數三千先づ繁昌の地と云て可あり、埠頭に順成舎と號くる旅店あり眺望殊に佳、村上氏の案内に依り前田君二十二日到着の上は此處を本陣に定めたり、村上氏の居は之より一里強を距る櫻井村ありといふ有志二三に面會し右の櫻井に赴く、

### 三 奇 園

園は村上氏の花園に名づくる所、三奇と名づけたる緣起は聞きたれを暫く省く、園には佛手柑、九年甫、橙、夏蜜柑の類珠々枝に垂れ、鶏頭其他の秋草方々に妍を放てり、桑樹、梨、桃、柿、野菜等幾十種各類を以て分ち栽え中に一小亭あり、高さに登りて俯瞰すれば前面一帶は燈籠にして會て漁場紛争の處、後方一面は山岳重疊して名士の墳墓少からせ、蓋し古戰場あり、園主村上氏常に庭園の植物に灌溉培養怠らせ又小麥の栽培には尤も熱心にして豊稔麥といふを發明せしとは農事熱心家の知らるゝ所あらん、氏は本年又風知らせと稱する一種の麥を世に公にせり、此麥は人工を以て麥の二種を交接せしり葉莖強硬にして風害を恐れざるか爲め此稱を附したるありといへり、

### 志 島 ヶ 原

櫻井村郷社の在る所は海濱にして白砂一帯青松を籠へり、土人稱して舞子ヶ濱の景も之れには及ぶまじと誇れり、松樹の多きは眞に舞子ヶ濱も三舎を避けん只松樹の茂生する處二三町の間に通ぎざるは遺憾あり、郷社には菅公を祭る曰ふ菅公配所に赴く時船此濱に漂ふて着せられしを以てありと、二十二、三兩日は大祭に當り村内非常に混雜せるも前田君を招待せんとて有志狂奔せり、會場は紡績會社昌榮社内を用ゐんとす、



### 人事蹉跌多し

二十二日午後五時水津川丸の今治港に到着せんとするや、同船には前田正名君乗込み居るへき豫定ありしを以て、同港民は會場旅館宴會場などの準備を整へ顧がて、船の沖合近く進み来るを望み、小松崎郡長石原町長外有志を始め松山の五二會委員櫻井歡迎者等數十名は小舟を漕ぎて沖中に迎へ出づ、祝砲に代ゆる三發の煙火は轟然として港頭に鳴り渡り全町の老若男女は皆浦頭に迎へけり、解舟近づきて水津川丸に至れば只見る一人官吏体の人甲板上に立つあるのみ、人々前田君見へて實業の總理何くにあるぞと訝りつゝ之を索むる程に彼の官吏は衆に會釋し前田君は此船にあらざといふ、ソハ又何故ぞと問ふに此日山陽鐵道汽車軌道に大破損あり、爲めに君は如何せられしやを知らざといふ、扱ては同君の身に恙なきや否やと一同失望に憂愁を含み、港民の混雜はとり分け發起人の必配一方あらざ、各所への電音櫛の齒を引くが如く繁かりき、稍ありて一音は傳へぬ君は明日尾の道より行く之れ廣島發あり、此間有志諸氏は三五回の急使を各郡村に馳せ夜十二時に至りて僅かに止みたり、但し君の身体に異條さかりしは人々の賀する所あり、而して前の官吏といふは愛媛縣の淺田參事官ありし、

### 濤聲又潮聲

旅館順成舎といふは海岸に瀕せり、港内旅舎の巨擘ありとか、前面一帯煙波淼茫として際涯なく、島嶼參差として白帆黒煙と相連る、三更人定りて後靜座孤燈に伴へば、濤聲怒るが如く又訴ふるが如し、潮流宜しきに遇へば和船尾の道に遠する十時間あるへしといふ、蓋し港頭の風景は收めて此一樓にありといふも詭言にあらず、

### 今治と櫻井

今治町は商業地にして櫻井といふは工業地あり、今回前田君を迎ふといふに付ては今治に於て云々の企てありといへば櫻井は又之れに劣らぬ計畫を爲す、曰ふ今治戸數大といへども綿フラネル漆器等の本場製造地あり、實業上の事一步も譲る所なしと、互に競争の氣味を以て熱心盡力せる様勇ましといふの外なし、蓋し兩者何れも獨立の氣象に富み他に後れを取らざらむとの精神より来るか競争も事によりて弊の大あるものあり、實業上の事に至りては競争益多くして利益愈多きを認むるのみ、

### 歡迎と談話會 (櫻井)

二十三日午後五時には果して前田君今治港に着せり、烟火は冲天に轟けり、有志は喜色滿面に顯はれたり、一旦順成舎にて休息、直に櫻井村に至らんとす、時に后八時人車を聯ねると數十輛、道側目を聳つ、櫻井にては兼て膳し合せたるものか山上に人あり一行の來るを望見し歡迎者に火を以て相圖を爲すよと思ふ瞬間烟火發村端にて打揚られたり、路傍質朴の村民數百何れも手に手に提灯を携へ或は所々烽火を點じて出迎へ村上時次郎氏の別荘に案内せり、翌日午前メンテル工場昌榮社にて談話聽衆三百餘名何れも非常に感激の摸様にて直に五二會支部設置を見たり、此日前田君の談話に先ち山人亦一場の談話を試み五二會成立の次第現況等を報告しぬ、此前後漆器、水産物、メンテル等の陳列を一覽し歸途は豊次郎氏花園にて休憩此にて留別の挨拶あり、別るゝに臨み同地の有志は君と山人等に紀念の爲めとて、土地の産出品數點を寄贈せり、

### 今治乃談話會

今治に引違したるは午後一時、間も無く同地常高寺本堂にて談話聽衆一千名、是れ亦非常の盛會あり、土地の豪商にて代議士ある村上芳太郎氏は一同に代り前田君に謝辭を述べ今治五二會支部の組織を見たり、萬歳三呼散會を告げし後は村上代議の紡績場を一覽し旭屋樓上の懇親會に臨む、列席百餘人、

### 佐野子と前田五二會頭

二君頃日流車を同ふす、子爵手帳の端に記して示したる所を見るに左の如し



西奔東走日無休。到處民爲劉善籍。同胞四千有餘萬。瀧君熱血壯皇洲。

今治松山間

廿五日下午穴郡砥部に至らんに、今治より三津ヶ濱に出で、夫より陸行すべき豫定ありしに、當日風波暴く俄かに模様を變へ同行二人車を雇ふて松山に向ふ、此間二大坂路あり、道路險巖、徑鳥路をたどりて僅かに通るを得たり、此間十三里砥部に達すれば十六里と稱す、海濱の阪路風光殊に佳絶するものあれども優々之を賞するの閑さく車は二人曳といふは名のみにて大抵は徒歩勝あり、車夫は車を引き客は荷物を携へて之に尾す、之れより先今治出發の際縣官郡吏有志の面々へは悉く隨行を謝絶したれば此等の人は餘義なく海路に依りて松山に待受くべきことゝされり、阪路の終りし一荒村にて「せんめし」と看板せる茅屋に就き午飯を喫せんとて予は握飯を出し、前田君は小饅の新鮮あるもの數尾を求め自ら炙りて菜を調へられぬ、老婆茶を進むるを見るに黒赤くして番茶の煮詰めたるもの、翁曰く之れ印度の紅茶と思へは却つて味ありと、此處より松山迄四里途中出迎人多し、共に車輛を聯ねて砥部に達す、砥部の一里手前より路至つて悪く車を通さるに困難あり、翁は駕に乗り他は概ね徒歩せり、

砥部の談説會

同地は下浮穴郡に屬す、愛知の瀬戸の如く砥部焼尤も盛んにして、陶磁器の名産地たり翁は着後一喫煙を取らば疲勞の身を以て直に會場に臨み談話二回凡四時間の長演説を試み更らに第三回目の談話に移らんとする頃熱心の餘眩暈昏倒亦如何とすべからせ、人々驚いて氏を元里正にして蒙農ある越智益男氏方に案内し終夜療養に力を盡しぬ、談話斯くの如く中止の姿あれば予は代りて五二會の組織と團結の必要を述べ局を結ぶや、有志總代村長宮内克明氏の謝辭あり、次で一同五二會組織の擧を賛成し愈五二會砥部陶磁器部設置を可決し萬歳を三呼して退散したり、廿六日は前田君も元氣稍回復駕に依りて久万町に至らんとし予は馬を蹴ふて之れに従ふべく、其他送迎者は何れも徒歩すべしといへり、蓋し同町に至る山路六里間甚險惡あるが爲めあり、

法主的行脚乃實相

廿六日拂曉砥部より久万町に出づるに當り秋雨漸々として降り父老皆涙をうかめて送迎し村内の老若所々に屯して道側に跪拜す、君は駕に乗り、官民有志の送迎するもの悉く草鞋脚絆がけあり、供まわり數人其擁へる兩楯には橘の定紋打つたる雨おひを用ひ、駕の前後に擁して進む上浮穴舊郡長槍垣氏先導し徐々として明神坂新道に入る、此般の光景宛然本願寺法主の巡錫に髣髴たり、而して此從者は盡く地方屈指の實業家たるを見れば君の社會に於ける信用も亦偉大なりと謂ふべし、

白雲紅葉

明神坂あへぎく上ること二里餘路險峻たるも新開坂路あれば道巾は稍廣し、左れども泥濘脛を没し歩行殊に困難を極む、峠に至れば久万町の有志車數輛を回して歡迎の用意整ひ居たるを以て此に蘇息の思を爲して下る、右は斷崖絶壁、左は窮谷杳然たり、見るく白雲起り所々紅葉秋色を染め出せり、眺望佳あるもの忽ち濃霧と白雲とに錦繡を閉ぢられ、立ち上る雨氣は森茫として煙の如く絮の如し、今は四圍亦一の見るべきさく、只車夫二名の奔電に委するのみ車上回想すらく、去二十五年の秋は此候北越の巡回にあり、昨秋は又奥羽地方の歸途東海道地方を巡り、今茲此身四國の山中に在ることを、前田君一首を詠じて曰く「久万の山一ツ梢に紅葉して赤き心は今知られけり」と予の感慨無限あり、坂盡くる所に至れば郡長加藤純次郎氏有志と共に待受くるに逢ひ相共に久方に着す、時に午後一時に垂んたり、

法念寺の談話

午后二時より法念寺に談話會を催ふす、聽衆凡四百懇親會も亦同寺に於てす、當日予は例に依りて五二會の



由來將來の計畫等を説き前田君は病を推して兩三回懇話せり、此處茶、米、紙等を産出す

### 山色水光 (豫土の國境)

愛媛縣より高知縣に出づる羊腸たる山路は近來新道とありて意外に開墾せられたり、二十七日午前六時曉霧を衝て久万町を出發す、之より川口に至る八里程奇景勝境一々應接に過わらば、川口村に達する迄道路一段は一段より秋色濃にして瀟瀟兩岸の草樹錦繡を織らざるを、殊に久万町を距る二里程の所御三戸の勝景に至りては天王鬼斧、一行驚ひて凝視之を久しし佇立殆んど去る能はざらしむ、此處溪流二派に分れ其分水の處に一巨島天を摩して聳ゆるものあり、其質全く巖石より成る島は則ち一大巨巖あり、松樹處々に点綴し巖下の碧潭渦文を生じて深さ幾尋といふを知らず、此日晴雨定らば、時に白雲浮び出でて半ば山嶺を掩ふ宛然銀粉を塗抹せる一幅の好畫圖あり、夫れ天下何れの處にか山水亦からん、山水は蓋し氣を養ふもの此般絶勝の地に遊ぶあらば胸襟豁然として覺へば快哉を叫ばざるを得ず、偉人之に依つて生じ、意匠之れに依つて起る、誰れか能く此天然自然の好圖畫を利用するものぞ、加藤郡長等國境まで見送りて別を告げり、

### 仁淀川を下る

川口に出づる前程凡二里の處にて時已に十二時に垂んたり、車夫等空腹を訴へ足進ませといふ、則ち携へ來りたる竹皮包の握飯を彼等に與へ、前田君始め同行數人は何れも一茶店に就きて薩摩芋を喰ふ、世上飽食暖衣の徒此眞狀を看取するあらば、果して如何の感を得べきか、之より先高知九一合資紙會社の中田久太郎氏出迎の爲め久万に來り、且つ豫め此日川口より仁淀川を下るべき用意を整ひ置けり、左れば川口より乗船に臨んで新鮮の鮎魚を調理し船中酒飯を饗せり、前田君亦非常の場合にとて兼々携帶中の牛肉罐詰を開くあり、同船者愛媛見送人檜垣篤郡長、村上縣屬、御手洗茶業家を始め外三名何れも快を呼びて午前中の勞を慰ませといふことあり、仁淀川の流之を夫の甲の富士川、瀨の岐蘇川に比すれば大に緩慢にして亦其景色に於ても稍遜色なき

にあらざると雖ども、其趣致互に相似たる處あり、兩岸の猿聲近く聞き得るが如き思わらしむ、越智より上陸するや佐川及猪野の有志の迎ふるに逢ひ佐川に達せしは午後七時あり、同所に着後某所にて暫時談話、高野某の別荘に投せ、廣大なる別荘にして前田君と予とを止宿せしめて何人も居らざりき、此止泊に付ては奇談ありとも略す、

### 土佐紙業部發會式

廿八日快晴一點の纒塵を見せ、殊に伊豫の國境を過ぐれば温和春の如く四境の山岳霜葉を帯ふるもの未だ少し、午前八時吾川郡伊野町の熱心家吉井源太翁及び茶業家平尾喜壽氏外數十名佐川村に歡迎するあり、相共に伊野に入る、仁淀川の渡頭より伊野町全体一面櫻花爛熳の看あるは花にあらざして木綿及び紙製の大小旗其數幾千万を綱もて引き回し町内尽く連關せしめたるあり、布片には紅色にて前田君萬歳、五二會萬歳と記し片々風に翻る、旅館丸中の門前には楮の皮にて門を造り歡迎の二大字を扁し戸毎に國旗と提灯とを出し人氣宛ちがら湧くが如し蓋し同地は高知市を距る二里半土佐の紙業は多く此地方にあり、若後九一合資紙會社の別業にて暫時休憩、午后一時吾川郡役所内にて紙業部發會式を行ふ、先づ吉田會會員總代として前田君歡迎の辭を述べ、次で前田君の式辭知事代理青木參事官の祝詞あり、之より予は同地有志に代り五二會紙業部設立の本旨と規約七條を説明并に朗讀す、是に於て吉井翁其可否を一同に計りしに異議なく直に可決茲に五二會組織を了せり、前田君の發聲に連れ、兩陛下と五二會の萬歳を唱へ散會し直に談話會場へ赴きたり、

### 劇場大國座の談話會

會場の入口其他處々「帝國五二會萬歳」の菰包數十個を積み上げ幔幕を回らし恰も演舞の開場式でも行ふに似たり、此日の聴衆は概ね政黨政派に關係あれども實業上に於ては屈指の人々のみにて七百餘名、予は例に依り五二會の組織に關して既往現在并に將來の希望を述べ、前田君が廣く農商工全体の演説を聞くに資せしむ、次



で前田君は吉井翁の紹介にて境上に現はれ一々圖解にて談話ありたり、殊に聴者の感を惹きしは前田君が黨  
 なく偏なく大に政事紛糾の弊を指摘し自由國權其他の政黨員を刺戟して餘蘊なかりしこと是れあり、君曰く  
 世には主義とか何とか馬鹿らしき事に競争し同胞相戦ひ兄弟鬩に闘ぐ、語に曰はせや外侮を禦ぐと、今の時  
 何の秋ぞ、一寸戦端を開けば直に一億幾万圓の國債を要するにあらせや、而して此軍費は吾人同胞の負担ある  
 のみならず、將來尙幾何を要すべきかを知らせ、然らば則ち内訌は斷じて避くべく感情は嚴に之を排斥すべ  
 し、要は此重大の始末を附くる農工商の團體を以て經濟上の敗亡を拒ぐに在るのみ、洒落臭ひ世の馬鹿ども  
 が他人の願便を甘んじて同胞互に競争せよといふ何ぞ速に此心を以て海外貿易場裡の競争に従事せざる蝸牛  
 角上の争ひ長嘆大息の至りに堪へんやと、其小組合の結果は紙業は云々茶業は云々と統計と圖解に據りて現  
 時實業上の退歩を指摘せらる、聞くもの首肯せざるはあし、曰く不忠のもの、曰く國家を知らざるものと、  
 世の政治狂奔者流を痛斥して而かも一人の否をいふものあし、至誠の人にあらざれば此地に於て此言を吐く  
 べからせ、俯仰天地に愧ぢざる人にあらざれば此言を以て此地の人の肺腑に入らしむべからせ、君は則ち天下  
 に一人の反對を有せざるものか、終りて丸中樓に懇親會あり列席凡二百名、君去りて後は放歌高吟滿樓を搖  
 かす、君別室に宿して此状を見、土佐の俗は眞に薩摩の風あり、天真亦愛すべきにあらせやと、人の某別荘  
 に雜沓を避くべしと勸むるあるも聞かざりき、

高知農學校を觀る

廿九日午前八時伴野町を發し十時高知市に到着す、學校は市の入口に當るを以て直に同校に立寄る學校職員及  
 び學生諸氏は玄關前に整列して歡迎しぬ、前田君は試作物に就き一々質問を爲したる後學生を一教場に集め  
 て詳々説く所あり、曰く諸君と我々とは世の頽勢を救ひ國力の發達を計らざるべからざる重任を負へり、世  
 間の無責任的議論は正名の取らざる所、言へば必らせ之を行ひ、行へば必らせ其効果を収む、言行一致始め

て風教を維持して國体を發揚す、滔々たる世の風潮の爲めに驅らるゝ所とあらせ、志を農事に立つ、其志や  
 美あり、宜しく其終りを令くして國民たるの本分を盡されむことをと、訓誨反覆學生爲めに感憤せざるはあ  
 し、終りて由井屋方に投せ、

政熱の沸騰を戒む

午后三時前田君は高知縣下屈指の實業家四百餘名を有光氏邸に集め特に注意して曰く薩長土肥の如きは維新  
 の大業を翼賛するに功ありしこと人の能く知る所あり、然れども維新の大業其功未だ全く收むるに至らせ、而  
 かも主義とか感情とかの爲めに同胞互に相傷き毫も顧みざるが如きは當初の目的に反すること多かるべし、  
 今や國力の衰耗は經濟上の失敗を招きつゝあり、之を恢復し之を充實せらしむるが爲めには決して區々の政  
 争、紛々の擾亂を事とすべきの秋あらざるべし、土佐武士宜しく此に着眼し外敵と戦ひ以て國家と國家の一  
 大競争に従はざるべからせと、此日傍聴者中には石田縣知事青木參事官各郡長をも見受けたり、終りて懇親  
 會を開く、猶明日は見送り人一切を謝絶し黎明を待たせ、出發せむとす、他あし徳島市へ途中一泊のみにて  
 着せむには路程甚だ困難あるべきを以て輕裝二人山路に就くを便かりとすればあり、

四十三里の行程

高知より徳島市迄行程凡四十三里、就中高知縣池田迄二十三里間道尤も險巖尽く崎嶇の坂路あり三十日午前  
 黎明雨絲を亂す出發に先ち愛媛の御手洗氏午前三時旅宿の用意にとて先發したり、我行は前田君を始め高知  
 縣より茶業家平尾喜壽氏、製紙家長野源吉氏何れも見送りとして出發、手を合せて四名あり、坂路は吉野川の  
 源流谿谷の兩岸にありて山又山、水又水、奇峭峻壁到る處に兀立し、溪流白沫粉飛して花の如し、山愈深く  
 谷愈幽にして滿目秋漸く老たるを見る、大崖小崖の兩難所に至るの頃日は日に暮れて燭無きを如何ん前途  
 猶五里程道遠きの嘆を發せざんばあらせ、前田君と予の車夫とは共に伴野町より隨ひ來り徳島迄行かん勇



みたるもの何れも健脚あり、就中君の車夫尤も健にして剛、逸足去りて片影さし、平尾氏中途別を告げ長野氏と予は遅れて猶峻巖絶谷の間に在り、拂曉前用ゐたる殘燭僅かに存するを發見して一時の用を爲せしも直に消へて再び得べからざり、星光甚羅、山の端に散点して水聲滔々物凄くも亦憐れあり、若し一步誤ち一車輪軌を脱せんか深淵前にあり、怪巖後に時つ、奇險實に名狀すべからざり、此四十餘里間二人曳一臺八圓宛、始めは不廉の感ありしも此に至りて却つて廉あるを知れり、一茶店に辿り附き前車何時頃ありしかと問ふ、曰く今將さに一里程の先にあらん此人の傳言にいふ、阿波より出迎人あり池田に至りて投宿すべし速に後を追ふて來れど、始めは川口泊りの約ありしに之より更に遙けき池田と聞き車夫の元氣頓に衰ふ、蓋し彼等は非常に疲れて亦動くの勇あければあり、池田に着し前田君に會したるは恰も夜の十一時頃あり、而して有志席上に滿ち今時々として談話中ありき、翌三十一日午前六時池田發騰町にて午饗を喫す、此日の二十里は道路平坦出迎人と共に疾驅徳島市に入る高知より來りし車夫多くは此二日間に斃れたり、彼等一日草鞋を更へると八九回に上る亦以て路の險と人の勞とを察すべきあり、而かも都人士此般の消息を知るもの甚稀あるは此一行の嘆息に堪へざる所あり、富田裏町越後亭に投せり、

歡迎者中舊友あぞ

今回の前田君歡迎に付ては徳島の實業者盡く加る中にも徳島求友會の一團の青年は特に熱心の人々あり、中に高屋武二君あり、君は昨年奥羽地方に同行せし一人とす、昨夏何を今日の再會を期せんや、相逢ふて語さきもの久し、

闘犬

土佐に闘犬の事あり、近時違警罪中に加ふも猶其俗を絶つ能はざり、犬と犬を闘はしむ、宛然洋の闘牛に似たりといふ、人の喧嘩で足らで犬にまで及ぶ、殺伐の風知るべきあり、其俗阿州と全く相反せり、

滴翠閣乃談話

十一月一日徳島縣農會に臨み暫時傍聴午後一時より滴翠閣に於て談話會あり、閣は蜂須賀從二位侯爵の舊邸にして今公會堂に充つ、庭園規模宏壯綠翠蔚として翠るが如し蓋し其名の由つて起る所以か、村上縣知事木間瀬書記官を始め縣下の實業家來聴するもの一千餘名、前田君は夙に同縣下の有志が實業に冷淡あるを概し特に細密詳明の談話を爲さんとて前後三次に分ち講話されたり、午後四時閉會、

越後亭乃懇親會

我一行の旅館ある越後亭の別樓に於て縣下十八團體の篤志家凡一百名相會し懇親會を開きたるは此日午後七時ありき、前田君亦一場の談話を爲し衆一齊に萬歳を三呼す、此地にて有名ある阿波縮あり然れども近時衰へて僅かに一年三十萬圓の收入に過ぎざり、五二會支部設立の急を認め阿波縮業者と紙業者は大會を開きて其組織を爲さんことを約せり、又縣下の一大特有物産たる藍業者は大日本農會に向かつて何れも賛同の意を表したり、

撫養に向ふ

二日午前六時前田君徳島農事試験場を一覽し同八時一行撫養に向ふ古川渡船場迄木間瀬君外求友會員有志者見送るもの多し、前田君は之れより單行三木貴族員の宅を訪ふを以て予は他の人々と共に撫養に先着し濱野旅館に待合し、午後一時同港出帆の小蒸氣に搭せり、

徳島乃實業

徳島の實業家他縣に比すれば冷淡の看ありといふに付縣下の人々は自ら曰へらく、之れ其原因富裕あるが爲めありと、成程同縣下を通過して行く／＼村落の模様を察するに家屋の構造稍立派あり、隨つて何等の計畫を爲さざるも糊口上に差支さきが如く然り、而かも藍、縮、紙等の物産前年に比して劣るあるも優るあるを見



き、斯くの如くにして悠々樂天地の思あるもの單り同縣下のみにあらずといふべし。

蟬鳴くや旅語りあふ松一木  
舟はもう港に近しほこさきす  
峯越せば禪寺もあり夏木立

楓山  
楓湖

### ○淡路島

鳴門を横截す

有名なる阿波の鳴門、之を三里以外の船中より遠望したるも未だ其海面を渦ざりて親しく之を實見するの機会を得ざりき、然るに廿七年十一月二日徳島縣下撫養港より出帆に際し、船長は曰く、此船淡路福良に於ける歡迎者の有にかゝる、左れば福良に直航せしめて三里程を迂回し以て鳴門の實況を前田君一行の觀覽に供せしめんと欲すと、一行曰くは危険の嫌なきにはあらざやと、而かも船長は平然として何等の虞おしど爲し直前進行して鳴門の近傍に至らしむ、時に午後二時今や干潮に迫らんとし、急潮舷端を打つ、船は益々黒烟を吐ひて前み、怒濤は益々船窓に入り來る、蓋し此時船は方に鳴門の中心點近くに在り、渦まく波紋は雪花紛飛の状を爲し船体は痛く左右に激動を始め旗揚翻回して傾斜轉覆の危険さかを疑はしむ、潮流の中央淺瀬の如き暗礁あり流を左右に分ち一を大鳴門とし一を小鳴門とす、怯者は息を潜め勇者は快と叫ぶ、船長一號令を懸く、船は眞一文字に此二大難關を横斷して進む、驚濤愈々激し我船は一轉回せり、轉回のみ

、更に一鼓して直前止まらせ、一瞬間に鳴門の險難を蹴破し去りたり、顧みて白波縮紋の渦状を見る、一和船あり白帆を揚げて上流より干潮に乗じて直下し來るものあり、我一行は遠く之を望みて危険々々と呼ぶ、彼れば俄かに帆を下せり、楫も楫も用を爲さずして濤波の爲すがまゝに爲さん外なきに至るを認めぬ、彼れは今や其船と一身とを天に任せて下る間に、木の葉の如き小舟は旋轉數回アツヤ其船は龍宮界に葬られんかと手に汗握り救ふの道なき想を爲さしめたり、然るに幸にして潮流の尤も可ある所を擇みて下るを得たるは餘所ながら安堵の念に堪へざりき、日本各大河激流多しと雖も此潮流を直下又は横截するより險且つ難あるはなし、而かも之を直前横斷する事の豪壯快調あるに如くものあり、漁舟あり潮流の穩かある邊三々五々散在して専ら漁獵に従事す、暫く船を止めて此壯觀を賞したる後再び大小鳴門の流れに添ふて下り遂に福良港に入る、港内一二絶勝の島嶼あり然れども島地盡く赭山を以て充せること惜むべきのみ、港頭官民有志歡迎し前田君を導ひて板東半次郎氏宅に至る、同邸の前庭は數十町の鹽田前山の麓を隈れり、主人は曰く是れ祖先が元祿年間に築きたるものありと、名鹽多く此地方に出づといふ、

福良と有志

福良の代議士郡長、實業家等凡そ二拾餘名二日着港の夕前田君一行を一樓に招きて晚餐の饗を爲せり、席上前田君の談話あり君去りて後予は有志の求めに依り各團體の實況と今回巡回の模様を説きたり、通ふ千島の一孤島、實業談話に耳を傾くるの士多し亦喜ぶべし、

市町村と洲本の談話會

翌くれば十一月三日、天氣麗かに小春日和何となく輕暖を覺へぬ、天長節を淡路島に於て過すこと珍らしどや云はん、市町村談話會に先ち前田君は賀集製陶所を一覽し十時法藏寺に談話を爲さんとす、時に一同前田君の萬歳を唱へんといふや、君は暫く、と衆を制し謹嚴の辭を以て曰く、本日は日本國民として尤も祝



賀すべき吉辰あり、諸君速に起立して 天皇陛下の萬歳を唱へ更に海陸軍の萬歳を唱へん其他には及ぼすべからせと萬歳唱和の後談話を始む、聴衆四百餘名、了りて直に洲本町に向ふ、洲本よりは奥野前代議洲本商工會長として出迎ひ別に五二會員は七色の旗を翻して歓迎するに會ふ、三原名東二郡長其他の有志十名之れに隨ふ、洲本にては三熊館に於て談話あり聴衆一千餘名、了りて田村製陶所を一覽し一同車を驅りて志筑町に向へり、此間凡そ三里、路は多く海濱の斷崖にあり、遙かに和歌山地方を白波森茫の間に認む、偶々細雨斜風と來り旅情何となく物の憐れを感せしむるも道理をされ、日は既に暮れて一行は漁舟の歸帆と共に志筑に車を急げばあり、志筑の町外づれ敷丁の處西田茂八郎氏外有志數十名歓迎の大旗を建て、道に迎へり、西田氏は勸業會幹事長にして前田君旅館の主人、氏尤も實業に熱中し從來公共の爲めに盡したると多し、島内屈指の人ありといふ、着後予は多木兼次郎氏、御手洗道行氏等と一旅亭に投じたり、多木氏は世に有名なる播州別府の多木製肥所長にして實業の篤信家、前田君の爲め特に撫養港まで來りし人あり

志筑の談話會

四日午前十時より志筑共同館にて談話會を開く聴衆五百名、聴衆中禮を失するものあり前田君頗る激昂痛く風俗の紊亂と禮節の亂れたるを嘆し暗に彼を諷刺して餘蘊をなし、彼無禮無慚性として亦顔色をさきに至る、之れ一人を戒めて千萬人の風儀作法を矯正するの道といふべし、午後一時汽船の出帆を俟ちて神戸に歸航せんことをせり、

淡路島ある筑志港より神戸港まで海路十七八里汽船に搭せば凡三時間にて航すべしといふ、然るに近來堅牢の汽船は概ね御用船とあり、三日午後航海すべき若柄船は機關に損傷ありて俄かに定期航海を休むとの急報に接す左らばとて神戸には已に約束ありて必ら此間日中に着すべしと告げられれば止むべく押切船を備ふて乗り出せり、海上幸に浪穏かされとも遅々として牛歩の看ある和船は容易に航路を抄取らせ、四顧已に冥色を呈して船は猶淡路島の東端を距らせ、此日同船者は前田君始め多木、賀集、御手洗、田中外二三氏にて何れも送迎者あるが一同は始めこそぞかしく思ひたれ今は是迄ありと諦め晚餐を喫すべしと船頭に命し急に米を炊かせ、菜には鹽鱒數尾あり、之れ船頭の自用にとて藏し置けるを焼かしめたり、甘しうと僅かに空腹を醫したる頃ひ、思ひ出せるは前田君廣島出發の節大久保侯爵より贈られたるメリケン製牛肉罐詰あるのみあらせ、多木氏が携へ來れる播州葡萄酒より採取せし生葡萄酒のあるあり、薄闇を眩燈は三十六光燭の電燈の如く、菓子箱の蓋にて銀製の楊枝は象箸にも似たり、損じたる茶碗は玉杯と變し、舷端を撃つ機聲は洋々奏樂の想あらしむ、船中此般の夜會實に無上の興味を感せせんばあらせ、況んや滄溟一碧、萬物尽く凄絶の看を呈し、一種ふんからざる天眞を認むるおや、不自由は却つて自由に勝り、苦中却つて眞個娛樂を生ぜ、若し汽船疾走直に神戸に至りたらんか、到底此苦と此樂とを併せ領する能はざりしあらん、十時間漂蕩の後漸く舞子濱近傍の海邊に到着す、時に午後十一時に垂んたり、先づ一人を派して舞子停車場に至らしめ止宿を待合所ある旅店に請ふ、旅店赤十字社員群集して一空際きしといふ、則ち十二時半の汽車に搭し神戸西村旅店に着したるは正さに午前二時ありき、

此四國行事業の難素より豫期する所、况んや道路の難おや、而かも事業は意外に進み、破竹の勢を以て雷轟の威に乗せるが如く着々として豫想外の好成績あり實業の奮興斯くの如くあるもの機運の然らしむる所といへども前田君の絶叫は實に其機運を速からしめたるものといふべし、

時 島 啼 く や 小 す こ き 須 磨 明 石  
草 鞋 は と 手 元 は 暗 し 時 島

攝 山  
管 哉



# ○入峽の記

明治二十八年一月二十五日午後二時新橋發流車にて山梨縣下巡回の途に就く、山梨は前田君が去明治二十一年の交、知縣たりしとあり、居ると七月、二十二年一たび去つて又入縣のことあり、縣民の君を敬仰すること尋常にあらざるに際し偶此に出遊を約せらるゝや全地方有志の歡喜一方から五二會よりは志村登氏を總代として二十四日君を東京に迎へしめ導ひて御殿場に至る、路大磯を過く大久保勇熊氏一行に加はり又東京よりは大日本商工會員宮崎光太郎氏隨ひ予は前日より準備の爲め谷村に赴けり一行御殿場に着するや南都留郡長八代駒雄氏此に歡迎し同夜は須走驛に一泊、翌廿六日早天同所出發途中谷村警察署長酒匂清治氏靜岡縣に出張の途次吉田警察署長鈴木宗氣氏共に二三の獵夫と之に會し一行をして銃獵を行はしむ、蓋し君の身體近來益衰弱の状あるを以て僅かに此一日の行程を利用して以て君の身志を養はしめんが爲めありき、此日天氣晴期一點の續塵さし芙蓉峰を首めとして甲武相の諸山連亘相揖し笑ふて舊識を迎ふるに似たり富士の裾野を越涉し行くと銃獵を行ひ時に又茅屋に憩ふ、茅屋の人其何人の一行たるやを知らざると雖も亦是れ會つて舊因縁あるの民たるを思へば其泰平の逸民たるが如き彼の風平を見て座るに感に堪へざらしむるものあり、獲物若干同夜は福地村川方に投宿さる而して大久保氏は重に銃獵の爲め來峽の途ゆへ二十七日酒匂氏と共に御殿場口へ向け歸去せらる斯くて前田君は谷村へ向け腕車を驅り途中瑞穂村小野將玄氏の機業場、西桂村小沼組のホール會社甲斐絹仕上場へ立寄南北兩郡役所員五二會員八田達也氏其他の有志數十名に歡迎され谷村の旅館鈴木亭に着ありしは午前十一時三十分ありし、猶一行の十日市場へ着されし頃より頻に煙火を打掲げ谷村は勿論沿道各村は老弱男女見物人頗る多く中々に賑ひたり、

午後一時半前田正名君は五二會發會式場ある谷村長安寺に至らるゝや一千三百餘名の會員并に聴衆は一齊に

前田君萬歳を三呼したり斯くて愈式の始りたるは二時に近く第一號鐘にて一同着席、第二號鐘を以て本部長相川傳一郎氏發會の趣旨を朗讀し次に橋本書記は同會規定書を報告し次に田沼知事代理八田達也氏、八代南都留郡長、岸北都留郡長の祝詞朗讀あり終つて前田君は圖解并に甲斐絹の見本に就き反覆叮嚀凡二時間に亘る實業談話あり聴衆感動せざるを右談話終るや會員總代として横田吉藏氏答辭を朗讀し最後に 天皇陛下萬歳、五二會萬歳を唱和し第三號鐘と共に式場を散したるは午後四時三十分頃あり

式終るや直に同地西涼寺に於ける前田君慰勞宴會に移る、前田君此地に着するや余の萬歳を唱へ又は慰勞宴といふが如きは自ら懽焉たらせ宜しく予の萬歳を唱ふるを止むると同時に慰勞宴といふを五二會祝宴とでも變更すべしといはる然るに同地方の人は是れ前田君が多年南船北馬の勞を慰するの微意に過ぎざる慰勞の意を享けられたしといふ、蓋し志皆誠に出づ遂に悉く地方の人の爲すに任せり此宴列席無慮一千有餘名、堂内溢れて人を容るゝ能はせ俄かに同寺別座に配膳して猶狹さを感ぜるに至る、谷村々長川口善之助氏開會の趣旨を述べ、前田君亦一場の談話あり、四五の席上演説は何れも君を慕ふて感に禁へざるの情を呈せざるをかし此日偶雨ふる五二會に取りて洵に異數とす想ふに君を迎へたるの人今又君と袂を分たんとす生別豈死別に優るの悲あるが爲めあらざらんや峽の山河爲めに皆喜と悲とを以て涙痕を印せるに似たり、翌二十八日拂曉甲府に向ふ、八代南都留郡長、岸北都留郡長、八田達也氏等隨ふ、笹子峠の麓に近き中村氏の新式甲斐絹職工場に立寄り前田君は工男工女と役員を集め五二會の本旨を卑近の例を以て談話せられたり、笹子峠にかゝるや馬車三輛を備ふ、山路雪深く凍氷馬蹄を驅るに便からせ然れども満山玉屑を以て掩はれ六花時に續紛として征衣に點綴す、此玲瓏の奇景と此蕭寂の寒光とは雪を履んで行旅を事とするものにあらずれば目観する能ざる所、頂上草鞋を着け寒風に向ふて佇立するの人あり蓋し之れ甲府の歡迎者あり、之より駒飼、勝沼、日川、石和、甲運等凡べて五ヶ所の歡迎事務所には遠近の老若來り迎へ百餘輛の車を並べて甲府に達す途中或は白髮



の老翁あり又或は樸實の僮夫あり疾走快駛する前田君の車輛に追ひすがりて刺を捧けたるも多し此人々は何れも舊知事の入峽と聞き數里の外より途中に出て迎へたるものと知らる其情真に父子の再會に依りて歡喜の想ひを著するに似たり夕景甲府松亭に投ず、訪問者引きも切らず、前田君亦新知舊識に對して其熱情を容れ懇談宵を徹し温然春の如き趣あり、

翌二十九日大日本農會山梨支會臨時大會は縣會議事堂に於て開かれたり出席會員と傍聴者とを合せて大約三千名に近し猶續々來聴者あるも入場を得ずして歸り去れるもの其數百名といふを知らず來賓席には中田判事、井原書記官、田中收稅長、新井警部長、國分檢事正等事務員席には友成役員及各部長參事會員一同着席したり雖て午前第一號鐘にて支會幹事長八田達也氏會長田沼知事不在の故を以て代りて開會の祝辭を朗讀し了つて會員總代穴水朝次郎氏大日本商工會員宮崎光太郎氏の祝詞朗讀あり之より八田氏議長席に着き支會規則中改正追加及協議案の審議を爲し滿場異議なく原案に決す次て八田議長曰く豫て定め置たる執行順序に依り 天皇陛下萬歳を唱ふへき筈されども畏れ多くも本日は故有栖川宮殿下御送葬の當日されば之を省略し本會より農會々頭彰仁親王殿下に向ひ吊詞を奉呈することにせんと是れ亦異議なく可決し直に書記をして吊詞を朗讀せしめたり此間滿場総起立右終るや午登の爲め休憩を報せ時に午前十一時三十分、午後一時を報せる時前田君は滿場雷の如き拍手の聲に歡迎せられて二十幅の圖解を以て前後一時間半に渡れる長演説あり、言々肺腑より句々赤誠に發す、聴衆の感動せることは滿場の人々肅然容を改め謹聴したるにて知られたり君説き起して曰く去二十二年本縣を去りし以來爰に數年を閱す本日御一同此の席にお目に懸るは喜ひに堪るません正名本縣在職中は一の成す所なく今尙は慙愧に堪るる次第あるか知事閣下及び諸君の盡力に依り農會支會の成立を見るは宛かも正名自ら經營せしもの、如く嬉しく思ひます云々簡單なる此の一語は非常に滿場の感情を惹きたるは滿場の人々をして肅然色を動かさしめたるにて知られたり氏は此れより廿三年官を罷め

て全國周遊を爲せしこと及び在職中又た其後實業調査上大部の書籍を編成したることを説き自己の實驗及び調査の書籍に依りて帝國の今日は實に容易ならざる秋あることを諸君に告げ其の警醒を促かす譯ありと辨し全縣の人口反別收穫負債所得等の割合より全國一般の比較に及び國縣郡町村是の確定せざるへからざることを今日の農工商業は封建時代に比して著しき進歩を見ず寧ろ退歩せしものあること農工商業の事に就ては黨派主義の異同を問はず全國同心一體とありて城壁を築き外敵に對せざる可らざることを猶ほ征清軍隊の如くあるへしと論じて一休し再び演壇に現れて少しく論述する所ありし後八田氏をして君の總理せる全國各團體より第八議會及び政府に向て提案若くは建議したる案件十數項を朗讀せしめ猶ほ引續き演説せんとせられしも此時少しく苦痛を感じたる様子にて中止せられたるは尤も遺憾とせし處あるも大體の本旨に至りては熱情を以て披瀝し去り亦餘蘊なかりし、

大會散會後午後五時より甲府公園望仙閣に催ふしたる實業家大懇親會の景況を記さんに會する者縣廳高等官外凡そ二百三十名同閣の樓下は殆んど人を以て填充せり五時過ぎ當日の正賓たる前田正名君は事務員の案内に依り設けの席に就けり滿場拍手して之れを迎ふ引續いで會員總代新津隼人氏演壇に進みて歡迎の辭を朗讀し前田君進みて答辭を述べ内藤文次郎氏全國各地より達したる祝電を披露し山梨支會員總代小野元兵衛氏は同日午前の支會臨時大會に於て朗讀すべきを暇を得ずして朗讀せざりし前田君に對する謝辭を朗讀し次に八田達也氏前田君等が貴衆兩院に提出したる實業振興に關する諸種の法案及建議案の顛末を演説し併せて前田君の病餘所感を代讀し予は前田君の實業上に於ける獻身的運動より其實業のため日夜寢食に安んぜしめて東奔西走せらるゝは決して些の野心あるに非ざ全く國家の爲めある所以を纏々演説し外に青柳直道、藤波某兩氏の演説ありて冷酒折詰の質素ある宴に移れり此日某氏は起つて前田君の實業上に於ける功績を頌贊し前田君は實に實業の大將なり云々と演説するや初より跪坐首を傾けて肅聴し居たる前田君は右の演説了るや突起



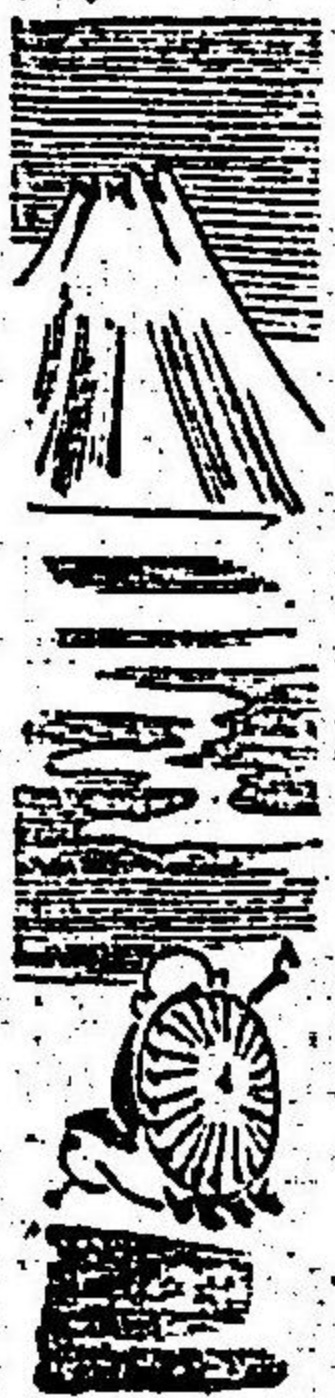
して諸君の不肯正名を實業の大將たるかの如く言はるゝは正名の光譽とする所あれど正名は決して實業の大將に非ざ諸君は只た實業と云ふ大將の旗下に立ちて國家の爲め奔走盡力せらるべきのみと勵聲胸を打つて述べたる一語鋭く會員の鼓膜を打ちたるが如し此會終るや否や山梨日々新聞、山梨民報、甲府新聞の三社員及實業家其他の有志凡四十名予の爲め特に舞鶴樓上に懇親宴會を催ふされたり、

扱て又三十日午前二時頃富田、岸、秀島、小林の諸部長及び八田縣屬其他大木喬命、青柳直道等民間の有志に送られて甲府を發し午前四時半頃飯塚澤に着すれば本山警察署長は巡查數名と共に乗船場に待ち受け此にて一行は見送の諸氏に別れ舟下三里餘飯富村に至りしとき烈風沙塵を捲き奔濤白浪を揚げて舟の進退自由からざりし爲め前途を急ぐ旅行されども一時舟を河岸に寄せ民舎に休息せしも風勢は衰へざるを以て己むさく一泊に決し最寄の旅舎に入りし後風少しく減したるに依り再び出船したるは午前十時頃あり而して沿川の各村長は有志者と共に所々に待受けて挨拶したるもの多き中にも南部にては近藤喜則、木内信春の諸氏を始め有志者豫じめ酒肴を備へて懇ろに一行に贈るや其の情殊に渾きを覺へたり斯くて無事岩淵に着せしは午後三時ありし因て同五時發涼車にて京都に直行せり此行初め富嶽の邊に歡迎者に逢ひしより富士川の末流に至るまで多くの歡迎者は一として赤心赤誠あらざるはあく有志の面影は今猶ほ吾人の眼前に粲然たるを覺ゆ、

我宿は箱根の先に見ゆれども

引かぬるまは不二の道かな

正名



## ○九州茶業大會

第三回九州茶業大會は二十八年二月四日より五日迄福岡縣筑後國上妻郡福島町に於て開設せり前田正名君豫め同會へ臨席の約ありたるを以て京都迄來着ありしは其前三日あり而して二月二日愈發程の場合に際し前宵來宿病發加ふるに東京よりは議會提出問題に付緊急用務の爲め歸京を促す飛電櫛の齒を引が如し於是乎君亦謂へらく九州の大會之に臨まざる遺憾に堪へざるも役員既に其人あり大會の事必ら走や好結果を奏するに疑ひあしと即ち止むさく俄かに日本茶業會専任主事多田元吉氏及予を代理として派出せしむるに決したり、

四日午後一時予等の福島町に着するや各縣より委員二名宛其旅宿に集り問題草案會を開き諸氏一旦引取り別に協議を凝らす所あり、五日午後一時より問題を配付し一縣毎に協議會を開き同九時より上妻郡公立診察所に各縣協議會を開きたり、協議會を開くに當り神田清吾氏は幹事長松尾巳代治氏止むさく缺席の旨を報し氏に代りて收支豫算書を披露し且協議案を提出す此時多數の希望に依り川尻良知氏座長席に就き協議に移り本部決算報告書を書記をして朗讀せしむ夫より質問又は意見等を提出し互に胸襟を披きて意見を闘はしたり五日午後三時より福島町無量壽院に於て本會議を開く松尾巳代治氏缺席に付川尻良知氏を推して議長席に就かしむ之れ滿場の希望に依つてあり最初廿六年分の決算報告審査會を開き異議なく可認、直に廿八年收支豫算案并に第三回九州茶業會の議案を議す之れ亦異議なく瞬間大問題盡く可決せられ、

天皇陛下萬歲 九州茶業會萬歲、前田正名君萬歲を唱へ一旦散會したり、之より實業談話會を開く第一席予は前田君不參の理由并に茶業家に對する希望、第二席多田元吉氏は米國茶業注文の現況に例を引て九州茶業家に望む事、山田邦彦氏は協議會の實況を傍聴し議事進行の方法尤も徳義を先とし漫りに世の風潮に従ふさく審議討論せるは前田君多年の修養と實業家の美徳に依る之れ單に實業家のみならず普く教育其他の會合にも以て軌範たらしむべ



しどの事、中川耕一郎氏は全國實業大會に臨みたる時の實況、楠原正三氏は水と農業との關係を説き猶談話を爲すべき人多きも時間切迫の爲め之にて散會し直に席を同町竹本樓に移して有志懇親會を開けり列席百有餘名席上谷口留五郎、服部利明、江崎四郎其他數氏の演説あり全地方にては珍らしき盛況ありし、

### ○九州農事大會

第三回九州農會總會は二十八年二月六日より三日間佐賀市元町稱念寺に於て開會したり前田正名君には同會へも是非出席すべき筈ありしに九州茶業會へ出席する能はざると同じく是れ亦止む可く斷はられ多田元吉氏代理として又予は狀況視察を兼ね出席することにされり多田氏等は前五日福岡町の九州茶業會終るや翌六日午前十時會場へ到着せり到れば會員は已に場に充つ、其數凡一千餘名、

午前十一時開會一同着席するや全會理事長農事試験場熊本支部長大塚由成氏登壇し開會の辭を述べ併せて九州農會組織の來歴農事改良の必要ある旨を幾んど半時間演説し次で佐賀縣知事田邊輝實氏挨拶の後予は前田正名君が本會に出席する能はざるは尤も遺憾とせらるゝ所されども九州茶業會の如き君が出席する能はざるより一層奮て君の本意に添はんとて立派の決議を爲せり本會亦此精神に依りて目的を貫徹ありたしこの旨を續述し次で多田元吉氏は前田君に代り祝詞を朗讀し了て柳主一氏佐賀縣農會員總代として挨拶を述べ休會す時に午後零時四十分、午後二時三十分再び開會全縣農事巡廻教師中村彦氏昨年十二月東京に於ける全國農事大會に於て決議せし條項に付報告し尙各地よりの祝電を披露して協議會に移り大塚幹事長會長席に就く協議案を議了し直に第二日目の問題に付協議を経て六七八項とも議了す、次て更に第三日程の一項談話會に移り

大分縣白井忠助、福岡縣早川敬二郎、同縣尾形庄助、熊本縣高橋義信、長崎縣吉田榮次郎其他諸氏の談話あり、其辨説に至りては素より巧拙なきにあらざるも其實業に熱心あるに至りては疑々として皆聞くへし散會せしは午後五時あり、此夜新馬場楊柳亭に有志懇親會を開き七日再び談話會を催ふし翌八日無事閉會せり、

### ○紀州行

二十八年五月十四日午前七時京都發前田正名君に隨ふて紀州に抵らんとす、同行は岡山の花蔭貿易商小山善太郎氏とす大阪着後前田君は自由亭に於ける日本鐵業會に臨み予と小山君は直に堺に赴きて待合せり、午前十一時半同地より腕車を僦ふて疾驅せしむ、堺と和歌山と此間里程十六里あり、岸和田の南一里半たて茶屋といへる小茶店にて午餐を喫し、行くと凡一里、偶々一腕車あり竊地驅け來つて我一行に先んせんとす、三車之を先んせしむるを許さず、彼れ間に乘じ再び追ひ抜かんとせり、予が乗れる所の車夫は大に怒り彼れが僅かに先んせざるに追つ附き車軸と車軸を相衝突せしめ、アハヤ一刹那彼の車は殆んど顛覆し予が車輪は其一部に損傷したる、彼の車夫憤懣我車夫に取つてかゝり、應といふや否や我車夫は驚懼みに取つて拗げんを勢あり、同行二車夫も彼れ一人を眼かけて拳骨ボカリく雨の如く降る、予等可笑しくもあり氣の毒にもあり、其喧嘩を制するや彼車夫は何か御用商人を載せ居たりと見へ、頻りに御用風を吹かして先んせ何の不可あらんと力み、何んとか様を載せて居ると威張る、前田君聞くに堪へざるありけん、陸軍でも海軍でも構ふものか車夫同士の喧嘩に乗客の誰たるを言ふかと大喝し、急げ〜といふ、憐れや多勢に無勢、お負けは無斷追放くは車夫社會の不文憲法を冒せるもの、亦一言の辭なく我一行は再び疾行し彼



れば負け角力に塵打拂ひ居たるも一興ありし、此立廻り凡五分間、回向院の角力見るよりも面白く車上の睡氣頓に醒め午後六時吉野河畔に達すれば、歡迎者數十名あり、之れに伴はれて和歌山市に入り富士屋に投ず、着後浴を勤め晚餐を供せんといへど約束の談話時間迫れる爲め、直に岡東館の談話會に臨む、同夜は市郡メシテル業者中鮮々の人々のみありき、沖知事其他高等官も臨席せり、談話了りて懇親會を開きぬ、翌十五日は綿テル業者大會を開き同地の森懋氏開會の辭に次で前田君其他の演説あり、過日京都大會委員會の決議を實行せんとに一同賛成したれば今後は五二會中先づ敷物、紙、綿テルの三者相聯合し神戸港に直輸品取扱所設置の件を計畫し以て五二會の眞目的貫徹の着手に決したり、談話終るや午前十一時同港拔錨の紀伊川丸に搭じ順風に帆を揚げ午後四時大阪川口に着し即時梅田に出で歸京せり、折から同車伊東軍令部長あり一時間半談話を絶たせ二傑相逢ふの状彼れは雄風堂々、之れは意氣軒昂、而かも伊東氏戰勝の奇功に矜らせ只天祐のみといひにき、



### ○客窓隨筆

二十八年八月九日京都を發して江州に入る、先づ水災後の實況を視んとてあり、米原に至りて井筒屋に休息せしに此邊凡べて浸水の爲め脛を没し渡舟にて旅客を送迎す、家屋の入口「おたま御用心」の貼札は以て浸水の量高さを推知するに足らん、寺原書記官の一行も之より北すべき模様ありしが予は一休後直に車に依りて

長濱に向へり、長澤村、田村其他處々の道路は水浸りて車行便悪し、然れども湖岸を除くの外概ね稻田の鬱蒼たるを見て此地方の如きは心聊か安んぜべきものあるを想ふ、長濱より以北慘の尤も甚しきは殆んど筆に上すべくもあらざ、予は舟により湖に沿ふて姊川尻に達す、只見る一面の碧海淼茫水天の間に似たり、何れか之れ桑園、何れか是れ稻田、眼に蒼葉の映せるものさく聞くものは耳に澎湃たる姊川の奔流激湍のみ、古人の所謂查田變じて海とあるもの、蓋し此地方の如きを謂ふ乎、大字南濱に着し郷閭の安否を問ひ、又知友の消息如何を尋ぬ、顔色悄然たるもの形容枯稿せるもの共に皆是れ連日の霖雨洪水に奔命して焦心憊腦したる結果にあらざるはあし、遇ふ人毎に當時の慘況を語り出でざるはさく中にも急水防事に大功を奏したりとて力自慢に鼻うごめかす壯年も多かり、但し此地方は全郡中先づ災の少なき個所の上にて堤防の決潰、田畑の浸水といふども之を上流各地の災害に比すべくにもあらざといへり、殊に全村は夏蠶の收穫全く終りし後ありければ此一事にても稍自から慰すべきものありといふ、

偶有志あり予に湖北一帯の災害を視察し普く江湖に訴へたしと計り來るものあり、情義固より辭すべからざるも、予は十日より名古屋物産品評會に約する所あり、乃ち之を在阪某々諸氏に囑して翌十日名古屋に向へり、軍窓行へば岐阜、愛知の被害を見るに、水は已に去りたるも稻田盡く灰色に變じ悲惨亦江州に譲らざる地方多し、親しく父老に逢ふて之を見舞はんには如何に慘害の甚しきを聞くを得ん乎、

十一日午後二時名古屋に着す、前田君亦一時間を後れて東京より來る地方實業家の出迎ふもの盛に、君は近直に予は山田屋に投せり、今回名古屋の品評會特に五二會の三字を冠するは五二會の基礎を鞏固にせんとの趣意にあればあり、出品物は愛知の物産陶器、七寶、銅器、團扇扇子類、織物、漆器、雜貨等其數殆んど五千点の上に出づ、博覽會と共に進會を折衷し出品物は場内にて賣捌き、又審査を経て褒賞を與ふ、而して賣高の幾分を五二會の基本金



とし或は海外派員費に充てん計畫あり、目的斯くの如くあるに賣れ高盛んれば人氣頗る善く、出品を乞ふもの引きも切らぬ有様あり、縣廳郡役所市役所及び地方豪商盡く斡旋の勞に當り博物館内の陳列場日々雜沓を極めつゝあり、從來愛知の實業は割合に不振の狀ありしも今後は形勢一變せんぞとす、十一日夜有志近直方に集り會食して實業振起策を講し翌日午後七時再び相會せん、前田君は十二日午前四時一の宮に向け出發せしも予は止りて品評會を見る、

此前一日より本日にかけ品評會の爲め當地に着せしは中安信三郎、伊東陶山(以上京都)松尾儀助、井上宜文、井上治兵衛、福島宜三(以上東京)圓中孫平(金澤)下城彌一郎(桐生)勝野文三(岐阜)星田茂幹、長倉半兵衛(以上静岡)の諸氏にして多くは視察又は審査の爲め來遊せしあり、

叔又前田君前日瀬戸に至り本日は半田に行けり、毎日各地に於て二回乃至六七回演説を爲す、當日も午後八時半より歸着するや有志は氏と各地の來賓とを併せ洲崎橋畔金城館に懇親會を開けり、席上前田君外二三氏の演説ありて後同地歌妓の凱施手踊あり、

十六日朝來炎威熾くが如く宛ちがら釜中に座するの思ひあり、午后品評會を見て寓に歸る時に前田君より今夜十二時京都を發し明日四時半名古屋に着すべしとの電報あり、或人曰く同君の家國に勉め筆處さきは宛然維新の際薩長土肥の奔走に似たり、當時口善惡さき京堂は「へらく」「いやでせらぬは鍋島薩摩夜中泊りの七ッ立」と宿屋では定めて困つて居るだらうと、惡諷に似て其實は君が勉強の一斑を知れるものか、

同宿に圓中孫平、松尾儀助等あり圓中氏は七十有五、松尾氏は六十幾年、共に血氣壯者に優り鑿鑿事に従ふ、朝より夕に至る快談縱横止む時なし、此日廣瀬滿正氏着せり、東京よりの歸途立寄れるあり、貿易銀行認可書を携へり、不日株主總會を開くといへり、

十七日は兼て期し居たる五二會品評會褒賞授與式の當日にて午前五時前田君京都より着し同八時より式を博

物館樂堂に舉行す、知事は東上中にて書記官來り、市長會し紳士集る、其數無慮數百奏樂の聲洋々たる間に演説あり祝辭あり、何れも特種する此品評會に向かつて幾多歡喜の情を寄せざるはなし、一万餘點の物品中賞與三百を超へせ、受賞者の名譽知るべし、午前十一時式終る、炎蒸昨日と譲らせ、

午后二時より來賓一同を香雪軒に招きて饗應あり、軒は金城館と並び稱せらるゝ同市割烹店の巨擘といふも其風韻殊に卓絶せるを覺ゆ、則ち其茶室に入れば四圍綠樹鬱蒼として青苔巖に蒸し、其高樓に登れば一面快瀾する曠野を眺望すべし、亭々たる松樹、蜿蜒たる稚松、或は配するに奇石を以てし或は交ゆるにつた蔓を以てす、幽邃の趣、遠望の觀、集めて共に此一亭にあり、聞く往時は此邊一帶總べて梅樹を以て充たせるも今や僅かに其香を留むるに過ぎせと、香雪軒の名由つて來る所あるに似たり、

午後五時宴散し舊との金城館に浴を取り八時諸氏の東歸を送れり、停車場内臺灣行の軍人を以て充滿し、佩劍相觸れ鏘然亦瀟然たり、

十七日夜獨り止りて予は名古屋にあり、品評會終りを告げたるを以て有志の來り訪ふもの多し、予は岡谷惣助祖父江重兵衛二氏に問ふて曰く今回の舉諸君晝夜の勞は暫く措き費用の如きも莫大ざるべしと、兩氏答へて曰く費用の如き何ぞ始めより豫算あらん、若し不足を生せば兩人に於て負担せば則ち足る、想ふに此種の舉費用素より大からせとせせ、然れども之を夫の好事家が故紙一葉に數百圓又は一千圓を抛つ者さへあり、此一舉延ひて一般産業を奨励せしむる結果に比すれば價は安くして利益の大なる殆んど量り知るべからせと、蓋し兩氏は名古屋の素封家にして殊に殖産興業に銳意するの人、品評會の同地に起る偶然にあらせといふべし、十八日午前四時五十分名古屋を發して京都に向ふ、車窓愛岐の野を眺めれば水害地を除くの外綠青々として白露稻田に濃かあるを覺ゆ、江州に入り米原地方浸水の慘を見て更に能登川地方に進めば早熟の稻田已に金

風に戦ぎ秋方さに湖東に酣あるを知る湖西の早稻今年果して如何、米原驛に於て藤島了穂師と車中に邂逅す



師も亦京都に赴くといへり、午前十一時草津より關鐵により三雲に赴き午後大津に出で宮脇五松兄を訪ふて崎艇軒に涼を納る、一旦京都に歸り廿一日再び東行せんとするあり、

予の京都に居を卜したるは前年彌生の頃ありき、爾來茲に殆んど周歲半、其間實業大會といひ博覽會といひ概ね此地に足を駐むべき用件多かりし、而して京都は尤も愉快なる生活を爲すべき樂天地たるを覺へしめぬ、今年何等の崇りにや、惡疫頻りに流行し、京都は實に疫病の最流行地を以て目せらるゝに至る、東山の明月爲めに光輝をからんとし鴨河の水爲めに其流れを濁さんとす、憐れ此風流の地も轉瞬の間に沒風流とあり、今昔全く其趣を異にせんとは、今回偶々予の名古屋に淹留するや京都の士人來り會するもの談皆惡疫の事に及ばざるは亦、座ろに怖氣を生じ人の鞠むるに任せ、一時其居を移さんと欲し急行京都に着すれば花の祇園も頗る寂寥を感じ一力權の虎軍に襲はれたるを始め同八軒町の虎疫軒を連れ予の僑居の入り口柳清といへる料理店の主人も逝きぬ、三日見ぬ間に櫻すら善ければ僅々數日間知り合のもの已に多く長逝するを聞き、寸時の猶豫もあらで一旦家族を郷里に歸らしめんことゝ爲せり、

殊に本年は予の一身を擧げて全く東西奔走の爲めに委ねざるべからず、北越四縣の農事大會は九月一日より新潟に開かれ、奥羽六縣の實業大會は同月十日より山形市に開かる、次で山陰山陽の遊説、次で各地聯合大會、次で帝國議會對實業策と爲るべし、則二十一日家眷を拉さへ大津播磨屋に投せし時は宛ながら虎軍重圍の中より脱出したるの想ひあり、夜來風強く濤聲激して夢圓ひ難し、一番列車に搭じて家眷を米原より歸し予は獨り再び名古屋に着す、時に暴風砂塵を捲き須臾にして大雨蔭れり、江州の光景は如何、今夜八時の列車にて東行すべきことゝせり、

客の問をしきる旅籠の故道がな

玉梅

### ○奥羽紀行

二十八年八月二十二日午後七時過ぎ驟雨に洗ひ淨めたる名古屋驛より汽車に搭せれば、乗合は將校二名商業家と見ゆるもの三四名、軍人は緘黙し商業家は快談す、靜岡にて一名加る、彼れの果して何人あるかは問ふ迄も亦自ら臺灣渡航を志願せんとてわざ／＼上京する醫員ありといふ、何か頻りに苦悶の体たらくにて傍人に向ひ之を志願せんには東京の知己に保證を頼みたし、匆卒發車して只下谷區とのみ分り其住所番地を忘れたりきと、訴へつゝあり、予は眠ることもなくウト／＼として横はれる間に富士の裾野を過ぎり、國府津、大磯邊にて夜ははの／＼と明け渡れり、

時に白衣を纏へる紳士一名入り來る、彼れの白衣に富士山頂の印といふ淺間神社の押捺あるを見れば正しく是れ登岳歸京の人あらん、此人新橋迄異様する其衣裳のまゝ入りたるは登岳の名譽を他に誇らんとの下心あるらしく見へにき、

二十三日午前九時新橋に着し知己の迎へるを謝し一旅店に休憩し、浴を取る快言ふべからず、間も亦前田市子夫人の安否を訪ふ、夫人健在にして正名君今現に北陸巡回中あり予の各團體事務所に事務を執る、例に依つて例の如し、福島君將に出發せんとし、予亦日さらば其後を追躡せんとす、午後三時木挽町厚生館に投せ、

三十日午前六時四十分發にて上野山下より汽車に搭せ、福島まで百六十幾哩、只一人の旅行とて話相手もなければ今朝少し早起せし填合せに、寐て見つけ起きて見ゆ汽車の廣さかかと獨りで洒落ても面白からず、體がて那須野ヶ原の村雨に眼を醒し進み行くほどに早や二本松も過ぎ福島々々といふ驛夫の呼聲に驚かされぬ、時は已に午後四時半あり、



日鐵道線は本前年予が東北行に於て舊縁あれば格別目新しくも覺へせ、漢々たる兩毛の野も、重疊せる東奥の諸峯も、流れ潺湲たる幾多の溪水も、我には自ら相識の看あり、迎へては送り、送りては迎ふるが如し、福島より行くこと二里半、信夫郡飯坂の温泉あり、東京にて知友のいふがまゝに至り見れば地は阿武隈川の上流摺上川のはどりに在り、川の兩岸概ね旅舎と割烹店とを以て充たさる、予の想像せしに優れる小都會戸數も五六百はあるべし、平生さらば昨今浴客頗る雜沓すべきも、先づ頭暴瀉病一時流行の徴あり、爲めに浴客次第に減じ今は頗る寂寥の觀を呈せり、予の投宿せしは花水館といふ、桃花流水に取るあるか、館は斷崖千尺の上に築かれ遠山近水一眸の下に集る、殊に溪水結を産するを以て名あり、膳に上るもの其味尤も佳、大あるは七寸に八、る至

又温泉は階を曲折して下ること幾十尺、壁の中腹に浴室の設けあり、室を數個に分ち、熱湯、微温湯あり、室は小まれども湯質明淨宛ながら水晶を炊ぐに似たり、効能は何れも萬能あるべし掲げあれど能くは讀ませ、館外絲竹の音聞ゆるは、同地に青樓あるが爲めありと、半夜猶騒がしかりし、

東京にて知友の云へるには山形に行くは此處よりすべしと、然るに此地にて聞けば仙臺に直行せられれば宜しかりしにといへり即ち飯坂より山形迄は凡二十五里、而かも予は再び福島に歸りて汽車に依らんよりは拳ろ險を踏へて米澤に出で以て山形に達せんことに決意せり、

三十一日午前七時花水館を出で米澤に向ふ飯坂より山形迄至るには米澤は中間にて凡十二里ありといへり、二人曳三圓以下にては誰れも應ずるものあり、亦廉ありといふべからせ、然れども其多くは上り路にて羊腸たる險峻を攀づることあれば、實際は却つて廉あるが如し、山又山水又水越ゆること幾里、之れが三島さんの道路ありといふ、今や三島さん居らせして道路は亦顧るものあり、細雨霏々として泥濘塵を没す、車あれどもなきが如く、予は概ね荷を托するのみにて徒行したり、

飯路の中腹に達し渴甚し、則ち東京發程の際前田夫人より惠まれし葡萄酒を用ゐんとて車夫に托し置けるを取出さんとせしに、塞子を一旦抜きし爲め酒は車夫の衣に浸みて又一滴だにさし、車夫等大に驚き、

アアアアアいたましいことしたがり

と嘆息の聲を發せしゆへ彼れが襟袂を濡らされしをこぼし居るからんと思惟し種々辨解せしに彼等は却つて

ナアーニあまたさまの葡萄酒がさくさつたのが痛ましいと

いふ傍から馬方茶屋の娘は

アラーとうしたんだべー、襟袂が酒飲んだつたべー、アアアアア

とあさるゝこと半餉あり、其か娘一寸ほつちやりとして愛くるしき容貌は僻には珍らしき女郎花と思ひ居たるにだんべいは愚か穿てる紺の袴袴脱ぐよと見る間に向ふの畑に立小便、そして平氣の顔して馬子と何か言ひ争ひし末予に向ひ

お客さま其瓶己れに呉ンテーかヤ

といひギヤツと猿の如き聲して笑へるに興醒めて一言もさし、

飯坂より米澤間の飯路には隧道三あり二ツは短きも一は長さ八丁、福島と山形の境に屬す、隧道間濕氣甚しく巖石間より平点々として下る、之を過ぐるに入口の茶店より松火を購ふて入る、八丁間一の明き窓を爲炭酸満ちく得も云はれぬ不快の感あり、之を出れば下り坂とある、米澤迄五里といへど碌々たる砂礫にて車を行るに困難あり、午后六時米澤に着す、

米澤亥の子屋に着て後は此日の疲れに只眠るの外樂みとてさし、飯坂より來れる車公は明日山形迄お供したしといふに任せ之を約せり、彼れ當日飯路にて車の輪だちを損ひたりとて俄かに修繕に取からしめぬ、損害大枚三拾錢、彼れに取りては眞個に痛ましかるべし、



明くれば九月一日、旅舎を辭して後米澤の實業家網島哲、西村吉兵衛の諸氏を訪ひ又絹織物業組合事務所に至る、二氏の外丸山孝一郎、平田駒太郎、賣問信任、大瀧龍藏、山下千代雄、湯野川忠世、色摩慶次、吉田敬助等の諸氏外一百餘名發起とあり己に實業大會事務所を設け山形市の大會終らば此地に於ても五二會支部設置の會合を開かんとし準備中ありき、諸氏皆盛山公の遺風善政に浴したるもの、質朴真摯の風談話の間に見へて奥床しさを覺へしめぬ、

午前八時網島氏方を辭して山形市に向へり、町を離るゝこと數丁にしてポツ／＼雨降かゝり次第／＼に驟雨の模様とある、野邊より桔梗、女郎花など秋草を背負ひたる一群の少女鎌を手杖み我家路を指して歸りを急ぐれば、多くの牧草を牛馬に積み其上に跨りつゝ、疾呼する童子に逢ふ、雲は一面に蔽はれ、遠雷は自づから近きに鳴り轟く、赤湯町程近くある頃、急雨迅雷と共に激しく、車公の奔馳矢の如くあるも及ぶべからず、漸く赤湯のとある一旅店に憩ひて雨宿りしたり時に、雨益甚しく、雷愈烈し、中に一迅雷あり、轟然として耳を劈くばかり、定めし是れ近郊に落ちたらんか、

雷雨一過して山色拭ふが如し、之より山形迄八里間概ね晴れ直りて車行稍便あり、上村山に達すれば牽袴の男女茄子、瓜、桃、蠟豆などを爲して賣るを見る、殊に女子は男子の如く潤歩し簑を着、多くの買物をして其家郷に歸るを見たり、渠等の多くは石炭油のブリキ罐と醬油か酒かを入れたる備前徳利に髣髴たるものを携へざるは奇し、想ふに此日は舊曆七月十三日にて何れも盂蘭盆の準備とぞ知らる、而して各村路を通過するに屏風を張り回すあれば岐阜提灯擬へるものを吊るすあり、一般に豊年を祝するが如く又お寺参りと精進を迎ゆる支度に忙がはしきが如し、午後五時山形市に入り旅館町後藤屋に投せ、

予の東京に在るや山形自由黨本部は、奥羽六縣自由黨支部に對し實業大會へ出席すべきことを勧誘せしを聞く、入手に其何の故たるを問ふも予は其要領を得ず、只黨派と否とを問はば實業獎勵には天下一人の反對すべき

等なければ同黨も其舉に同意せしに外あらざるべく信せり、着後之を同地の實況に徴するに予の想像は誤らざりき、而かも山形自由新聞と山形日報とは論說に雖報に此事を喋々して一問題とはあしめぬ、蓋し山形自由新聞の社員にして同黨の幹事たる戸狩權之助氏今回大會の發起人とあり且つ黨員として之を同黨各支部に照會せしが爲め遂に他黨員の疑惑を生せしめたるに基けるが政黨者流の間常に權略の多く用ゐらるゝは世の通觀されば之を推して一の政略的收攬に假せしも強ち無理あらざ、一日山形日報社主佐竹正詮氏を訪ふ、氏は現に衆議員にして實業俱樂部に屬するの人、深く内情を叩けは誰とて不賛成のものはおかれと此地には自由派と非自由派とあり、非自由派は正義會と稱し自由派の率先爲す事には善惡ともに反對するの例ありといへり、何處も同じ感情論、社員に佐藤啓氏あり佐藤里治氏の男にて曾て同窓の友たり、地方の豪農にして勢力西村山郡を壓すと傳ふ、昨今にては黨派感情一掃せられたり、

左れば縣會議事堂内に設けられたる準備會には官吏あり、實業家あり、政黨員あり、千態萬狀異種異様の人々相集り首を鳩めて熱議を凝せり、然れども東北に於て實業大會を開くは今回山形を以て嚆矢とすを以て、始めは事容易に纏るべくも見へざりしに、金子孫左衛門、齋藤理右衛門、丸山孝一郎、櫻井忠藏、土村知太治外有力の諸氏非常の熱心にて事に當り今や各郡に遊説員を派し、一面には縣知事木下周一氏屬僚を督し六縣廳に通牒して勸誘に怠らざ、方さに雄大の勢を以て東北實業家の志氣を發表せんとするに至る、隣縣秋田魁子の絶叫は先つ予の意を得るもの中に左の如く云へり、

東北實業大會は正に七州の實業家を驅りて、大團結を形造らしむる好機會あり、見よ東北の地古來偉士さきにあらざ傑士さきにあらざ左れど其運動や共同的にあらざして個人的あり、協力主義にあらざして獨力主義あり、故に其功効の及ぶ所難にして且つ小、忽にして他に乘する所とあり了る、是れ識者の夙に憂ふる所にあらざや、想ひ見る七州の志士相携へて一堂に會し、天下の形勢を揣摩して東北實業の大計を談論



上下するの裡、這個一般の雨と靈氣凍として各自の琴線に觸るゝものあるを、

七州實業家の意氣を代表し得て痛快、

九月三日歸省中の佐藤啓氏郷里より八里の距離を違しとせせ馳せ来る、去二十一年以來の會合あり、舊を語り新を叙し綿々として談話の盡るを知らせ、遠藤如雲居士の消息如何といへり、居士に紙上に傳言します、佐藤さんより宜しくッて、

此日午後岩淵脩三氏着し予と旅舎を全ふす、氏は予の此にあるを知らざるも予は疾に氏の至るべきを豫知し居たり、氏着して洋服の上衣を脱ぐや脱がぬに、後より出し抜けに、岩淵君お早ふといふ、君驚いてオヤと言つた切り暫しは語らず、蓋し氏は日本實業中央本部より奥羽各地勸誘を囑託され、福島、宮城、岩手、青森、秋田を歴説し、各縣廳及有志に面會し來られしあり、各地方の摸様を聞くに、何れも相應に熱心されど、山形は悪疫流行地ありとて中には逡巡せる地方もありしとかや、

今宵は舊曆の十五夜、むら雲は少し出たれど、間もさく清輝團々として中空にかゝれり、月見る月は此月の月、奥羽の野を輝せる月も鷹の海原照る明月も月には變りさく、如雲居士も定めて賤岳のはどりに懷郷の情を賦せるあるべしと友は語り出ぬ、

當地盆踊り奇あり妙あり、謠は解せねど、妓輩が職人体にて空騒を爲し、太鼓と三味線耳を聳するばかりあるを見にき、明晩も此通りありといふ、會つて青森絃の姿で見たるジャンジャンカ踊りにも似て面白し、ヲセヤフセノ〜ヲハラが何とかといふ、

山形市昨年一千戸以上の大火あり、市街稍舊に復せるも、未だ全く整はせ、當時の慘猶追懷せしむるものあり、ユンラは一時流行の微ありしも昨今順に撲滅の狀を呈す、興行物は停止されるれど、實業大會は差支あしといふ、

ソモ戸鎖の世とは山形市の謂にやあらん、予の旅舎とせるは先づ可ありの巨屋されば幾ク所にも門戸あり、客の出入繁けれど、別に之れに注意せんともせず、不取締極まれり、予の如きは尤も之を危む而かも殆んど一物を紛失せしとぞしと、以て人情を下すべく、以て世態を判すべし、

隣室に一客あり、女按摩に肩擦らせつゝ滑稽突梯たわいもあいとばかりいへり、中に「九尺二間に過ぎたるものは紅の附たる火吹竹」とは妙あらせやと、彼れあか〜の洒落もの何れ彌次喜太一流の黨あるべし、東奥の野も今や秋漸く深く朝夕は殊に冷氣を覺ゆあり、黄昏佐藤氏の招きに應じて千歳樓に會す、樓は規模宏壯、僻には珍らしき割烹店あり、前面近く千歳山に對し風光霽くが如し、此山昔阿古耶姫其父實方中將を追跡して來れる處、萬松寺に舊跡ありて其名高し涼風襟懷に入り、園内の梧桐秋一葉座ろに旅情に禁へざらしむ、

此夜寓に歸れば一封の郵書を得たり、忙手披き見れば杉浦露村宗匠の消息ありき、書牘の端して、

残る暑さ日の入りにて後は聊か秋らしき風のふきければ

白川はいかに都も秋の風

翌日大會準備委員會を開き、前田君の宿所に付種々評議あり、馬見ヶ崎の龜松閣は如何、千歳樓は如何、四山樓は如何かと群議百出して未だ決する所あらざり、一人あり先づ手に檢分を求む、而して龜松閣は予が前日諸氏の案内にて之を知了せり、諸氏いふ請ふ千歳樓を案内して以て其龜松閣と何れを取るべきやを決せんと、予は前番疾くに檢分を了すといふや、人々哄笑せざるも何ぞ其探檢の神速ありやといふ、蓋し此地は有名ある割烹店に多く妓を蓄ふを以て之を怪むあらん、爪田に履は入れざるものよ、

寓所後藤屋多く陸奥外相の書を見る、何の故あるかと問へば予が宮城築治監に入るの前は此地に幽囚されたるに、此家にて差入ものを爲し、後宮城に送致せらるゝ際亭の主人何くれとさく世話しけるより、斯くは關



係を有するありと、主人は奇男子ありしと聞けども今は己に逝く、大會に就て實業篤志家争ふて資を抛ち大會用に供したしと望み現に三百餘圓に達す、又中には祝盃五百個を献せんといふもの、林檎一人に付幾貫目宛寄附したしと數十人申出づ、信仰斯くの如し、前田君の責任益重く、大會の結果愈多望あらんかし、

山形地方の人其熱心に至りては頗る稱すべきものあるに拘らば、百事緩慢悠々として無頓着あるに至りては性急なる我等の常にもどかしく思ひたる所あり、假へば大會準備上に付種々打合せて之を實行する迄には其間際に至らざれば着手せざ、再三再四督促するに及んで漸く事を辨せざるが如き又旅舎にありても膳を運び、茶を運び、飯櫃を運ぶ迄には途切れくどありて汗は已に冷へ飯は漸く炊ぐといふほどあり、之れ偶々人情の悠長あるを知るに足るも急速を要する場合に非常に迷惑を感じたり、大會準備の如きも從來二三日にして事足ると思ふほどの仕事すら、進捗極めて遅々果ては激して一喝を加へざるべからざる事多かりき、

九月八日に至り大會は愈切迫せり、俄に狼狽せる人々の奔走は一方あらば、此時に當りて、酒田町の巨豪等前田氏招待の議あり、之を在新潟の同氏に報して愈海路該地に赴かるべきことありしに、海上暴風に逢ひ一時或港へ寄航せられしより歡迎人の途惑ひとあり、酒田町民の失望とあり、大會準備上の齟齬とあらんとし、各所への發電と各地よりの受信とは楯の齒を引くが如く繁かりしも九日午後六時鶴が岡より更に酒田へ迂回し遅くも十日山形若との一電により始めて前田氏の行先を詳にせり八日の暴風は氏の一行の困難は申す迄もかく縣下一般に容易あらざる騒ぎを惹起したり、

八日より九日にかけて縣會議議長齋藤理右衛門、米澤製糸會社長丸山孝一郎、元審査官川村利三、同上金子孫左衛門の諸氏各郡遊説を了へて來會せり、福島君亦越後より來り着す、此他各郡の實業家は競ふて市に入るの有様されば旅舎は追々充溢の狀を呈せんとせり、殊に驚くべきは各街道とも前田氏來着の道筋分らぬとて各道とも有志は人力車を尽く徴發して準備を爲したれば今は一輛をも殘さば、爲めに來會者中には非常の不便を感じたりといへり、

今嘗親戚某臺灣に於て九死に一生を得、今は病を箱根足柄に養ふと聞き、夢魂頻りに在台的知友諸氏に向つて飛ぶ、

山形に慰斗梅てふものあり、梅を以て菓子に精製したるもの、土産もの等に重寶あり、又林檎は殊に名高し、大さ徑三四寸に達す、深緑碧玉の如きもの、淡紅珊瑚の如きもの、到る所に之れあり、其味甘美にして尤も珍重すべし、賤の伏家の檜端紫々として枝垂たるを見るは雅趣別に愛すべきを覺へたり、

九月十一日午前八時前田君酒田館岡等を経て山形市に着せり、歡迎無數、此日大會發會式を舉行し首尾能其第一日を了するを得たり、

然るに予は前日來微恙あり、病院長長松醫學士の診察を請けたるに急ぎ轉地療養を勧めらる、而かも開會第二日にして欠席せんこと予が畢生の憾みとする所、是非とも推して大會を終らんものと思ひ居たり、然るに不幸病勢益々募れり、十二日午前同宿の岩淵君に托して會頭に一封の書を致し其承諾を得て、直に上の山温泉に向ふ、

上の山は山形市を距ると僅かに三里に過ぎせ、而かれども疲勞せる手に於ては二三十里の距離とも覺へたり、行く／＼大會の事を思ひ諸大問題は如何に成行けん、委員會は如何に結果を見たるやらんか、將た會頭は數日間安眠されざるに今日の疲勞は如何あるべき、おど種々の感想に胸を打たれ、途中の景色を一向眼に入らばこそ、車は已に上の山米屋といふに着けり、

着後一浴を試むるに浴室三ヶ所あるも此家は會つて會津屋と稱せし頃より古き温泉宿といひ、且つ宿驛のことあれば構造更に見るべきあり、只道者の入湯に供するが如きのみ、左れども湯質は極めて清淨、滾々たる温



泉各旅舎に分涌せられ、別に路傍一大湯槽あり、旅人又は非人にても勝手氣儘に浴し得るあり、効能は例の通り萬病あれども殊に腰部以下の病に宜しどか、

頭は岑々として重く、脚は踉蹌として歩むに難し、此夜按摩を取る、按摩の曰く東京の人口は一万もありませんか、い、百万人、一、イ百万、左様すれば國會議員は二三人も出ますん、いと、彼等又政治を語るか隣室に二客あり、怪しげある婦人と狂ひ廻る、時に此地の名物「たわらせん」ありとの一老婆子の室に售り來り、彼お客は昨日既に出發の筈ありしに未だに出發されんはよく／＼のことだといふ、聞けば妖婦は當地の娼妓ありとはお座の謳めた話、

東京新聞雜誌を注文す、雜誌屋の小僧携へ來りしは盡く二三ヶ月前の古本のみ、一枚賣又は一冊賣は新刊ものありといふ、山形の新聞すら、一枚賣は更にあかりき、

十三日午前八時の頃と覺ゆ東方に當れる一山岳轟然として爆發し噴煙天に漲る亭の主人曰く之れ吾妻山更に噴火せしものあらんと、蓋し兩三日前より何處ともなく鳴動し且つ時々激震ありしは之れが前徴ありしからんか、

午前十時南村山郡書記松平信任君來り訪はる、前田君は十四日米澤に至るの途次、此に少憩の筈あり云々氏は準備として歸り來りしあり、氏といふ所によれば先年東北御巡幸の御此家に寵恩を駐めさせられしとありと、予は奥羽六縣實業大會々場ある山形市を距る三里以外の地に病を養ふて懣懣禁する能はせ、謂へらく平壤包圍合擊に際して野戰病院に創痕を療するもの、其不平、其不愉快亦方々に予の今日の情を感せしあらんと、他さし勇氣は依然として勃如たるも、体軀之れに伴はせ、空しく體みを飲んで傍觀の地位に立たざるべからざれば也、

十三日午後頭熱して將さに慥んとす、剪髮師を招き髪を理し思ひ切つて短き坊主の如くせしむ、試みに頭を撫

で來たれば宛として昨夜の按摩先生に髣髴たり、自ら明鏡に對して形影相憐むと云はん、

今嘗徒然禱に在り、偶旅舎の門前一壯士あり尤も美聲を大音に呼ばはりつ、醫生ふしを謳ひけり、衆争ふて彼を囲んで聴くもの、如し、無聊の餘耳を傾くるに壯にして快、則ち其一葉を購はしむ、調素より蕪雜あるも、地方民心の奮興を徴するに足るものあるが如し、

十四日午前十時、前田君一行來着す、土地の官民有志一場の談話を請はんとて、温泉場の一室に待拂へたれば、君は着後直に實業談を始め、辟々數百言、予は偶然にも此處に於て再び君を迎へけるに、君は愁然として懣懣して曰く九州大會將に迫る、足下亦之れに赴かざるべからせ、靜養以て歸京の日を俟たんと、有志者續々慰問せらる、一行は十二時出發米澤に向ひ予は獨り止りて茫然たり、只第二日以後の會合も着々運行して意外の好果を收めたるを聞き、病中聊か悶を遣るのみ、

鬼界ヶ島さらぬ羽前の國の片田舎に取殘されたる俊寛僧都は日夜藥瓶の外相手とすべきはあく、聞くものは凄々たる温泉の湯のたぎる音、眼に觸るものは新陳代謝する旅客の出入のみ、惡因惡果、善因善果、因果應報に發善提心叶はぬ時の神頼み、口の中にてムニャ／＼、

唯見れば四十前後のお化け然たる女中、デコ／＼に脂粉を粧ふたるが、何分よろしくと挨拶に來る、之れ何者と吃つと睨へは、傍より女亭は曰く且那は當地の語が分らぬとて用達し毎に女中の恐縮、ソモ是れあるは江戸ッ兒のチャキ／＼、山形でも米澤でも廣島でも長崎でも世界萬國のお客様に接し居ればどの長口上宛然縁日の見世物大入／＼も宜しくといふ鹽梅、ハ、一之れが乃公の旅宿に於ける通譯官であるか、合点々々、之れと能く似て一笑話柄とすべきは、去十一日前田君山形ある龜松閣に投す、閣の女中は例の通り奥州もの、周旋方の謂へらく鹿兒島産の前田君其言語は珍らしく垢抜けたりとは云へ奥州ものは聞取り兼ねべし、分けても君は短氣と聞く、若しや言語の通じ兼ねるよりお眼玉を頂戴しては千慮の一失、堂か工夫はあろまいか



と甲乙丙丁段々協議の末、東京ものから然るべしと四山樓と稱する割烹店の女中を臨時通譯官に採用し之れでこそと安からぬ思ひしておさく注意に注意を怠らぬ、幸ひにして無事あることを得たりと大喜びに發起人の某は後に語りき、

初め此温泉内に於ける予の一室は極めて騒々しかりしも、間も亦く最も奥まりたる藏座敷を擧げて予に占領せしめぬ、室の一方には別に一大湯槽あり是れ亦予の獨占に任せり、世に所謂慈悲の牢とは斯かるものかと思ひき、只此中にも松平郡書記の親切ある公務の餘暇には必らば見舞ふる、あり旅舎の主人は其が園内の累々たる大林檜をもぎとり來りて之れ召かれと差出す心ばへの掬すべきあれば又鈴木といへる醫師は職務外ともいふべき厚き注意を與ふるあり、例の通譯官さへ多くの小説本を携へ來りて無聊を慰めけり、久しかりに春の屋主人の舊著可憐嬢を讀みて小説其ものよりは寧ろ坪内其人の面影を想ひ、其聯想として己にみまかりたる學友を想ひ果ては亡き祖母亡き小妹の昔の愛を追想し思はせ澄然として一滴の暗涙を禁する能はざりき四顧すれば月は樹の間に淡く蟬虫は草叢に切々たり、

夜來のうつらうつらと悶へ苦みしに似せ、十七日拂曉とありて頗る爽快を覺へければ、寸時も猶豫からず再び山形市に歸装を整へたり、先づ頭上の山に行ける頃は病身にあれば、途中一物として眼に映るものもかりしに引換へ、こたびは濃淡畫けるが如き遠近の山影、黃風十里實れる秋の田の豊穰ある狀、溪川の荒れたる土手に茅茨の穂を長く垂れ茂れる淋しき風情、又到處の樹蔭にて水晶の如き葡萄の房や掌大の甜瓜を賣る老嫗路傍に踞するあり、牧童担夫を此に憩ひて甜瓜を喰ふもの頗る多し、思ふに此邊果瓜の産に豊ありと知らる、試みに梨子と葡萄とを舌に上すれば其美くして、淡きと初雪にも似たらんか、此夜金子孫左衛門君來り訪はる、談たましく果物に及びけるに氏は曰く本年京都博覽會に於て我地方の林檎を岩手青稜北海道産に比するに山形のもは早く腐蝕の傾きありしは味甘美にして多く澱粉を含めば也、之れ氣候の他地方に較

べて温暖あるに依ると、或は然らん、

今回奥羽六縣大會決議の條項多き中にも尤も主眼とせるは、農會にありては農會法の發布を希望し且つ農事教育普及の法を講ずる事、五二會にありては各縣に五二品々評會開設の事、蠶絲會にありては、各縣の蠶絲業組合に聯絡を通ずる事、及び同會支部設置の件等にして別に各會に通しての決議は各縣適應の實業學校設置の件もありし、十八日は縣廳に於ても諮問會を開き以上の決議實施に付て已に方法を審議中あり、

十八日午前曉霧を拂ふて山形市を出づ、今回は栗子峠の險に懲り七湯の路といふものありたれど、予は仙臺に迂回せんものと關山越へといふに向へり、出發に際し仙臺迄の人力車切符を求む、之れは立場くにて繼立する特別切符あり、然るに天童、關山其他の宿驛に至る毎に増錢又は綱夷等を肯はざれば車夫は容易に發すべき景色あり、規則と裏面とは何處も斯ふしたものかと思へり山形より關山越の頂上隧道まで九里と稱す午後二時頃漸く着せり、之より更に四里宮城縣宮城郡作並に達す、坂路羊腸として上下凡六七里もあらん、然れども道路今修繕中にて稍舊觀を改めつゝあり、故に車行割合に便あり、殊に一方は斷崖峭立、峻壁將さに崩れんとし、一方は一大溪流を隔て、鬱々たる峯壑天際に聳ゆるあり、一峯送り去りて一峯迎へ、一水流れ去りて一水又至る、眼畔轉た應接に忙はし、隧道を抜け出で、後は飛鳥空に翔り落葉秋風に翻るが如く、呵して降ること瞬間に在り、作並は元湯岩松よふ方に投ず、

予山形を發するに當り作並に温泉ありしと聞て又是れ山の上の類あらんと思惟せしに、何ぞ圖らん作並温泉は深山幽谷中にある一大靈湯あらんとは、

二層樓に上りて四顧するに滿目の風色尽く奇絶快絶あらざるはあし、對岸の峰巒翠綠滴らんと欲し眼下に流る、溪流は白沫化して碧きらんとす、恐らくは是れ山の翠綠を映發し來れるに依るからんや、室の器物咸き青く、白の浴衣地亦全く蒼きに似たり、案内に連れ數百尺の階廊を下るはどに温き泉は室の中央に瀧を爲



せり、一は流みて浴すべく、一は噴出して打たるべし、舍外別に巖窟の下天然に湧出する靈泉あり、溫度膚に適せり此室外を見渡せば樓上眼下に眺めて沿々たる溪水潺湲として流れつゝあり、加るに樹木參差景致云ふべからざるものあるに至つは眞に之れ脱塵の地といふべきあり、  
 浴客は現時頗る多く、久しく滞在の客にやあらん階下の四側にある各室へ家族を拉へ來りて自炊せる人々數十組を見受けぬ、而して此自炊連は丁度學校の塾部屋の体裁に幾棟ともかく建て連ねあり、夜半試みに一浴せんと階下を行くに、階は八方に道ありて何れも一の本道に出づる仕組あれども恰も藪くゝりといふものに入りたるが如く岐路に彷徨すると屢をあり、僅かに辻毎に設けあるランプを目當に辿り着く、又夜中は村内の人々入り來るにや殊の外雜沓したり、

十九日終日滞在二十日午前五時眼を醒むれば四周の諸山翠愈々濃かに夜來の露華彼をして新粧を凝さしめたらん如くあり、ヒヤリと觸る、溪間の嵐俄かに塞さ甚しきを覺ふ、一浴後車を命し名殘を青山白水に止めて行く流車無き間、仙臺より秋田山形に出でんは此街道の外ありし、旅人の尋ね問はんこそ宜からめ、殊に温泉地は作並驛といへばいふもの、驛を距る數丁の上在り、則ち是れ別乾坤として噴々たる所以、  
 此地より仙臺迄行程八里、一脈の岡阜と一條の溪流とに沿ふて下る、遠野ヶ原にて少憩遠近を見渡すに、處々桑樹其他の果蔬を試種せるもの何れも能く繁茂せり、知るべし鋤鋤を用ゐんには大なる利源とあらんとを、

午前十一時半仙臺停車場前針久支店に着し十二時五分の流車に搭す車上夢魂斷續として宇都宮に着せしは午後十時過ありき、

翌廿一日午前四時同地を發し歸京の途に就く東天漸く白げたるも四顧猶暗黒、小山、間々田地方に來りて鷄鳴を聞くと共に曉霧の纏くを見とめ、古河に至りては夜全く明け渡れり、七時廿五分上野着、東台は大佛のはどりを經て谷中龍泉寺に從弟澤井子を訪ふて久淵を叙し相携へて元どの木挽街僑居に歸りしは正午頃あり

し、願みれば去八月十一日京都を辭せしより此に四旬當時褌衣猶暑に堪へて今や已に衣を襲ねんことを思ふ、此間實業の弊を高め、前田氏一行の歴説せしもの曰く愛知、曰く北越五縣大會、曰く奥羽六縣大會爾餘幾多の小會同に至りては一々枚擧に違あらざ、是より又更に西州を徇へんとするあり、今年の實業會も多事ある哉、

二の聲は山の響か時鳥

波香

當時知友は左の批評を寄せられたり併せ録して紀念とす

峽陽山人の奥羽記行を讀む

子方

斯く烈しき殘暑中に數百里外の遠き旅路に産業の視察をかし傍ら東北地方の有様を記して近江新報紙上に寄せらるゝこといづもながら山人が志のやさしく且筆の健げあるには驚きぬ

本月三日の紀事の中ある佐藤啓氏より予に傳へられし一言は正しく領承したり此後若し同氏に逢ひ又は音信の序もあらば宜しく挨拶の勞を煩はさん同日記の奥に山人始め月を見てやがて予を思ひいだされしことをものせられしかど大かた山人も月を見て同じく懷郷の情にや堪へざりけん其故郷に近き賤岳を媒して予が境遇の上におもひ及びしことあるべし

予は此日雲井に近き方に伴ひて丹生の山中管並といへる里のある古き禪窟に宿りしに月の光いと澄わたりて蟲の音さへすいしければふしどに入るも惜しどて都人を始め同行五六の人々とも中庭にむしろしかせて月をながめしに實にも今昔の情に堪へざりげれば今宵の月は一つあれども其見る所と人によりてはさまざまに見られもせん遠征の將士は定めて三笠の山の古歌にも感ぜらん又故郷にてはいかに見るさらんあど胸に



も浮びたりしか今山人が筆のあとを見れば人のこゝろは同じきものあることを知れり今記事讀み終て當日の感をしるし山人があつき情にむくふ

すかあみのおく山寺に月を見しいでは山端もみゆるおもひに

### ○山陰紀行

二十八年の秋其三分は之を奥羽の野に於て賞し、次で其三分を京都に眺む、今や残れる四分の秋を山陰地方に於て消し盡さんどす、所々山川秋看るべし、而して一段は一段より秋色深く且つ濃かに染つるを想ふ、去二十日京都物産品評會も漸く整備の緒に就きたれば、大和山林會の招きに依りて奈良縣畝傍に赴き、同夜三笠山頭の弦月を大阪鐵道に載せて歸りしは翌二十一日朝あり、忽ち天の一方より飛電落つ、文に言ふ「トットリニマツ」と、讀過一刹那身は再び今乗り來りし鐵道に依りて後に返へし大阪も過ぎ、神戸も過ぎ、姫路にては早や夜の十時半を告げにき、左れば岡山ある三好野といふに着きし頃は午前二時とも覺へたり、二十二日拂曉車を備ふて鳥取に向ふ、岡山より彼の地まで里程凡三十二里、此日細雨蕭々として衣袂悉く濕ふ、朝日川船渡驛の渡船場を過ぐる頃は河頭の白霧朦朧として咫尺辨せべからせ、殊に遠近の山岳は絲の如き雨と綿の如き雲とに纏はれ、又は掩はれつゝ、時に錦繡を隱約の間に現はすに至りては、雨中の秋色亦別一種の奇趣を添ふるものにあらせや、午後六時津山町對鶴橋に投せ、

岡山にて雇へる車夫健脚比奇し、同輩の間夙に遠足博士を以て稱ゆるもの、如何なる遠路と雖も一たび備はれたる上は其客の到達地まで到らざれば止ませといふ、而かも渠には酒癖あり、此夜投宿後渠は勝手元にて獨酌痛飲、須臾ありて下婢と口論を始め、殆んど之を持って餘せり、翌且とされば渠れ始めて夢の醒めたるが如く、叩頭再拜して罪を謝し、鳥取市に迄隨はんとを請へり、聞く渠れは元身元ある材木商ありしに一朝敗を取りて此社會に墮落せるものありと、身元話しより真底懺悔の色見ゆるも愛らし、

二十三日晴雨定らる午前七時津山を發し廣戸、檜諸驛を過ぐ、廣戸の大字に日本村といふあり、大日本中小日本あるぞ珍らし、而かも日本村にて日本晴とされるぞ妙あり、日本村の邊、丘陵起伏、瀟目只蕭條寒寂の曠原あり、思へらく山に樹あかくして芒の茂れるを見るは宛然之れ富士の裾野を過ぎるが如く、其茂れる芒の野に牧馬耕牛の放てるは宛ちがら宮城、岩手地方の牧場を過ぐるの觀ありと、一嶺稍高峻あるものを跋ゆれば直下一千尺、車輪急奔、忽ち美作國智頭驛に入る、智頭と津山と此間凡十二里、樹屋に投宿せり、誰やらんが云ひし、「さまぐ」の浮世を外に旅の頭陀」と味あるかき、

山陰の秋 如何に其山川を彩れるか、其彩られたる山川が、如何に我等の感慨を養成せしむるに餘りあるか、智頭驛を發せしは二十四日午前四時、驛より行くこと凡三里程用瀬町に至りて戸々炊煙の颯がるを見る、天未だ全く明けざるの時行くと彼の蒼を出て、此嶼に入る、一峯前に聳へ、一峯後に立つ、此間湍流の白沫を噴ひて朝暾に映對せんとするあり、黒闇々の中山は次第に開け、水は次第に清らかあり、翠の樹、紅の葉、何處か秋の最中あらざらん、況して川の益廣くあり、迫れる谷の遂に一望際涯なき稻田とされる處、僮夫野人耕牛を追ひ今や白露を拂ふて田の暖に向ふ、稼穡の人力むること斯くの如し、旭日三竿猶眠を貪ることあるは自ら以て誓ひべし、

備前、美作の境に於ては稻の刈りたるを認しもの稀ありしに、因州に入りてよりは到る處稻田の七八分は刈り盡せり、苧り盡して而して牛は方さに人を助けて土塊を墾し農夫は其墾せる處に向かつて種を播き再度の收穫を望み居れり、行く處の山村も、到る處の水隈も、處として種を蒔き乾さぬは亦く、民舎籬落の軒端には、瘦せたる菊の花のきよくとしたりる上に鳥柿の吊らさぬ家とてきし、枝垂れる柿の樹は見事にし



て光ある熟柿の連珠の如く鈴とあり豊年に肥へ太りたる村童等の口腹を充たすに餘あるべく想はれたり、山川斯くの如く麗はしく、稻田斯くの如く美にして且つ平かあり、人情風俗亦斯くの如く穩かあらん、山路通過の際、子女の手提籠を携へたるものに逢ふこと多かりき、試みに其籠に盛れるを見れば香高き松露あり、松茸も今は既にすがりと見ゆ、

智頭より鳥取まで凡八里程、午前八時半市に入り錢屋に投せ、官民有志を歴訪し畧此地實業の現状を知る、聞く神戸地方より來りて鳥取市に入らんには姫路の西ある有年の停車場にて下るべきに予は遠く岡山より來れり、之れ大なる迂回ありと、左れども事に些の欠くる所なくして途に多くの奇山水と相會ふ、備作の山川亦我に於て好因縁あるかき、

二十四日鳥取市着後直に官民有志と共に諸般の打合せを爲したるが、此地にては二十八日前田君到着、二十九日縣下實業大會を開くの豫定ありければ、大体の準備を了し翌二十五日倉吉町に赴きて君を待設くべしと決意しぬ、

當日は朝來篠突く計りの大雨にて、殊に鳥取市外凡一里小山池の邊りに至る頃は烈風大に起り急雨盆を覆すの有様にて、提雨はいふ迄もあく一身総べて潤ひたり、小山池は余吳湖に比すれば二倍乃至三倍もあるべき沼にて四周山を以て繞り街道は此池に沿ふて彎曲せり、處々漁村あり翠松の下白砂の間に點在し宛然是れ一幅の好畫圖池に島嶼あり大あるは我が琵琶湖の奥の島に似て稍小あるもの、而して其次に位せるは多景、沖にも譲らざるべし、更に四里程を進めば水尻池あり、池の汀を経て一山路を攀づれば濶然として天地忽ち開くの看を爲す、頂上左方は則ち是れ渺茫たる一大海あり激浪濤怒近く潮を捲て岸を打ち、其聲塔然として壯絶言はん方あり、而して遙かに墨を抹したるが如き飛雲斷續の天際を願望すれば浩蕩汪洋として紺碧蒼空と相接す、山下は寶木驛といふ、之より數里の間坂路羊腸幾たびか上り幾たびか下り、或時は翠松蒼鬱たる砂土の

岡陵を過ぎ、又或時は天工鬼斧をも奪ひたらんが如き斷崖絶壁の間を跋渉す、途に瀨村といふ一孤驛あり、靈泉滾々として晝夜を止めせといふ、少憩して行くは途に一人車疾驅して來るものを顧みれば鳥取縣書記官あり、之より二車相前後して倉吉に向ひ、午後五時岡地に着し岡本方に投せり、倉吉は鳥取を距ると凡十四里、鳥取には從來三四の郡農會ありし外絶へて實業上の團體あるものあらざり、然るに今回新たに鳥取縣中央勸業會あるものを設け農工商全体を網羅すといふ、又此機に乗じ倉吉にては農學校開校式を舉行すべきことあり、着後旅宿に於て多くの有志と會し協議半夜に及ぶ、

二十六日午後一時、予は米子より將さに來着せんとする前田君を其途中由良驛に迎ふ、之より先き代議士石谷、門脇兩氏、久米郡農會々頭岩本諒藏、河村久米、八橋郡長天野祐治、鳥取縣屬木崎延年外數氏は遠く松江に君を出迎へたり、就中石谷重九郎氏は湖南の高谷光雄氏が前田君に於けるが如き舊交あり、爲めに多年君の來遊を希望し居たるとして最も熱心に奔走したり、驛頭待つと之を久し一行は車聲轆々として來るに逢ひ轎を還へす、書記官深野一三氏を始め實業家凡百六十名河岸長橋の邊りに歡迎したり、煙火空に轟き、國旗風に翻る、君は一揖して此間を過ぐ觀るもの堵の如し、一行中大分の蠶糸家小野惟一郎氏在り、氏は今回も例に依りて同行し來れるあり、氏の熱心や益し尋常にあらざりといふべし、相逢ふて一笑するのみ、

此夜深更に至るまで人の訪ふもの多し、人去つて後、君に別後の状況を叙す、君亦九州及島根地方の實業を語らる、抑も今回の行に當つてや出發に先ち、豫め人の多きを食らせ、會するものは眞の實業家あるべきを以てし、且つ漫りに煙火を揚げ、送迎の盛を競ふとあからしむ、他亦實業社會の大勢既に定り亦黨争紛糾の渦中に陥るの虞なく、着々として實地の事業興起すべき有様あれば、行色は盛粧を求めせして寧ろ實實簡樸を要すべきを以てあり、然るも猶此豫告を用ひせして争ふて集り競ふて盛況を呈するに努む、亦是れ時運の然らしむる所、君の熱誠人心に貫徹したる結果にあらざるあからん、現に鳥取地方に於ては其豫告に依り



て傍聴者に制限を設け、入場券配付には深く心を用ゆるに拘らざり、入場を望むもの益多く、到底會場に充つべき場處なく、止むを得ずして劇場を借用するに至るとて有志は切りに其無禮を斷り居れり、況して煙火の如きは最初より嚴禁せし所あるに、衆之を可かき熾んに打揚げで歡迎事務所を處々に設くるの状況とありしとぞ、團十、菊五と雖ども恐くは斯程の人氣役者たる能はざるべし、君の苦衷却つて察すべきものあり、當夜の如きも斯く歡迎されては甚だ有難迷惑ありと云へり、  
聞く因伯二州は元池田氏の所領、其産米は民間に於て他國に輸出を禁し、貢租米藩中士扶食を扣除し剩るものは之を大阪に輸するの法を採り當時因伯米の名ありしに廢藩後は自由に一任せられ俵裝調製悉く粗惡に流れ聲價頓に落つといふ、然れども近來諸種改良の方法を講じ稍實踐の効顯るといへり一部有益の調査書を得たるも此に略す、

廿七日午前八時近時世間に好評ある山陰製糸會社を視る、社は百五十人取りにて其構造は至つて質實あり、而かれども日本生糸の聲價は此社あるが爲め海外に迄好評を博すること多し、倉吉の名譽にして又山陰の名譽たるは論ずし、鳥取に來り物産中別に驚くべき進歩の實あるものを認めざるも此一生糸會社を以て將來地方物産の奮興を促すに足る、今地方調査の結果を見るに、會つて當地方は綿、蠶等を産出せしも近來は桑園大に開けて物産に非常の變遷あるか如し、前田君は製糸工女を一堂に會して諸子は生糸社會の近衛兵ありと説きぬ、婦女子亦奮勵する所ありして可あらんや、

午前九時倉吉町の郊外一里の處、縣立簡易農學校開校式に赴く、同校は數年前の設立にして今回新たに規模を擴張せしありと、式には山瀬校長、深瀬書記官、前田君等の祝辭又は演説あり、終りて生徒は前田君萬歳と書したる大輕氣球を天外に放つ、球飄々乎として前山の頂に向つて飛揚し去り衆一齊歡呼喝采したり、午餐の饗ありて歸る、

午後二時同町壽座に談話會あり聽衆二千名滿場立錫の地あり、夜に入りては大岳院に懇親會あり列席凡三百名非常の盛況ありき、

廿七日夜倉吉町に於ける歡迎會を、例の折詰冷酒等を出すべく單に茶菓を供するのみ、而して前田君始め小野氏等の談話を肅聽し、熱心實に感すべく斯かる懇親會は各地漫遊中稀れに見る所にして質素の風欽すべし、翌廿八日午前七時全地旅舎を發し齊木製糸場に立寄る、前田君は例に依りて工女を集め談話を爲せり談話中畏れ多くも我 皇后陛下が傷病兵に繙帯を賜りし事の有難さより 兩陛下が宵肝化育の仁を宇内に布かせらるゝ次第を述べて、苟も 陛下の臣民たるもの此洪德を仰ぎ奉り、益國恩報謝の意より製絲に従事すべしと説かれしに工女一同感涙に咽びぬ、夫より一同車を聯ねて鳥取市に向ひ正午青谷驛に達すれば此地にても村民歡迎して一場の談話を請へるまゝ、小憩の間父老を集めて懇談あり、途中より出迎人追々加はり鳥取市に至る迄には一行の車を聯ぬる數丁の長きに亘る、午後四時市に到着するや郊外に於て煙火を打揚げ、市中盡く國旗又は線門等にて裝飾し、歡迎人と見物人とは兩側に群集せると幾千百といふを知らざり、市民の前田君を觀んと索ひるもの、眞の前田君を見ずして皆郡長又は他の服裝の立派なるものを指して前田君と爲せり、而して前田君は薩摩飛白の醫生羽織にて已に遠く彼方にゐるも面白し、同夜花月亭に投宿す、

廿八日午前八時より前田君は會つて君の下に立ちて君の志業を扶けたる故杉山榮藏氏の墓に展し次で鳥取市内青木氏刺繍工場、秋山忠直氏羽二重工場、由谷製糸場等巡視何れも工女に對し談話あり、次で十時より眞教寺に於て鳥取中央勸業會の發會式に臨む、石谷代議士、田中市長、深瀬書記官、秋山忠直、前田正名諸氏の祝詞又は演説あり、式終り規則議了後直に縣立物産陳列所并に同所構内に繋げる所謂因幡牛を一覽、同所にて飼牛主に對し畜産上の談話ありき、午前中都合五ヶ所の演説とす、  
午後一時より同市劇場寶座に於て談話會あり、聽衆三千余名、猶入場し能はざるもの三四百名、場の内外は



人を以て填咽せらる是れ鳥取市未曾有の盛況ありとぞ、君の演説は四たび休憩し、四たび演説し、前後凡三時間の長きに亘る、熱心と叮嚀とは他に多く見ざる所たり、蓋し君が多年全國巡回の事も鳥取縣を以て一周しり此に一段落を告げたる爲め特に注意を加ふるに依れるか、小野惟一郎氏亦一場の演説を爲して散會す時に午後四時半ありき、

予は散會後急に旅装を整へ午後七時先發して但馬國湯村に向ふ、而して二方郡八田村豪農北村元吉氏予を案内せり、氏及び高橋彌太郎氏は郡民惣代として來鳥し前田君を道に要して一場の談話を請ひしに依る、日は暮れ路は遠く、加ふるに車夫は老休のものに遇ひ阪路を踰ゆるに頗る困難を極む、則ち時々北村氏か乗れる所の車夫の援助を得て星馳す、月は朦朧としてはの暗く、山容水態只蒼茫の間に認めて去れり、午後十時の頃漸く五里を距る岩村に着せしに温泉あり、僅かに當日の勞を慰せしむ、此地亦明日前田君通過すとて歡迎の準備忙がわしく、有志某來りて左も心配げに準備上の事を聞合へり、曰く此通り急速の遷替へにて徹夜事に従ふと、以て有志が心配の一斑を察するに足る明日は午前四時出發すべき由と告げ置き突差此記を作る、因に記す、曩きに倉吉町を發するに際し同地の刀鎗家藤岡吉平氏あるものあり、名和長年公佩刀の摸影を梓したるものを贈らる、享けて之を閱するに刀影髣髴として紫電閃々たるを覺へしむ、嗚呼南風競はせ、公が當年の苦衷夫れ幾許ぞや、此もの蓋し伯耆に遊びたる好紀念也、題に曰く

名和公佩刀歌

紛紜揮推靡賊軍。劍氣直衝船嶽雲。遺恨未截賊魁首。大宮一敗虬龍吼。一生忠義鐵石肝。心血濺來碧未乾。知君精神何處注。三尺霜鋒秋水寒。

三十日午前五時岩井驛を發して二方郡温泉村字湯村に向ふ、夜來降雨烈しく寸時も止むことなし、蒲生嶺を踰ゆるに當りて雨は益々甚しく、前峯後嶺、咸相揖して縹雲映雨の間に隠くる、平生晴れたる京都及近江地

方の秋に逢ひ慣れしもの、若し稀れに山陰の雨量多き秋に逢ふことあらば、其困難之感老る多きと共に亦一種の奇趣あることを知るあらん、予は實に非常の辛酸を嘗めつゝあり、然れども晴好雨奇虹暈夕陽と相映して錦繡更に一段の審美を繪く時、飄々然として身は白雲瀟灑の間に羽化登仙の想あらしむるは雨量多き山陰地方にありて殊に奇趣を感じる所以あり、行々但馬牛に逢ふ、夫の牛は秋高にして肥ゆるといふあるに彼は今骨高く肉瘦せつるあり、是れ秋穫の時農家の彼を待つ極めて多忙あるに依るか、途中兵庫縣の盤系業家田淵澄氏の出迎として來るに逢ふ、氏は岩井驛迄進みて前田君を待たんとし、午前九時湯村に着すれば雨中道路を修繕するあり又會場及び旅館等の洒掃に狼狽の状あるもあり、此地其名に示すが如く温泉あり、熱湯絶へず湧出す、予は驛外遠く此地を望みて道に岫雲颯り、水烟の飄くが如きものあるを認めたりしが、思へば之れ此地の熱泉より蒸氣の磅礴として騰上するにてありき、

午后二時半前田君着、暫く諸般の打合を爲したる上、四時より更に先發して村岡驛に向ふ、驛は之より距ること五里強、此間春木峠といふ峻阪あり、再び又白雲を踏んで嶺に登る細雨斜風に纏ひ車行容易に進む能はず、頂上一茶店に憩ひ將さに下降せんとする頃暮色蒼然として漸く人の影を辨せべからざるに至る、須臾にして雨僅かに歇み、黒雲斷續の間、時々一輪の月を洩すあり、溪流響壑々、前後又一客に逢ふとすし、溪谷益幽に月光愈々、凄愴の景致三ふべからせ彼の老檜古杉の蒼鬱たる邊、陰々として秋氣膚に迫るものあり、誰れか克く山中孤身單行の勞を解するものぞ、

卅一日午前六時村岡驛を發す、之より又一嶺あり屋井谷峠といふ頗る峻峻あり、此日亦降雨加ふるに疾風あり、淡墨の山、黒一点、着するかと思へば忽ち四周暗黒、無情にて一身を流し出さんとするが如き大雨來る、其勢滂沱として瀑布の下に立つが如し、車もれども無きが如く、車夫亦一步も進む能はずして、阪路の中央に佇立す、頂上に達し、雨漸く收まるに似たり、則ち叱咤一呼吸の間山麓に下り茶店に憩ふ時は僅かに



雲間より日光を見る、顧みれば屋井谷峠猶半は驟雨の中に没し、而して其半身は浴後の美人が淡化粧を爲したるが如く、耻かしげに其体の幾分を現はしつゝあり、午前十一時養父郡八鹿驛に着、田淵氏の製糸場に立寄り、午後四時出石に着し玉井方に投せ、

翌十一月一日午前九時前田君着、直に談話會あり、引續き懇親會を開く、前田君は之より朝來郡瀧瀬村の農談會に臨み歸京の筈あるも、予は此處より直行京都に抵らんことあり、生野銀山に向ひぬ、途中八鹿驛にて少憩の際淺岡雄之助氏と偶然邂逅す、氏は保險事務を帯びて高岡地方に赴くといへり、互に奇遇を喜びしも綴話の暇なく袂を分てり、出石より銀山まで行程凡十一里、五時の播但終列車に遅れしと車を急がしめ、僅かに三分のさわざり所にて搭乗することを得、姫路にて山陽線に乗り替へ神戸に着せしは夜の十一時、夫より午前二時半の列車にて拂曉七條に歸着すれば、京都四十万の市民は今方さに眼を破りて炊煙を揚げつゝあり、

前田君全國一道三府四十餘縣の巡回は今回を以て一段落を告げたり、此四五年間の巡回に依りて收むべき實業社會の結果は、今後益し計るべからざるものあらん、是れ今後の事業益々經營に怠るべからざるは猶從來の巡回に非常の勞を盡せると毫も異なることなきあり、幸ひにして予は君及び實業社會幾多知己の眷愛を荷ひ、君と共に全國を周遊し得たるは深く感喜に堪へざる所、他日若し少閑を得るあらば此間實地に就て調査見聞せし實業社會の盛衰消長は勿論、地勢、人情、風俗等詳細に之を編述して、沉く世の博識に問はんと欲する也、

過去人間名利中  
悠々自適常排悶

漫遊全國樂無窮  
時話茶桑伴野翁

香 楳

### ○大會雜事

我實業團體本部に於て舊曆三十一日夜半則ち今一秒時を越ゆれば實に明治二十九年といふの時に至るまで執務し來り、元旦一日だけは諸員自出度履蘇の酒を祝しぬ、監督前田正名氏は一日を以て東京を發し、二日既に江州米原驛に在り予が此地より同車して京都に着せしは三日午前一時半拂曉回禮、集會、奔走を始め爾來一周日阪神京都間の往復數回を重ね十三日京都を發して十四日着京すれば全國の實業家一縣又は一郡を代表して參會するもの一百餘名に垂んたり、蓋余大會全体の模様は疾くに別報にあり、予は特に今後注目すべき要項に就て我等が熱心事に従はざるべからざる所以を明かにせんと欲す、

蠶種検査法案は夙に天下實業家の注目する所、就中我滋賀縣は率先法案の制定を促すに勉めたり輿論喚起の事滋賀縣の如く勉むるものは稀れにして而かも能く朝野の驚々を來すも此法案に如くものは鮮からん、昨年の議會の形勢は深く當業家の遺憾とする所、大勢若し可あるあらば機に乗じて之を實行せんとは一般人士の熱望して止まらざる所あり、今期も已に實施の方略を講じつゝあり果して如何に結局を見るべきか其他組合法案、生糸直輸出奨励、製絲職工取締、生絲鐵道運搬、検査所活用の諸大問題皆斯業上の急務さらざるはあし、若し一項目にても首尾能實施の運に遭はば國家經濟上の利益夫れ幾何ぞや、全國大會も茲に第三回を開く、多少の見るべき結果あるんば斯業の前途真に危殆に瀕せりといふべし、當路者の大會に對する状況如何、抑も亦議會の大會決議を見るの状況如何、不日之を記報するの時來るべきあり、大會出席者は何れも府縣等々の實業家あり、大分の小野惟一郎、兵庫の田淵澄、仙臺の錦戸景訓、早川智寛、横濱の橋本重兵衛、長野の藤本善右衛門氏等をも見受く殊に器械製糸の鼻祖たる速水堅曹氏を起して本會の議長たらしむるに至りては本會の重きを感じしむるや大あり、而かも速水氏たるもの其光榮は之を前田監督と全國當業家に深謝



して猶足らざるべし、速水氏たるもの宜く死を以て事に従ふべきのみ、而して滋賀の布施、石居、横田、伊吹東野の諸氏陰に陽に孜々勉めて本會議事に與る、亦滋賀縣率先の名譽に對して耻づるべきは予の感喜に堪へざる所ありとす、

今や大會々頭前田君は其家族を擧げて大磯に移らしめ、自己の一身を大會々務の犠牲に供しつゝあり、顧みて更に大磯の事を説かん、

扱近頃の大磯は數年前の熱海に墜落たり、貴顯紳士の此に接連するもの頗る多く、山に倚る樓閣、水に臨む亭榭、數奇を尽し華麗を極む、富豪の別墅あり、貴紳の仙洞あり、京濱に行く僅かに二時間而かも温度は東京に比して十度の差あり、青き山白き水、金沙銀波十里の海濱に連りて千里行旅の人を慰むに似たり、

去る十四日東雲の頃汽車に駕して此地を過らんとす、窓外猶人顔を辨せざ、偶人あり予を物色するもの、如し、車窓より其誰たるかを問ふに前田君の書生片岡氏あるを知り、又予の下車すべき要務あるべきを察し、

今將さに發車せんとする一刹那車掌に扶けられて急ぎ車を下り前田君の寓を叩く、蓋し君は所用を帯びて前一日此地に來りしあり、訪問先づ一齋を喫したるは君の僑居の狹隘する一齋に過ぎざりしこと是れあり、六

疊敷の一室の外書生の居るべき三疊敷の室只一あるのみ、朝餐とあれば君及令夫人令息等何れも粗末ある飯盛を圍みてパン食を爲せり、其儉素ある今更のどにあらざると雖ども、誰れか此僑居と此家風とを以て我邦實

業家の泰斗たる前田君の大磯に於ける實況あることに思ひ到るものあらんや、則ち知る大磯の表面には天下の馳名を極むるものあり、而して其裏面には天下の儉素を極むるの人あることを、床上富岡鐵齋翁が贈れる前

田露雲水行脚の一軸を掲げ、默然として暢談時を移しぬ、  
而して此家風は凡て之を我團體本部事務所に於ても實踐する所あり、事務所には正直ある老夫婦あり、毎朝四時必ら早起き掃除に従事し、食事を調ふ、諸員の職務午前七時より午後十二時に至るを常とす、小野惟一

郎氏と予とは此所に起臥す、勞を厭するに二合の正宗と數葉の海苔とは無上の珍味たり、而かも真正の愉快は自ら此中にあり、我等の如きは素より其所ありとするも、多數會員の勤と儉とに至りては、我未だ會て其比を全國に見ざるあり、

勇將の下に弱卒あり、西南は琉球、又は大島より至るもの、東北は北越又は奥羽、北海道より來るものあり、農事大會は蠶絲大會に比して更に其數を増すもの、如し、之れ全國に於て町村郡縣農會の組織追々成立せしに依る、中にも熱心感ぜべきは、西南より至る人が痛く風濤の爲めに阻てられ、幸して大會に臨むが如き、又奥

羽地方の人が積雪堅氷を踏んで沓至するが如き、眞個に業に力め事に切あるにあらざれば能はざるあり、其一例を擧げんに米澤の蠶絲業家丸山孝一郎君は兼て斯業の熱心家されは是非來會せらるべしと人々豫期せしに、

突然丸山君より來電あり曰く、「殘念雪ノ爲メ行ケム」と前田君直に一電を贈る、曰く、「雪ヲ冒シテ來ン」と、丸山氏たるもの此一電に接し、風雪亦辭すべからざる也、乃ち更に其返電に曰く、「雪ヲ冒シテ今立ッ」と、

何ぞ其意氣の壯あるや、今や君與羽の險路吹雪面を撲ち、積雪脚を没する處を犯し、飄然として着京せり、斯くの如き困難を排して來るもの豈皆氏のみあらんや、

更に之れに比して慘あるものあり、廣島の蠶絲業者百々三郎氏家庭の現状是れあり氏は夙に斯業に熱心あるの人、本會開設前も自費を抛ちて縣下を遊説し蠶絲、農事の團結を促し居たれば、大會に付ては飽迄力を竭さんとの決心ありしに、花に開落あり、月に盈欠あり、出京前數日以來氏が愛玉は俄かに重き病席に就きぬ、而して

生死の程も如何あらんとのことより情に於て忍ぶ能はざるも、屢々上京を約し、時々責任を喋々す、大義亦殉せざるべからざと、遂に忍ぶ能はざるの情を忍び、割き難きの愛を割きて會す、之を耳にするもの誰か一滴の涙からあらんや、自ら任せるも斯くの如く厚く且つ切あり、是れ此の團體の一擧一動惻々として人を動か

し般々として世を動かす所以あるか、



### ○前田正名氏を送る

三十年五月二十三日俄然東上す、之れ前田正名氏歐米に航せんとするを以て、其前日馬場驛より米原迄同車し即日大津に引渡し東上を約せしあり、翌二十四日午前九時着直に實業團體本部を訪ひ、同夜木換町厚生館に投せり、二十五日同氏の出發準備に付斡旋し、二十六日は紅葉館の別宴に周旋す、朝野の名士臂を把つて獻談、就中樺山、佐野二伯及河島醇氏等知友前田氏の行を送るに友情を極めり、次て翌二十七日は上野公園美術協會に於て五二會員の送別宴あり、二十八日午前八時十五分新橋發濱車にて愈發途せらる、其盛況稀れに見る所、横濱着後郵船會社樓上にて少憩の後十一時同會社の小蒸氣三隻、税關より差廻せる小蒸氣三隻都合六隻の小蒸氣は見送り人を受けて本船に送れり、其數二百餘名、甲板にて一々正名氏と握手したる後前田君万歳を唱へ、船將に發せんとするや何れも小蒸氣に歸り、互に帽を振り手巾を振りて別を惜みしが、船は艦がて雄壯なる黒煙を上げ滄溟萬里水天翬曉の間に向ふて進み去れり、今予此書を編するの時、氏は方々に米國を去りて英國に着し、以佛等の諸大州を経て遠からず歸朝さるべき報ありき、想ふに内地の遊説一段落を告げ更に海外の壯遊を企て無事歸朝の曉には本邦實業社會爲めに亦一大變動を見んことを期して待つべきあり、其後の報に依れば、氏は九月二十六日佛國馬耳察出發歸朝の途に就き、十一月二日神戸上陸六日東京着の報あり、而して此書は偶然にも同氏歸朝の時を以て出版の業を了しぬ、



### 附 録

#### 雁 信 片 々

毎日之御報道御蔭にて品評會之様子も聞得安心仕候尙此上十分御注意  
本願候何事も目的を達し候には其途中にて理屈に流れ候時は道理も死  
物に付それには堪忍の一筋肝要に御座候(下略)

二十九年三月十六日

東京にて 正名

昨三日夕三時半三津ヶ濱着に候有志へは誠氣の毒に候へども急用あり  
り六日當地出發七日未明神戸着同所の會へ一寸相臨み歸京の途に就き  
可申候(下略)

二十九年四月四日

松山にて



### ○前田正名氏を送る

三十年五月二十三日俄然東上す、之れ前田正名氏歐米に航せんとするを以て、其前日馬場驛より米原迄同車し即日大津に引渡し東上を約せしあり、翌二十四日午前九時着直に實業團體本部を訪ひ、同夜木挽町厚生館に投せり、二十五日同氏の出發準備に付幹旋し、二十六日は紅葉館の別宴に周旋す、朝野の名士臂を把つて歡談、就中樺山、佐野二伯及河島醇氏等知友前田氏の行を送るに友情を極めり、次て翌二十七日以上野公園美術協會に於て五二會員の送別宴あり、二十八日午前八時十五分新橋發濱車にて愈發途せらる、其盛況稀れに見る所、横濱着後郵船會社樓上にて少憩の後十一時同會社の小蒸氣三隻、税關より差廻せる小蒸氣三隻都合六隻の小蒸氣は見送り人を乗せて本船に送れり、其數二百餘名、甲板にて一々正名氏と握手したる後前田君万歳を唱へ、船將さに發せんとするや何れも小蒸氣に歸り、互に帽を振り手巾を振りて別を惜みしが、船は艦がて雄壯なる黒煙を上げ滄溟萬里水天粵扉の間に向ふて進み去れり、今予此書を編するの時、氏は方さに米國を去りて英國に着し、以佛等の諸大州を経て遠からず歸朝さるべき報ありき、想ふに内地の遊説一段落を告げ更に海外の壯遊を企て無事歸朝の曉には本邦實業社會爲めに亦一大變動を見んことを期して待つべきあり、其後の報に依れば、氏は九月二十六日佛國馬耳塞出發歸朝の途に就き、十一月二日神戸上陸六日東京着の報あり、而して此書は偶然にも同氏歸朝の時を以て出版の業を了しぬ、



附録

### 雁信片々

前田之御遺囑を以て品評會之長子も固く安心仕候所此上十分御注意  
 され候所も目的を達し候はば其途中止し理窟に流れ候時は道理も死  
 物に付それには此忍の二節所要に御座候(下略)

二十九年三月十六日

東京にて

正名

前田之御遺囑を以て品評會之長子も固く安心仕候所此上十分御注意  
 され候所も目的を達し候はば其途中止し理窟に流れ候時は道理も死  
 物に付それには此忍の二節所要に御座候(下略)

二十九年四月四日

松山にて



〔前略〕到る處中々盛の事にて愈實業世界一變の場合國家の爲め幸福あり  
此度老兄御同行不致は残念に御座候是といふも團體に金がさい故にし  
て甚不幸の次第に存候〔下略〕

二十九年六月三十日

大分梓築にて

非常に相急き居候へども諸方より申參り候て相斷り兼實以心配仕候門  
司乗船は來十八日夜と存申候途中播州へ立寄り廿日神戸若廿二日京都  
若の豫定に御座候

二十九年七月三日

豊後佐伯にて

〔前略〕時勢もますます容易あらざる場合に有之一入實業者へ御注意被致  
度候〔下略〕

二十九年九月十一日

越後長岡真澄亭にて

只今新潟港より來り道中諸々にて談話今日午後三時會津若の筈こゝは  
會津より三里半の阪下町と申處にて休息中向ひの人々續々來り出發が  
けに認め申候〔中略〕

二十九年九月十五日

福島縣にて

御繁多之御事と嬉しく存上候小生も先比より出發の筈に候へども無止  
事件到來不日當地出發可致三十一日午前中に京都にて得拜顔度候御都  
台如何一月元旦は大阪へ出向二日神戸三四日には歸京の筈に御座候

二十九年十二月廿六日夜

東京にて

〔前略〕二週間ほど日夜事務所に詰切り家内どもへも面會ゆるく出來兼  
候位にて少し勞れ候心持致居候〔下略〕

三十年一月二十四日

東京にて



〔前略〕七月三十一日米國紐育出發今四時半英國リッセルポール港へ着可  
 致候有名の太西洋三日位は難儀致候へ共今日は誠に穩あり  
 米國滯留中一日として寸暇無之彼關稅、米布合併二問題事件の爲り出來  
 得る限り間接に盡力致し先以我政府の方針の宜しき爲め可也の結果に  
 て仕合に候

英國には二週間程滯留佛國より他に三四ヶ國かけまわり是非議會迄に  
 は歸朝致度候〔中略〕色々申上度義海山候へ共船きらひにて認め兼候又陸  
 地にては無人にて迎も書面十分相認候事出來不申時々老兄に知らせ候  
 はゞ面白く又悲しき事も多く有之候へども無是非候〔中略〕天津の知人方  
 へ宜敷御傳言奉願候

三十年八月七日於太西洋



明治三十年十月廿五日印刷

明治三十年十一月一日出版

〔非賣品〕

著 者

西 川 太 次 郎

滋賀縣東淺井郡大郷村大字南濱第百五十七番屋敷  
 當時大津町大字伊勢屋第六番屋敷寄留

發行兼印刷者

西 川 太 新

滋賀縣東淺井郡大郷村大字南濱第百五十七番屋敷  
 當時大津町大字伊勢屋第六番屋敷寄留

印刷所

近 江 新 報 社

滋賀縣大津町大字下堅田第卅三番屋敷



明治三十年十月廿五日印刷

明治三十年十一月一日出版

〔非賣品〕

著者

西川太次郎

滋賀縣東淺井郡大鄉村大字南濱第百五十七番屋敷  
當時大津町大字伊勢屋第六番屋敷寄留

發行兼印刷者

西川太新

滋賀縣東淺井郡大鄉村大字南濱第百五十七番屋敷  
當時大津町大字伊勢屋第六番屋敷寄留

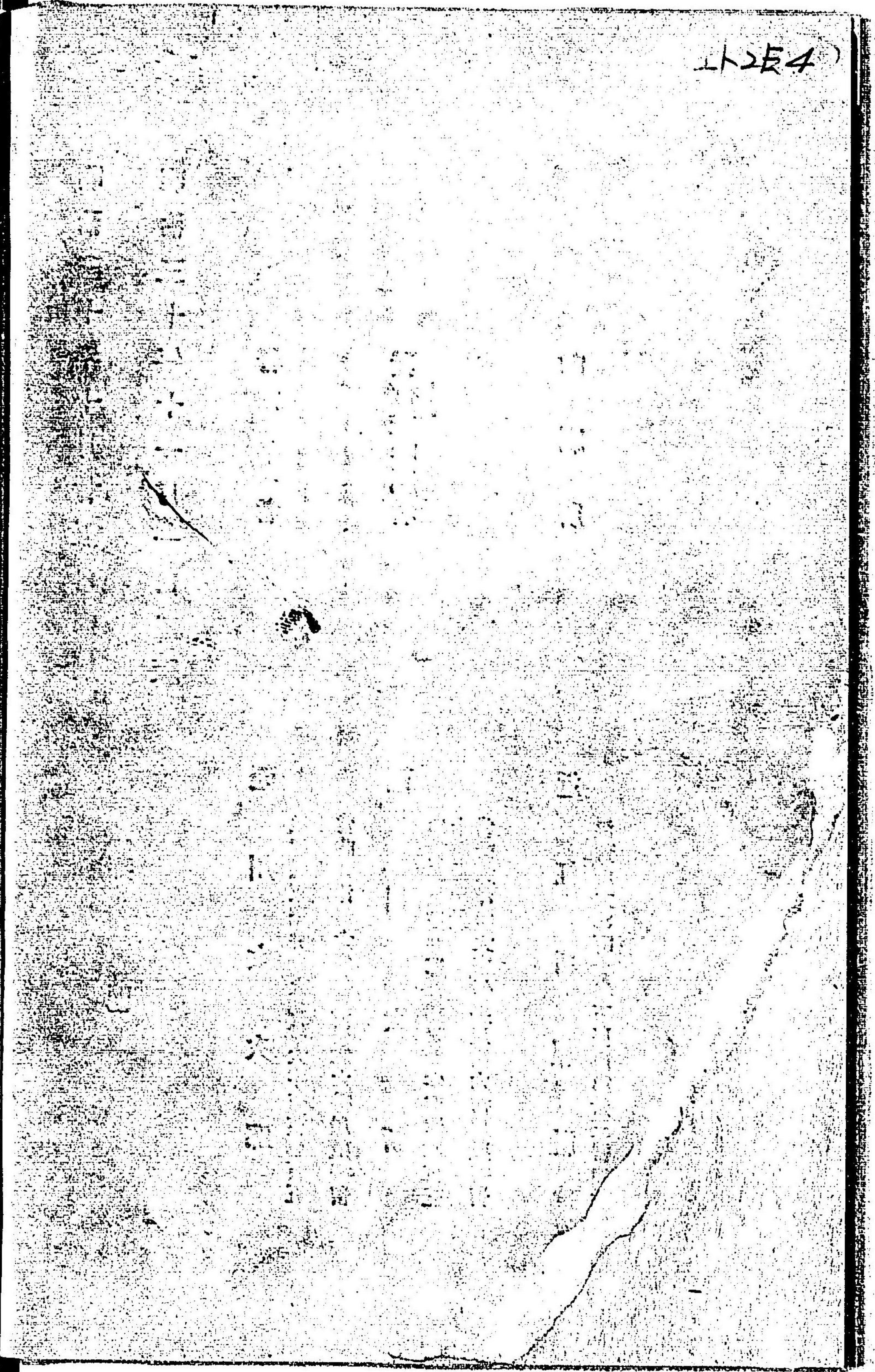
印刷所

近江新報社

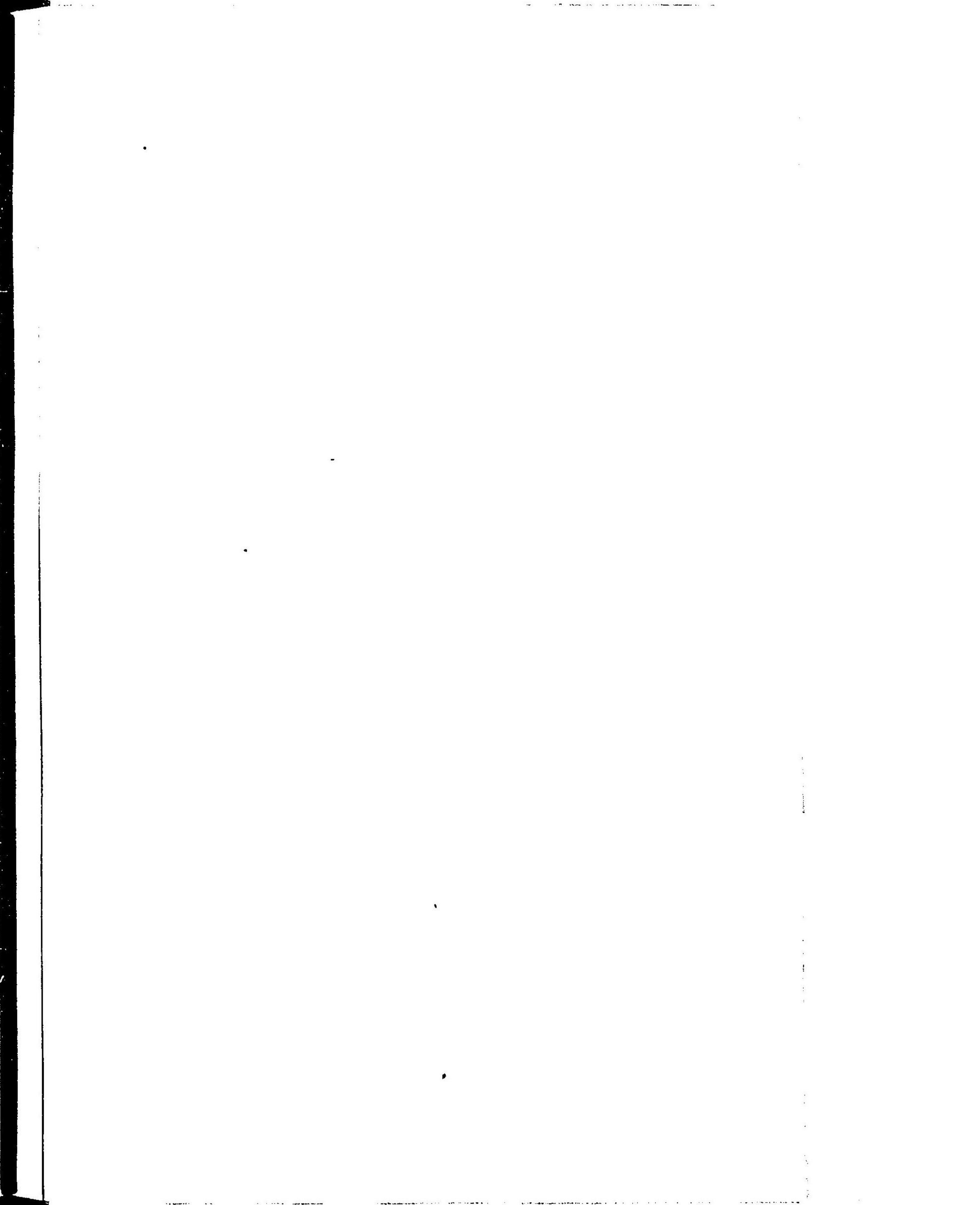
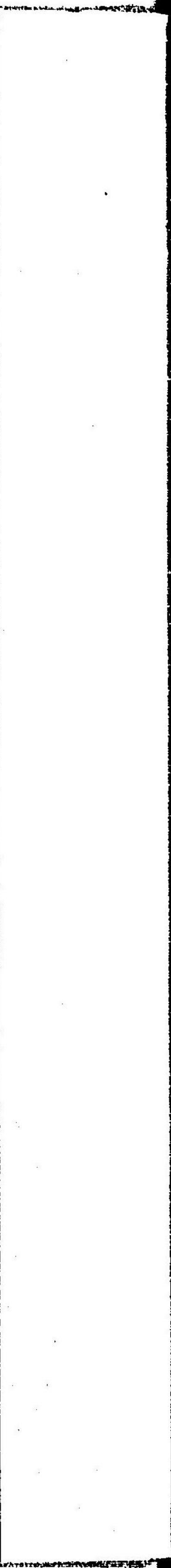
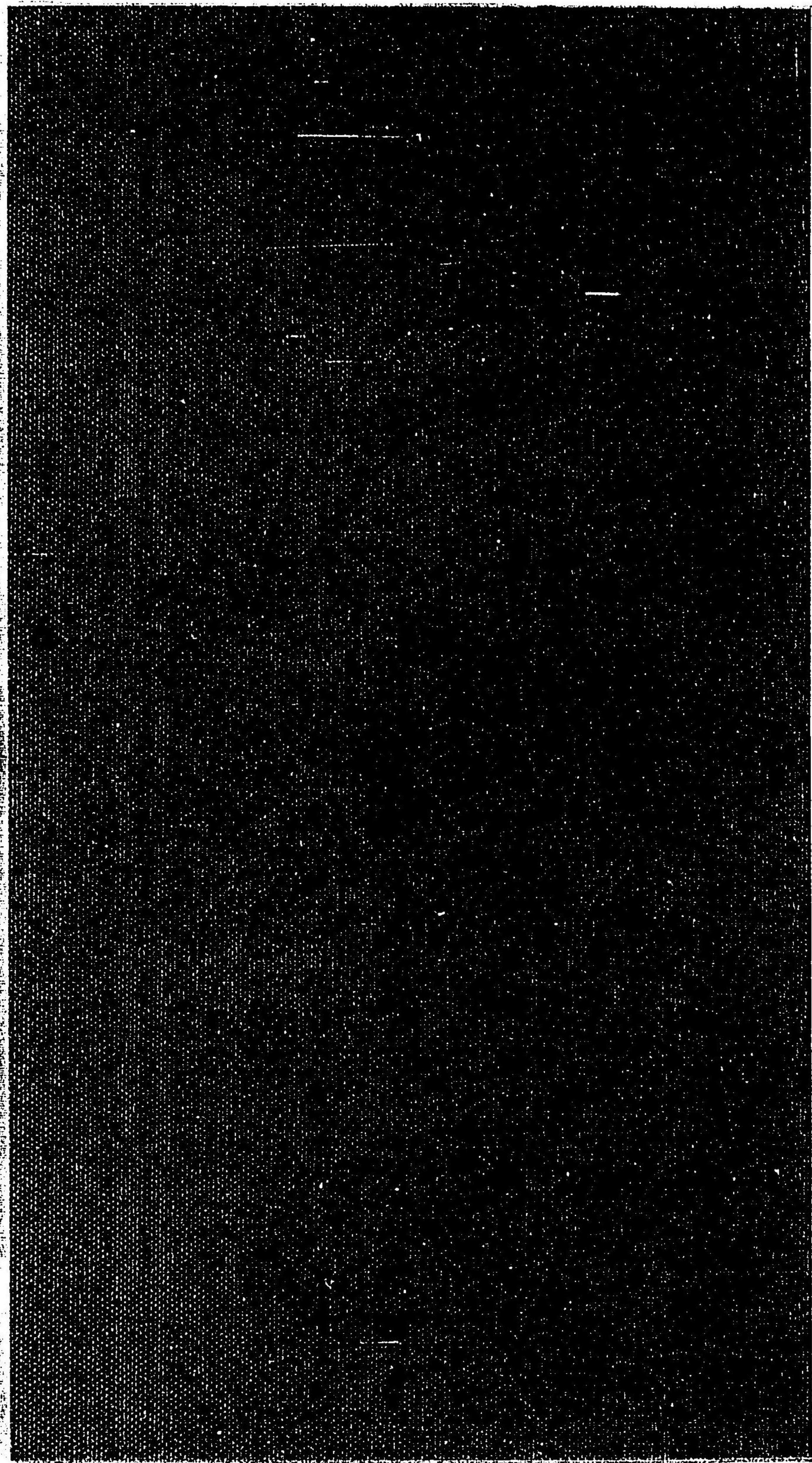
滋賀縣大津町大字下堅田第卅三番屋敷



1254



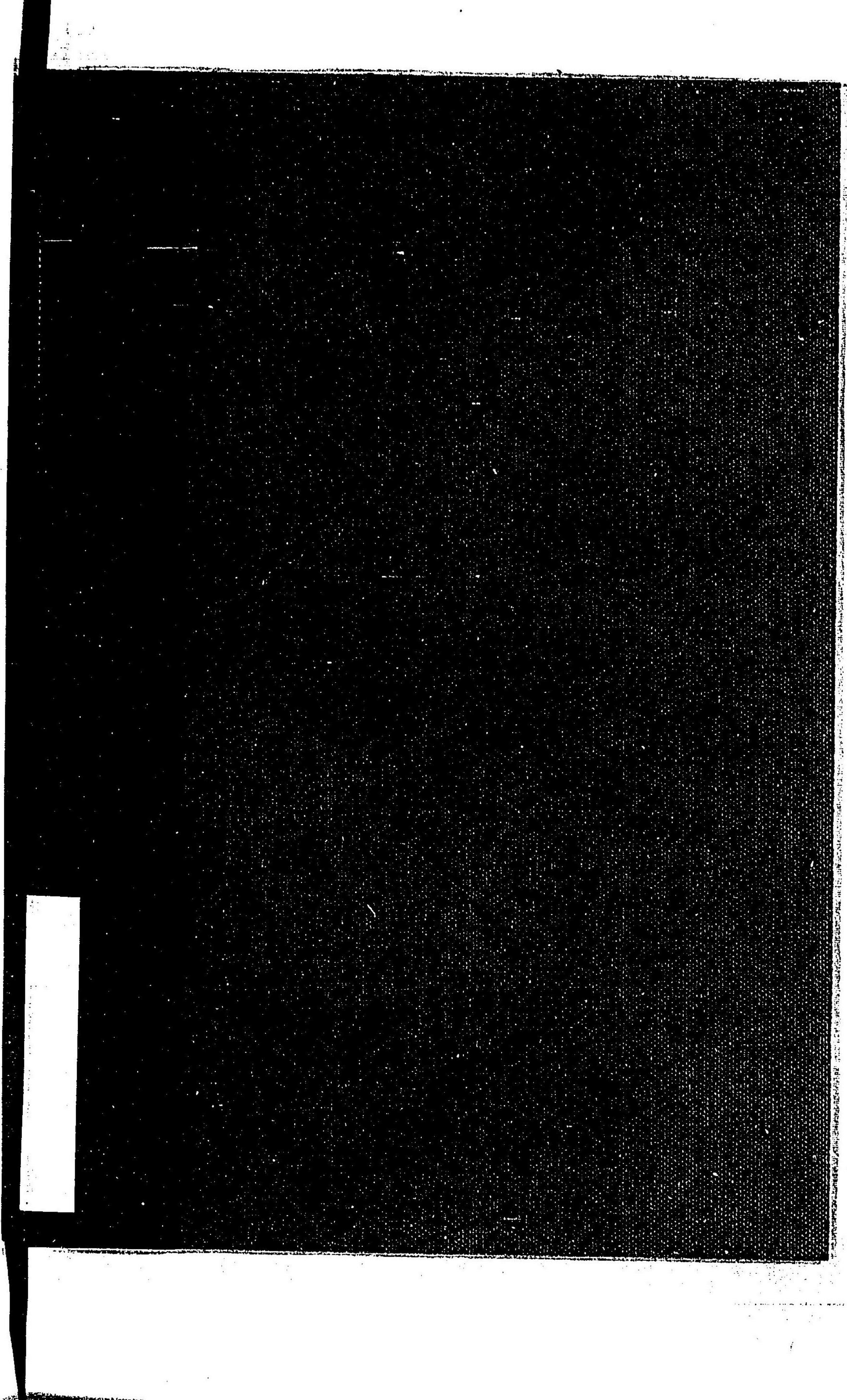






100  
100

100  
100





77  
101

国立国会図書館

022577-000-7

77-101

全国周遊日記

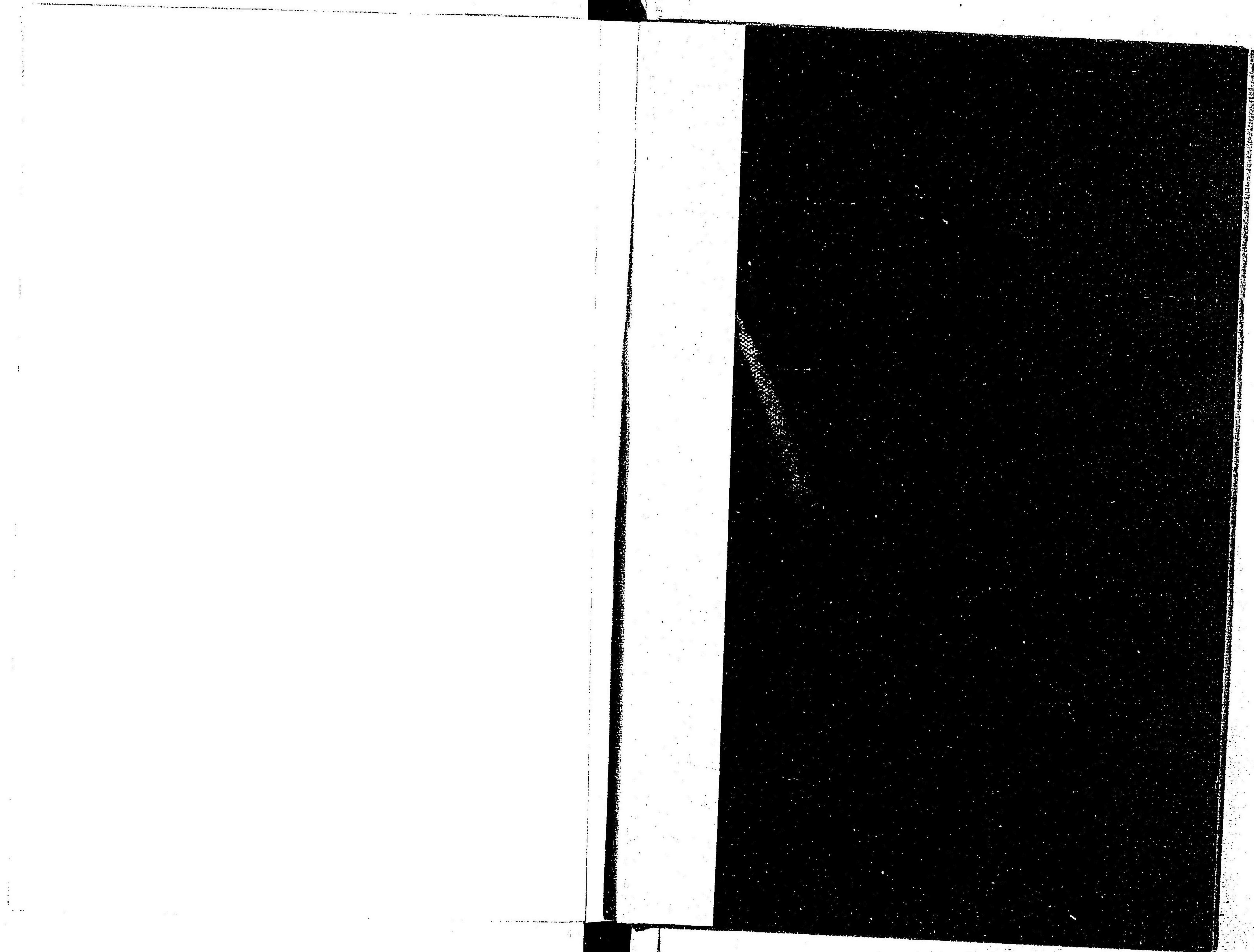
西川 太次郎 / 著

M30

ADB-0275









IE 2E 4